

第七章 榎本外務大臣時代

三九八 明治三十四年十月

榎本外務大臣ヨリ閣議ニ提出
セル條約改正ニ關スル斷案

條約改正ニ關スル斷案

別錄 廢棄ヲ以テ現行條約ヲ廢止スルノ意見書

ロ エ ス レ ル

前任外務大臣青木子カ英公使「フレーザー」氏ニ送付セシ
通商及航海條約草案竝ニ議定書²說明ニ對シ同公使ヨリ回答
ノ書翰³內ハ實ニ本年三月二十四日付ニシテ其後ハ書翰ノ往
復全ク絶ヘ膏テ五月二十九日青木子辭職本官乏ヲ現任ニ承
テヨリ今日迄條約改正談判ノ中絶セシコト殆ント六箇月ニ
垂ントス而シテ英公使ハ後任者即本官ヨリ同伴ノ行掛ニ對
シ何等ノ處置ニ出ツヘキ歟ヲ刮目シテ待テルハ言フヲ俟タ
ス他ノ各國公使モ蓋シ亦同懷ヲ抱キ居ルヘキハ疑ナシ
青木子ハ辭職後條約改正記事一部ヲ著シ以テ其就任以來取
扱タル一切ノ手續ト既決ノ閣議及英公使トノ往復書翰等ヲ
掲載シ以テ其關係書類ト一括シテ本官ニ送ラレシニヨリ本

官ハ順序ヲ逐テ事實ヲ細閱スルノ便ヲ得タリ
本官ハ右ノ書類ノ外更ニ御雇ノ米國法律家ニシテ井上大隈
青木三大臣ノ條約改正談判ニ始終關係シテ最モ經驗ニ富メ
ル「デニソン」氏ヨリ親シク其意見ト行掛リトヲ聽キ參照
熟慮スル所アリ以テ今斯ノ國家的重要問題ニ對シ下文ニ陳
述スル甲乙二様ノ斷案ヲ提出シ以テ閣議ノ決定ヲ請ハント
欲ス

改正談判ノ顛末

抑モ現行條約ハ舊幕以來ノ儘ニシテ我カ獨立國タルノ權利
ト利益上ニ兩ツナカラ害アルハ爭フヘカラサルノ事實ニシ
テ朝野共ニ夙ニ之カ改正ヲ冀望セリト雖トモ種々ノ障害內
外ヨリ紛起シテ其冀望ヲ果ス能ハス以テ今日迄依然舊ニ仍
ルハ我カ國家ノ爲メ實ニ痛歎ニ耐ヘス蓋シ現行條約ノ我國
家ニ害アル重要ノ點ヲ舉レハ國權上ニ於テハ

第一、領事裁判權ナル者アリテ存スルヲ以テ我國内ニ在
ル外國人ニ對シテハ畢ク我國法ヲ遵奉セシムル能ハ

サル事

第二、我憲法ノ精神タル兩議院ノ立法權ヲ多少檢束セラ
ル、事

第三、海關稅ヲ自定スルノ權利ナキ事

又國益上ニ於テハ

第一、現行ノ海關稅則ハ外國產出ノ貨物ニ對シ僅ニ從價
五分ニ過ルヲ得ス否實際ハ四分強タルニ過キス

第二、現行ノ條約ハ互相ノ主義ニ基カサルヲ以テ我國ノ
貨物ハ外國ノ海關ニ於テ他ノ最惠國ノ貨物ヨリ餘分
ノ稅ヲ課セラル、事

第三、外國船舶ハ噸稅、燈臺稅等ノ賦課ヲ免カル、事

第四、外國船舶ハ沿海貿易ノ特權ヲ有スル事

第五、外國人ハ一切ノ内地稅ヲ免除セラル、事

現行條約ノ我ニ有害ナルコト概ネ如是ヲ以テ之カ改正ヲ加
ヘントノ冀望ハ既ニ岩倉大使歐米行ノ時ニ起リ彼地ニ於テ
談判ノ端ヲ試タルモ實際何等ノ結果ヲ見ルヲ得サリキ爾後
十一箇年間時ノ政府專ラ海關稅增加ノ談判ニ從事シタリシ
モ亦其效ヲ見ル能ハス明治十五年ニ至テ外務卿井上伯ハ各
國公使ト條約改正豫議會ナル者ヲ開キ我國權回復ノ緒ヲ開

榎本外務大臣時代 三九八

キ以テ大ニ改正談判ノ歩ヲ進メ同十九年二十年間同伯ハ改
正談判ノ基礎ニ向テ全ク一個ノ生面ヲ開ケリ即チ領事裁判
權ノ廢棄ヲ以テ内地全開ノ交換物ト爲セルコト是ナリ當時
我國民法商法等ノ諸法典猶未ク編制ニ至ラサリシ而已ナラ
ス民刑兩法ノ裁判モ西人ノ觀察上ニ信ヲ得ル多カラサリシ
ヲ以テ法典ノ編制ト裁判官ノ組織上ニ於テ満足ノ結果ヲ得
ル能ハサリシハ亦恠ムニ足ル者ナシ然レトモ稅額ノ増加即
チ我國益上ノ談判ニ至テハ著シク歩ヲ進メタリシカ國權上
ニ對シ不完全ノ條項アリト云フヲ以テ談判中止トナリ同二
十二年大隈伯ノ談判ニ至テハ裁判權竝ニ其他ノ條件ニ於テ
モ前案ニ比スレハ更ニ一層ノ歩ヲ進メ既ニ歐洲一二ノ大國
政府ハ其成案ニ記名シ若クハ批准スルニ至リシモ猶我國權
上ニ對シ不完全ノ條項アルヲ免レスト云フヲ以テ是レ亦其
成績ヲ見ルニ及ハスシテ我ヨリ端ヲ開キ我ヨリ之ヲ閉ルノ
姿トナリテ止メリ

青木子大隈伯ノ後ヲ承ケ談判ヲ續クニ至テ遂ニ能ク殆ント
對等條約ニ近キ立案ヲ提出シ而シテ英政府ヲシテ一二條項
ヲ除外ハ其重要ノ部分ヲ承諾セシムルニ至リタルハ殆ン
ト意想外ノ結果ト謂ハサル可ラス是レ固ヨリ同子カ周到ノ

計畫ト熟練ノ談判ニ坐スルト雖トモ抑モ亦一ハ井上大隈二伯ノ苦心焦慮ヨリ生セシ結果ト一ハ亞細亞洲ノ近況英政府ヲシテ深省ヲ發セシメシニアラスヤ亞洲全局ノ近況トハ西伯里鐵道ノ起工是ナリ蓋シ西伯里鐵道ハ英國ノ東洋ニ於ル特權ヲ剝奪スルノ利器タルハ本官ノ贅言ヲ待タス故ニ青木子ハ自家有爲ノ器ヲ以テ目下乘ス可キノ機ニ會ヒタリト謂フモ不可ナキカ如シ(青木子カ英公使ニ送付セシ立案ハ之ヲ下文ニ附ス)

茲ニ本官ハ下文甲乙二様ノ斷案ヲ提出スルニ先ツテ關係ノ注意ヲ促ササルヲ得サル者アリ抑モ我ハ亞洲ノ一島國タリト雖トモ其實力ト名譽ニ於ル兩ナカラ歐米各國ト共ニ開明世界ノ列ニ相見テ敢テ一步モ譲ラザラント欲スル而已ナラス彼ニ凌駕スルヲ以テ自ラ期スルハ我カ一定不動ノ國是ニアラスヤ故ニ内地モ開放シテ以テ共ニ雜居スルヲ得セシムヘシ彼ノ才幹アル者ハ採テ以テ我用ニ供スヘシ彼ノ資本モ流用スヘシ彼ノ入籍結婚モ許スヘシ只彼ヲシテ我國法ヲ遵奉シテ敢テ違悖スルヲ許ササルノミ夫ノ彼ヲ輕ンシテ以テ妄ニ自ラ尊フ者ハ自暴ノ徒ナリ彼ヲ怖レテ以テ雜居ヲ忌ムカ如キハ自棄ノ徒ノミ惜哉目下我國猶未タ自暴自棄ノ徒

茲ニ又殊ニ關係ノ注意ヲ促ササルヲ得サルモノアリ抑現行條約ヲ改正スルコトハ從前ノ只一ノ冀望タリシニ過キカリシモ今日ハ變シテ爲ササルヘカラサルノ必要トナレリ國家必要ノ場合ニ際會スルトキハ國際條約モ廢棄スルヲ得ヘキハ古今各國公法家ノ是認スル所ナリ何ヲ以テ冀望ノ二字變シテ必要ノ二字トナレリト謂フニ他ナシ井上大隈二伯ノ改正案ハ我憲法實施前ニ係ルヲ以テ治外法權ノ存在スルヲ猶忍ヒ得ヘシト雖トモ今日ハ憲法既ニ實施セラレ立法ノ權全ク兩議院ニ屬スルヲ以テ凡ソ內國百般ノ事件ニシテ苟モ法律ノ範圍ニ屬スルモノハ唯我カ議院アルヲ知ルノミ外國アルヲ知ラサルナリ故ニ立憲政體ノ下ニハ治外法權ノ存スルヲ許サス此二者ハ實際相抵觸スル水火ノ如キヲ以テ現行條約ハ到底數年ヲ出スシテ我ヨリ廢棄ヲ各條約國ニ公言セサルヲ得サルニ至ル可シ

然リト雖トモ條約廢棄ノ件タル言フニ易ク行フニ難シ必ラスヤ國家ノ必用目前ニ迫リテ他ヲ顧ミルニ暇アラサル場合ニ於テ始メテ舉行スルヲ得ヘキ者ナリ是故ニ本官ハ國家ノ爲ニ計ルニ大體青木子ノ立案ヲ決行スルヲ以テ得策ト爲ス者ナリ只該案ハ未タ各條英公使ノ承諾ヲ得クルニアラス加

勘シトセス是レ我カ一定ノ國是ヲ解セサル者ナリ此輩ノ頑夢ヲ破テ以テ國是ノ在ル所ヲ知ラシムルハ朝ニ在テハ政府ノ任ナリ野ニ在テハ先覺ノ任ナリ而シテ之カ目的ヲ達スルノ捷路ハ蓋シ現行ノ條約ヲ改正シテ以テ一日モ早く對等ノ地步ヲ占ムルニ如クハナシ之ヲ樹ヲ種ルニ譬フ一日ヲ遲フスレハ從テ生長ノ度一日ヲ縮ム向キニ明治十五年井上伯ノ改正案ヲシテ十二箇年ヲ期シテ實施シタランニハ目下彼ニ對スル我カ裁判立法及關稅ノ三權回復ノ期ハ年ヲ指シテ數ヘ得ヘク加之今日迄ニハ約ネ三千萬圓ノ收入ヲ増加セシナラン噸稅ノ收入ハ以テ燈臺局ヲシテ收支對償ノ局タルヲ得セシメシナラン其十九、二十年間同伯ノ改正案ニ於ケルモ亦之ニ準スル結果アリタル可シ又二十二年大隈伯ノ案ヲ實施シタランニハ目下我ハ三年ヲ期シテ彼ニ對スル裁判立法ノ兩權ヲ復シ十年ヲ期シテ稅權ヲ復スルヲ得而シテ又同時ニ歲入ニ於テ每年約四百五十萬圓ノ海關稅ト噸稅ニ於テ十二萬五千圓ヲ増加セシナラン換言スレハ我政府ハ通常ノ歲入額ニ影響ヲ及ホスコトナクシテ地租百分ノ二半ヲシ百分ノ二、四分一ニ減スルヲ得タリシナラン然リト雖トモ往ク者ハ已ニ逐フヘカラス

フルニ本官ノ意見ニ據レハ其議定書第一條第一項ヲ變換シ前ヲ併セテ悉ク英政府ニ同意セシムルヲ以テ甲ノ斷案トス諸フ先ツ青木子ノ立案ヲ剖析シテ利害ノ在ルトコロヲ詳ニセン

青木子立案ノ剖析

抑モ我國現行條約ヨリ一躍シテ完全無缺ノ對等條約ヲ結ヒ絲毫モ差違アルヲ容サストハ到底言フヘクシテ行フヘカラサル事ニ屬スルハ苟モ彼我ノ情勢ヲ詳ニスル者ノ能ク知了スル所ナリ又完全無缺ノ對等條約ヲ結フヲ得ルニアラサレハ寧ロ現行條約ノ儘ニテ日ヲ送ラントノ說ヲ持スル者アラハ是レ國家ノ休戚ヲ度外視スル者ナリ是レ彼ヲ利スルヲ憤テ我ニ害アルヲ意トセサル者ナリ青木子ノ立案ハ殆ント對等條約ノ域ニ隣スル者ト稱スルヲ得ヘシ何トナレハ該案ハ我國權ト國益上ニ於テ前文列舉ノ弊害ヲ全ク除却シテ一モ存セシメサレハナリ請フ詳ニ之ヲ論セン該案ニ據レハ

新條約ヲ結テヨリ五箇年ニシテ裁判ト立法ノ權全ク我ニ歸シ六箇年ニシテ海關ノ稅權モ全ク我ニ歸シ十二箇年ニシテ條約ノ義務ハ新舊ヲ問ハスシテ一切烏有ニ歸シ

又土地所有權ノ如キ（居留地ヲ除キ）或ハ礦業、結社或種ノ株券所有權ノ如キ悉皆我國法ノ定ムル所ニ遵由スヘキヲ以テ別ニ條約ニ記載セサル事

又關稅及噸稅ノ表ニ於テハ大隈伯ノ條約案ニ附錄スル者ト同シ

又沿海貿易ノ期限ヲ六箇年ニ縮メ大隈伯ノ案ニハ十二年且ツ其場所ハ橫濱、神戸、長崎ノ三港ニ減セリ

又前文ニ掲ケシ如ク現行條約ハ我商品ニ對シ互相最惠國ノ待遇ヲ受クヘキ明文ナキヲ以テ實利上害ヲ被ル少カラス譬ハ現ニ埃、佛、獨、伊、瑞、典等諸國ニ於テハ其海關稅則ニ普通ト約定ノ二種アリ而シテ昨二十三年中我國ヨリ以上諸國ヘ輸入セシ商品ノ原價ハ九百七十壹萬四千二百七十八圓ナリシカ以上諸國ハ我商品ニ普通稅則ヲ課セリ然ルニ青木子ノ立案ハ互相ノ主義ヲ執レルカ故ニ前記ノ如キ不公平ナル損害ヲ被ルノ虞ナクシテ定約稅則ニ因テ課稅セラル、ノ利益アルヲ以テ貿易ノ高モ亦タ從テ増加スヘキヤ疑ナシ

又現行條約ニハ我國ヘ輸入ノ商品ハ其產出國ノ何タルヲ問ハス輸入者ノ國籍ニ由テ稅則ヲ適用セサルヘカラ

頒布セシ諸法典ヲ實施スル事

以上臚列スル所ノ要求ナル者ヲ簡短ニ剖析スレハ左ノ如シ第一ナル現行旅行免狀ノ制タルヤ從來ノ經驗ニ徴スルニ別ニ何等困難ナル事件ヲ惹起セシコトモ無ケレハ今其制ヲ擴張スルモ決シテ不都合ナカルヘキ而已ナラス反テ實際我國ノ爲メ利スル所アルヘシ何トナレハ其免狀ハ一年間保續スルヲ以テ旅行ノ度毎ニ必ラス請願スルノ煩ヲ省キ得ルヲ以テ旅客ニ便アレハナリ今從來ノ例ニ由リ本年中央政府及各開港場地方官ヨリ發スヘキ内地旅行免狀ノ數ヲ推算スルトキハ殆ント九千ニ達ス可シ而シテ此免狀ヲ受テ旅行スル者ノ費ス所ハ概ネ六百萬乃至壹千萬圓ノ額ニ上ルヘシ是レ旅行免狀ノ制アルニヨツテ我國内ニ收入スルノ利益ナリ

第二ハ現ニ已ニ我力臣民力訂盟各國ニ於テ享有スル所ニシテ我力内國ヲ開放シタル上ハ同様ノ利便ヲ彼ノ臣民ニ與フル迄ノコトニテ別ニ詳論スルノ要ナシ

第三モ亦外國人カ我國ニ於テ業已ニ享有スル所ノ特權、特許ヲ更ニ繰返シタルニ過キス之ニ反シテ我日本臣民ノ新ニ外國ニ赴ク者ノ爲ニハ互相ノ權利ヲ慥メタルモノト看做ヲ得ヘシ

スト雖トモ青木子ノ立案ハ之ニ反シ輸入ノ商品ハ其輸入者ノ何國人タルヲ問ハス只其商品產出ノ國籍如何ヲ問フノミ故ニ無條約國產出ノ商品ヲ有條約國ノ人民我國ニ輸入スルトキハ我ハ之ニ普通稅ヲ課スルヲ得ヘシ故ニ新案ヲ實施スルトキハ我政府ハ普通定約二種ノ稅則ヲ施行スルノ便利アリ是レ現行條約ニテハ爲シ得ヘカラサル件ニ屬ス

諸新案ニ由テ我力領得スヘキ利益ハ概ネ右ノ如ク而シテ之ニ對シ彼ヨリ要求スル條件ヲ舉レハ左ノ如シ

第一、新條約實施ノ日ヨリ五箇年間ハ現行旅行免狀ノ制ヲ擴張シテ一箇年間保續スルヲ得ル事

但シ現行ノ制ハ六箇月ヲ限ル

第二、領事裁判權ノ消滅訂約後六年スルト同時ニ通商、旅行及住居ノ爲メ我力全國ヲ開放スル事

第三、締盟國臣民ノ生命財產ニ對シ他ノ文明諸國カ常ニ外國人ニ與フル所ト同一ノ保護ヲ與フル事

第四、版權、專賣特許、商標、意匠、諸權ニ對シ保護ヲ與フル事

第五、領事裁判權ノ消滅ニ先タツテ少クモ一年前ニ近頃

第四ハ我國ニテ未タ發明ノ乏シキ今日ニ於テハ實際日本人ヨリハ寧ロ外國人民ニ利スルトコロ多キハ自然ナレトモ固ヨリ互相ノ主義ニ基クモノナレハ彼ニ於テモ日本人ノ有スル版權及其他ノ諸權ニ對シテ保護ヲ與フルハ勿論ニシテ前文四箇條中特ニ指シテ讓與ト名ツクルヲ得ヘキモノハ只此一件アルノミ而シテ此讓與タルヤ現今殆ト泰西各國一般ニ行ハル、所ニシテ千八百八十三年佛國巴里ニ於テ專賣特許權及商標保護ニ關シ萬國聯合ノ約アリ又千八百八十六年瑞士國「ベルン」ニ於テ版權保護ニ關シ萬國聯合ノ約アリ此文物進歩ノ世ニ方テハ決シテ過分ノ讓與ト稱スルヲ得サルナリ

第五ハ本官ハ之ヲ以テ強テ過分ノ要求ト看做サス何トナレハ訂盟各國カ其裁判權ヲ撤去シ而シテ其臣民ヲシテ他國ノ法律ニ服從セシムルコトヲ肯ンスル場合ニ臨ミ其本國ノ法律ニ代ツテ如何ナル法律ノ下ニ支配セラルヘキ歟ヲ實見スルノ機會ヲ得ント欲スル者ナレハ無理ナラヌ要求ニ屬スレハナリ

以上剖析スル所ニ由テ判斷ヲ下セハ青木子ノ立案タル從前ノ諸案ニ比シテ遙カニ我日本ニ利スル所アルヲ知ルヲ得ヘ

シ「デニソン」氏曰ク「英政府カ五箇年前迄ハ談判スルコトヲサヘモ拒絶セシ條件ヲ今日忽然之ヲ承諾セント欲スルノ色アルハ畢竟西伯里鐵道ノ刺激ニ坐セリ然レトモ彼設シ今ヨリ五年後ニ於テ西伯里鐵道敷設ノ舉タル東洋ノ貿易ト政略上ニ豫期セシ程ノ影響ナキヲ實現セハ今日承諾セントスル條件ヲ其時ニ臨テ拒絶スルモ亦知ルヘカラス」ト此言ノ當否ハ暫ラク措キ今日ハ英政府ノ承諾ヲ得ルノ好機會タルヘキハ蓋シ眞ナルニ近シ英政府承諾セハ塙、伊二政府モ亦承諾スヘク（伊公使ノ如キハ再三）而シテ他ノ諸小國政府モ亦一轍ニ出ツヘキヤ疑ナシ獨、露、米ノ三國政府ハ大隈伯ノ案ニ對シ英政府ノ意向如何ニ關セスシテ已ニ調印セシ程ナルヲ以テ其同意ヲ表スヘキハ豫測スルヲ得ヘシ唯佛政府ニ至テハ或ハ一時異議ヲ唱フルモ知ルヘカラスト雖トモ到底承諾セサルヲ得サルニ至ルヘシ是故ニ本官ハ目今ヲ以テ條約改正ノ爲メニハ再得シ難キノ時機ト認ムル者ナリ況ンヤ英公使ハ懇篤ノ精神ヲ以テ三月二十四日以來我政府ノ回答ヲ待ツアルニ於テヲヤ雖然本官ノ所見ニハ向後商法及民法ノ實施タル一二年内ヲ期シテ能ク豫期ノ好結果ヲ得ヘキ哉否未タ全然疑國ナキ能ハス苟モ疑國アリトセハ其結果ノ

事

第二、他ノ歐米各國政府カ日本ニ於テ施行スル所ノ領

事裁判權ヲ繼續スル間ハ消滅セサル事

該案ニシテ行ハル、ヲ得ハ我政府ハ一面ニ於テハ有益ノ通商條約ヲ舉行スルヲ得一面ニ於テハ領事裁判權ヲ廢止シテ内地ヲ開放スルノ期限ヲ隨意ニ公言スルヲ得ヘク（勿論締約五年後）而シテ今日ヨリ豫メ其期限ニ束縛セラル、コトナシ本官以爲ラク該案ハ締盟各國政府ノ承諾ヲ得ルニ難カラサルヘシ

夫レ青木子ノ新案ト此ノ些少ノ修正案トニ論ナク我レ今締盟各國政府ノ同意ヲ得テ以テ首尾能ク現行條約ヲ改正スルヲ得ハ此事實ニ我日本帝國ノ實益ト名譽ノミニ止ラス抑モ亦亞洲全局文明史上ノ一大名譽ト稱スルヲ得ヘシ何トナレハ亞洲屈指ノ大國タル土耳機ノ如キ清國ノ如キ皆我ニ先タツコト數百年若クハ數十年前ニ於テ業已ニ歐米各國ト締盟交通セシニ拘ラス彼等ハ治外法權ノ羈輓ヲ脱シテ以テ完全無缺ノ獨立國タルヲ得ルノ冀望ニ於ケル未タ夢想シ能ハサルノ件ニ屬スレハナリ

乙ノ斷案

榎本外務大臣時代 三九八

如何アルヘキニ關セス締盟各國ニ向ヒ強テ今ヨリ豫メ某年某月ヲ期シテ内地ヲ開放セントノ約ヲ立ルハ策ノ得タル者ト謂フヲ得サルニ似タリ於是乎本官ハ甲ノ斷案ヲ提出シテ以テ閣議ノ賛成ヲ請フモノナリ

甲ノ斷案

青木子ノ新案タル議定書第一條第一項ヲ左ノ如ク改正スルニ在リ

日本政府ハ本日記名シタル通商航海條約實施ノ日ヨリ五年ヲ經過シタル後ハ何ノ時ヲ問ハス日本ニアル英國臣民ニ對シ英國カ現ニ施行スル所ノ領事裁判權ニ關シテ兩國間ニ存在スル條約及其他ノ定約ノ箇條ニ終ラ告ルノ希望ヲ英國政府ニ向テ通知スルノ權ヲ有シ而シテ此通知後十二箇月ヲ經過シタルトキハ領事裁判權ハ自然消滅ニ歸シ且ツ現ニ英國臣民カ領事裁判權ノ一部分トシテ享有シ及該權ノ施行上ヨリ享有スル所ノ一切ノ特權特免モ亦消滅ニ歸スヘキコトヲ兩國政府間ニ於テ約定ス但シ前記英國ノ領事裁判權ハ

第一、日本ニ於テ已ニ頒布シタル法典ニシテ少ナクモ十二箇月間實施シタル後ニ非レハ消滅セサル

此案ハ是迄ノ談判トハ全然其基礎ヲ異ニスル者ニテ現行條約ヲ改正スルニアラスシテ之ヲ廢棄スルニ在リ即チ現行條約ノ性質タル我日本ノ現狀（憲法實施後今日ノ世態）ニ適セサルヲ以テ譬ヘハ今ヨリ六年後ニ至ラハ我政府ハ一年ノ前知フ以テ現行條約ヲ平和的ニ廢棄スルノ權利竝ニ必要アルコトヲ締盟各國政府ニ認諾セシムルノ目的ヲ以テ新ニ商議ヲ開クニ在リ而シテ之カ論理ノ要點ハ前述ノ領事裁判權ト立憲政體トハ到底並行スル能ハスト云フノ一語ニ止レリ抑モ我國家必要上ヨリシテ論スルトキハ各國政府ノ意向如何ヲ問ハス其條約ヲ廢棄スルノ權アルハ今更ニ喋々スルヲ待タス何ントナレハ此權利タルヤ國際公法學者ノ一般ニ許ス所ニシテ歐米各國史上其例ニ乏シカラサレハナリ然リト雖トモ廢棄ノ事タル言フニ易ク行フニ難キハ前ニ已ニ之ヲ言ヘリ故ニ該案ハ平和的ノ手段ヲ以テ各國政府ノ承諾ヲ得テ以テ我要求スル所ヲ達センコトヲ勉メサル可ラス平和的ノ手段トハ此廢棄談判ノ際無論彼ヨリ要求スル條件ニ對シ我ヨリ多少讓與スル所ナカルヘカラサルヲイフ譬ヘハ

第一、現行條約ヲ廢棄スルト同時ニ内地ヲ開放シテテ彼ニ通商旅行及住居ノ權ヲ與フル事

第二、現行條約已ニ其終ヲ告ケ而シテ新條約未タ締結スルニ至ラサル際ニハ通商航海ニ關スル事項ハ總テ互相ノ主義ニ基キ最惠國ノ待遇ヲ與フヘキコトヲ保證スル事

第三、我政府ハ現行條約ノ終ヲ告クルト同時ニ諸工業ニ屬スル所有權及版權ニ關スル列國同盟ニ加入スヘキコトヲ約スル事

第四、現行條約ノ繼續スル間ハ現行旅行免狀ノ制ヲ擴張スル事

第五、我政府ハ新法典ノ實施後少クモ十二箇月ヲ經ルニアラサレハ條約ヲ廢棄セサル事

各國政府ノ要求スル所大約以上五箇條ニ過キサレハ我カ政府ハ更ニ躊躇スル所ナク之ヲ肯諾シテ可ナリト思考ス何トナレハ此案ニシテ各國政府ノ承諾スル所トナラハ我政府ハ六箇年後何時ニテモ現行條約ヲ終了シ得ルノ權ヲ我ニ掌握スルヲ以テ其時ニ際セハ内外ニ顧慮スル所ナク殆テ完全無缺ノ條約ヲ結ビ得ヘキノ望アレハナリ

但シ各國政府若シ該案ヲ承諾シタルトキハ現行條約ハ告終ノ期限迄依然勢力ヲ有スト雖トモ海關稅則ハ甲案ニ附

屬スル者ヲ實行スルノ見込ナリ

甲乙二案ノ難易及其結果

甲案ハ穩和手段ニシテ殆ント其成功ヲ豫期スルヲ得ヘキヲ以テ本官ハ之ヲ主張スル事前已ニ之ヲ記セリ然レトモ我政府如シ目下ノ輿情條約改正ヲ計ルニ便ナラスト顧慮シ且ツ其年限ヲ期シテ現行條約ヨリ一躍シテ完全無缺ノ對等條約ヲ結ハント欲セハ只此乙ノ一案アルノミ然リト雖トモ此案タル一面ハ是ヨリ先キ我ヨリ提出セル案ヲ俄然一變スルヲ以テ英政府ノ同意ヲ得ヘキ哉否甚タ疑ナキ能ハス熟ツラ思フニ今俄カニ前任者垂成ノ談判ヲ離レテ此案ヲ提出セハ彼レ恐クハ我談判ノ基礎當局者ノ代ルト共ニ變化スルヲ唱ヘ以テ向後談判ヲ開クヲ阻絶スルモ亦未タ知ル可ラス斯ル場合ニ於テハ最早各國政府ノ意嚮如何ニ拘ハラス我ハ單獨ニ其年後ハ現行條約ヲ廢棄スルノ必要ニ迫レリト豫メ公然通知シ置クノ外別ニ手段ナカルヘシ然レトモ之カ爲メニハ固ヨリ應變ノ準備ヲ設ケ以テ各國連合シテ我ニ迫ルノ示威ニ對ルトコロナカルヘカラス應變ノ準備トハ到底國防準備ノ一途アルノミ而シテ本官ハ似是手段ニ移ルハ過激ニシテ國家ノ爲メ得策トセサル者ナリ

終ニ臨テ一考ヲ要スルハ甲乙二案何レニモセヨ這回ハ確乎不動ノ精神ヲ以テ談判ヲ結了セサル可ラス何トナレハ是迄常ニ我ヨリ案ヲ立テ我ヨリ之ヲ撤シ各國政政ニ信ヲ失ヒシコト一ナラサリシヲ以テ今又前轍ヲ踏ムコトアランカ各國政府ハ最早向後若干年間ハ我ノ開談ヲ拒絶スヘキヤ疑ナシ

外務大臣 榎本 武揚

明治二十四年十月

(別紙一)
大日本國大不列顛國通商及航海條約草案

註 本文省略ス 青木外務大臣時代三七七參照

(別紙二)
大不列顛國政府ノ條約改正對案ニ就キ帝國政府力提出スル修正説明書

註 本文省略ス 青木外務大臣時代三七七附屬書參照

(別紙三)
明治二十四年三月二十四日附 英國公使ヨリ青木外務大臣宛來翰

註 本文省略ス 青木外務大臣時代三七八參照

別錄

廢棄ヲ以テ現行條約ヲ廢止スルノ意見書

ロ エ ス レ ル

原案ノ要旨トスル所ヲ考覈スルニ日本ハ一定ノ期限例ヘハ

蹴シタルノ轍ニ陥リ其ノ當時ノ諸案ニ於ケルト同一般ノ失敗ヲ取ルニ至ランコトヲ 夫レ然リ故ニ此ノ案ヲシテ苟モ其ノ效ヲ奏セシメント欲セハ之ヲ權利ノ基礎ノ上ニ置クヲ以テ第一ノ要件ト爲サルヘカラス而シテ帝國政府ハ先ツ從來ノ談判ハ悉ク利害ノ點ニ於テ失敗シタルニ因リ今ヤ其ノ固有不可疑ノ權利ヲ執行スルノ已ムヲ得サルニ遭遇シタル旨ヲ揚言セサルヘカラス蓋シ帝國政府ノ眞ニ排棄手段ヲ以テ現行條約ヲ廢止スルノ權利ヲ有スルコトハ獨リ之ヲ論證スルコト容易ナルノミナラス既ニ屢々之ヲ説明シタルコトアリ

凡ソ條約ハ其ノ明文若ハ其ノ性質ニ依テ其ノ效力ノ基礎トスル所ノ事實既ニ變更スルトキ殊ニ其ノ一方ノ邦國ノ内政ノ組織ニ大變動ヲ生シ會テ條約ヲ締結シタル當時ト事情全ク其ノ趣ヲ異ニシ隨テ該條約ヲ實施スルコト能ハサルニ際シテハ之ヲ無効ト爲スヲ得ト云ヘルハ國際法論者ノ悉ク是認スル所ナリ

ホ、イ、ト、ン、著國際法概論（一千八百八十年倫敦ポイド版）第二百六十三節並第二百七十五節ヲ參看スヘシ他ノ論者モ多クハ同一ノ說ヲ持セリ

版 第四百五十八節ニ曰

一國ノ條約ニシテ其ノ憲法若ハ臣法上必要ナル發達ト併立スルコト能ハサルニ至ルトキハ該國ニ於テ之ヲ排棄スルヲ得

フ、ヒ、モ、ア、（第二卷第百九頁）

事情繼續ノ要件ハ何等ノ契約ニモ默諾ヲ以テ必ス附隨スルモノトス

一千八百七十一年ノ倫敦會議ニ於テ露西亞カ曾テ一千八百五十六年ノ巴里條約ノ或ル條件ヲ排棄シタルコトヲ議スルニ當リ英國ノ全權大臣ハ實ニ左ノ原理ヲ唱道シ他ノ全權大臣悉ク之ニ和同セリ

曰何等ノ邦國ト雖モ平和ナル商議ヲ以テ條約國ノ同意ヲ得ルニアラサレハ條約ノ條件ニ對スル責任ヲ免ル、コト能ハサルハ國際法ノ一大原理ナリトスト

然レトモ此ノ原理ハ排棄ノ有無ニ關スルニアラス單ニ其權利ヲ執行スルノ方法ニ關スルモノ、ミ則チ排棄ヲ必要トスル場合ニ於テハ其ノ旨ヲ他ノ締約國ニ通シテ其ノ承諾ヲ求ムヘシト云フニ過キサルナリ若シ和衷協定ノ望ナキニ際シテハ排棄ノ權ハ決シテ之カ爲ニ無効ニ歸スヘキニアラス締

ハ、イ、ツ、ク、著 國際法（一千八百七十八年倫敦ベーカー版）第一卷第八章ニ曰

締約國ノ一方ノ内政ノ組織ニ變更ヲ生シ新事情ノ下ニ於テ條約ヲ實施スルコト能ハサル場合ニ於テハ假令其ノ條項ノ或ルモノハ永久ヲ期スルモノナリト雖モ條約ノ義務ハ無効ニ歸スヘシ

ホ、イ、ル、著 國際法（一千八百八十四年オックスフォード第二版）第二篇第十章第三百二十一頁並第三百二十七頁ニ曰

若シ締約國ノ一方若ハ雙方ニ於ケル格段ナル政體ノ繼續ヲ以テ條約ノ要件ト爲ストキハ、一方ニ於テ其ノ國憲ニ變更ヲ生スルト同時ニ該條約ニ對スル義務ヲ免ル、コトヲ得ヘシ

ハ、フ、テ、ル、著歐洲國際法（一千八百六十七年第五版）第九十八節ニ曰

條約締結ノ當時ニ存立シ、且條約双方ノ意志ニ於テ默諾ノ要件ト爲シタル事情ニシテ既ニ變更スルトキハ條約國ノ一方ハ該條約國ニ對スル義務ヲ免ル、コトヲ得ブル、ン、チ、ユ、リ、著 國際法典（一千八百七十四年巴里出

約國ノ一方ニ於テ自ラ之ヲ執行スルヲ得ヘキモノトス 故ニ倫敦會議ニ於テ露西亞ニシテ若シ普魯政府ノ調停ニ頼リ他ノ各國ノ穩和ナル承諾ヲ得ルコト能ハサリシナラハ必スヤ巴里條約排棄ノ權ヲ主張シテ止マサリシナラン 蓋締約國ノ一方ニ於テ或ル條項ノ義務ヲ免レンカ爲ニ正當ナル要求ヲ爲スト雖モ他ノ一方ニ於テ之ヲ拒絕スルトキハ條約排棄ヲ行フコト往々之レアリトス

今ヤ日本ト泰西諸國トノ間ニ於ケル條約ヲ熟按スルニ該條約殊ニ其ノ領事裁判權ニ關スル條項ニ至テハ其ノ當時ニ於テ存立シタルモ既ニ今日ニ於テ其痕跡ヲ留メサル一種ノ事情ヲ以テ其ノ主眼トナシタルモノタルハ炯焉掩フヘカラサルノ事實ナリトス蓋其ノ事情トハ何ソ曰政體法律及司法ニ關シ東西其ノ制ヲ異ニシタルヲ謂フ是ナリ 爾來物換り星移リ日本ニ於テハ銳意泰西ノ法律並行政及司法ノ制度ヲ輸入シ殊ニ輓近憲法制度ヲ設備シ昔日ノ事情ハ既ニ一變シテ全ク其ノ跡ヲ遺サルニ至レリ而シテ憲法制度ノ領事裁判制度ト併立スルヲ得サルコトハ今復タ特ニ説明スルヲ要セサルナリ 然レトモ試ニ原案ニ敘述スル論點ノ外ニ於テ之ヲ論センニ抑々外國君主カ日本ノ版圖内ニ於テ燦然タル憲

法ノ明條アルニ拘ラス施政ノ權ヲ執リテ憚ラサルハ果シテ何等ノ理由ニ據ル乎日本憲法第四條ニ依レハ 天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此ノ憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行フトアリ既ニ此ノ明條ノ存スルアリ以テ外國君主カ日本ニ於テ領事裁判制ニ於テ日本ノ法律ニ拘ラス日本ノ代議體ニ對シテ一ノ責任ヲ負フコトナク又往々日本ノ法律ニ背違シテ其ノ主權ヲ行フモノヲ禁遏スルニ足ルヘク之ヲ要スルニ外國ノ君主カ日本ノ版圖内ニ於テ主權ヲ行フノ一事ハ日本ノ制度ヨリ觀察スルニ於テ違憲ノ行爲ナルコトハ爭フヘカラサルノ事實ナリトス 夫レ領事裁判制ハ君主ノ權力ヲ制規スルノ憲法存スルコトナク隨テ君主ハ自由ニ且無責任ニ其ノ主權ヲ執行シ得ル所ノ專制體ニアラサレハ併立スルコト能ハサルナリ若シ憲法政治ノ下ニ在テ領事裁判制ヲ包含スル條約ヲ訂結スルヲ得ストセハ既ニ憲法ヲ施行シタル日本ニ於テ此ノ如キ條約ノ無効ニ歸スヘキハ自ラ明白ナリトス條約上ノ信義ヲ敬重スヘキハ勿論ナリト雖モ豈ニ道理ト正義トニ反シ及一國內政ノ發達並其ノ文明ノ進歩ニ關シ分割スヘカラサル至高ノ國權ヲ毀傷スルモ猶且舊章ヲ墨守セサルヘカラサルノ理アランヤ

ノ念ハ改正條項ヲ載セタル條約ニ存スルヲ得サルモノトス又改正條項ハ單ニ一方ノ締約國ニ改正案ヲ提出スルノ權利ヲ與フルニ止リ苟モ其ノ對方ニ於テ其ノ改正ヲ欲セサルトキハ恣ニ之ヲ拒ムヲ得ルモノナリトスルハ決シテ是認スヘカラサルノ解義ナリトス何トナレハ此ノ如キ權利ハ條約國双方ノ必ス保有スル所ノモノニシテ特ニ之ヲ明條ニ掲グルヲ要セサレハナリ フ、ヒ、ト、モ、ア、ハ其ノ國際法第二卷第九十九頁ニ於テ説ヲ爲シテ曰

條約ノ條項ニ付テ二個ノ解釋ヲ下スヲ得ルトキハ其ノ實行ヲ妨クルノ解釋ヲ棄テ其ノ實行ヲ妨ケサル所ノ解釋ヲ取ラサルヘカラスト

又第百二十三頁ニ於テフ、ア、ツ、テ、ル、ノ言ヲ引用シテ曰ク 二様ノ義釋兩立相互ニ矛盾スルトキハ其ノ内ニ在テ最モ尊重スヘク最モ稱賛スヘク且最モ利用スヘキモノヲ採擇セサルヘカラスト

此ノ説ニ依ルトキハ日本條約ニ於ケル改正條項ノ意義ハ相互ニ合意ヲ以テ改正ヲ行フヲ得サルニ於テハ之ヲ排棄スルヲ得ルノ權利ヲ包含スルコト疑ヲ容レサルカ如シ果シテ然ラハ則チ日本ハ永久其ノ條約ノ鐵鎖ヲ荷ヒ其ノ國內政治ノ

排棄手段ヲ以テ條約ヲ廢止スルコトニ關スル日本ノ權利ハ國際法ノ原理ヲ以テ充分ニ之ヲ維持スルヲ得ト雖モ亦全ク條約上ノ權利タルノ性質ヲ脱却スルコト能ハス何トナレハ何レノ條約ニ於テモ一定ノ期限後ハ締約國ノ一方ニ於テ其ノ改正ヲ要求スルヲ得ト云ヘル條項ヲ載スト同時ニ更ニ凡ソ必要ナル改正ハ必ス相互ノ合意ヲ以テ之ヲ協定スヘシト云ヘルノ明條ヲ附加スルヲ以テナリ 蓋此等ノ甲乙ノ條文ハ兩々屹立シテ而シテ互ニ相反スルモノタルコトヲ免レス若シ改正ニ關シテ合意ヲ得ル能ハス隨テ改正ヲ成遂スルコト能ハサルトキハ甲ノ明條ヲ以テ排棄ノ權利ヲ包含スルモノト解釋スルニアラサレハ其條文ハ遂ニ乙ノ明條ノ爲ニ全ク無効ニ歸スルニ至ラン 又退テ條約中ニ此ノ改正時期ノ約ヲ立ツル所以ノモノヲ推考スルニ於テ締約國雙方ハ決シテ永久其ノ條約ニ對シテ羈束セラルヘキモノニアラスシテ一定ノ期限滿ツルノ後若ハ或ル要件ヲ以テ之ヲ廢止スルヲ得ヘキモノタルコトヲ互ニ相知ツセルコト瞭然タリ 凡ソ國際上ノ條約ハ若シ双方ニ於テ其ノ效力ヲ永遠無窮ニ確立セント企圖スルモノヲ除クノ外其ノ性質ハ附設ノ法律ト均シク一定時ニ限レルモノトス而シテ苟モ永遠無窮ヲ期スル

發達ハ少數ノ居留外人ノ條約權利ト外國政府トノ利益トノ爲ニ犧牲ニ供セサルヲ得スト云フカ如キ非理有害ナル解義ヲ採ラサルヲ得サルノ虞アリ

從來數多ノ計畫ニ就キ經驗スル所ヲ以テ之ヲ考フルニ改正條項ニ關シテ前文ニ記スルカ如キ謬妄ナル解義ヲ基礎トシテ現行條約ヲ改正センコトハ到底望ム可ラサルノ業ナルカ如シ、蓋シ帝國政府ハ一面ニ於テハ各條約國ノ要求ニ當リ他ノ一面ニ於テハ新立憲時代ニ及ンテ強大ナル進歩及發達ヲ爲シタル國家的ノ感情並志望ニ注意セサルヲ得ス 是ニ於テ乎舊條約ヲ基礎トシ各締約國ト外交談判上ニ於テ何等商定スルモ、竟ニ日本國民ノ拒絕スル所ト爲ルヘキハ是レ全ク日本國民ノ憲法上ノ思想ニ因テ然ラシムルモノナルコトヲ認メサルヲ得ス 故ニ此ノ如キ國家ノ大問題ニシテ國政ノ全局ニ至重至大ナル關與ヲ有スル事件ニ關シ敢テ國民ノ輿論ニ注意スルコトナクシテ新條約ヲ締結センコト復タ違憲ノ業タルコトヲ免レサルヘシ然レトモ日本國民ノ憲法上ノ志望ト各外國外交上ノ要求トノ兩者ノ間ニ調停ヲ計ルコトノ到底望ナキコトハ既ニ數度ノ實驗ニ依テ之ヲ證明シタレハ再ヒ之ヲ試ムルモ全ク其ノ益ナカルヘシ

事情既ニ此ニ至リタレハ帝國政府カ舊條約ヲ基礎トシテ更ニ改正案ヲ提出スルヲ止メ斷然排棄ノ手段ヲ以テ其ノ條約ヲ廢止スルノ正當ナルコトハ業已ニ前文ニ敘述シタル所ニ因テ明ナリトス舊條約ヲ排棄スルノ權利ハ爭フヘカラスルモノナリト雖モ突然トシテ之ヲ斷行シ若ハ成行ノ目的ナクシテ斷行スヘカラス 抑々各締約國ノ感情ヲ害セザラント欲セハ前記(一千八百七十一年)露西亞事件ニ關シテ各國カ異口同音贊成シタル所ノ穩和ナル商議ニ依ルニアラサレハ現行條約ノ責務ヲ免ル、ヲ得スト云ヘル原則ヲ日本ニ於テ是認スルヲ緊要トス而シテ日本ハ之ニ因テ決シテ其ノ權利ヲ失フコトナカルヘシ而シテ其ノ權利ハ何等和衷協定ヲ遂クルコト能ハス唯タ戰爭ヲ以テ最後ノ手段トスヘキ場合ニ對シテ之ヲ保有スルヲ得ヘシ 現ニ露國モ亦一千八百五十六年條約ノ或ル條項ヲ排棄セル公文ニ於テ該條項ヲ更新改正センカ爲ニ各國ト商議スルヲ拒マサル旨ヲ記載セリ而シテ前記ノ會議ニ於テ其ノ廢棄ノ是認セラル、コトヲ知ルニ及ンテ始メテ同會議ノ提案ニ贊同ノ意ヲ表セリ 此ノ如キ商議ハ公文ノ交換若ハ會議錄ノ署名ヲ以テ行フヲ得ヘシ又此ノ單一ノ目的ノ爲ニハ倫敦若ハ華盛頓ニ於テ會議ヲ開

クモ可ナラント雖モ此ノ場合ニ於テハ豫メ各國ニ於テ排棄ヲ是認スルノ確保ヲ有スルヲ要ス又最終ノ商定ニ先チ豫メ正式ニ依ラサル談判ヲ開カサルヘカラス又日本ハ一ニ強國ノ聲援ヲ有セサルヘカラス而シテ英國若ハ合衆國ノ聲援ヲ以テ最モ緊要トスルカ如シ 前述露西亞ノ事件ニ關シ英國外務省ニ於テ一千八百七十年十一月二十八日附ノ公文アリ(附錄ヲ參看スヘシ)此ノ公文ニ依ルトキハ若シ露西亞ニシテ豫メ改正案ヲ提起シ其ノ目的ヲ達セザリシ場合ニ於テハ英國ハ露西亞ノ排棄權ヲ是認シタリシナラン英國政府ハ或ハ此ノ公文ニ參照シテ同一ノ議論ヲ日本ノ場合ニ適用シ日本カ既ニ屢々改正案ヲ提出シテ屢々蹉躓シタルノ事蹟ヲ追究シ或ハ其ノ排棄ノ權ヲ是認スルモ亦未タ逆メ知ルヘカラス

然リト雖モ余ハ猶英國政府カ果シテ穩和ニ條約ノ廢止ニ同意スルヤ否ヲ疑ハサルヲ得ス但余ハ今ノ時ニ當リ日本ト英國トノ間ニ存スル外交上ノ關係ニ於テ其ク親疎如何ニ付識聞最モ狹隘ナルカ故ニ余カ說或ハ誤謬ナキヲ保シ難シ 英國政府カ果シテ日本ノ要求ニ應スルト否トハ日本ノ例ニ倣ヒ領事裁判所ノ廢止ヲ要求スヘキ東洋諸國ニ於ケル諺制ノ

必要ニ關スル英國政府及人民ノ感慨如何ニ依ルモノ多キニ居ルヘシ 然レトモ日本ノ場合ハ一種特別ナルコト及日本ニ於テ貿易並航海上ニ強大ノ利益ヲ占有スルコトノ二事ハ遂ニ同國政治家ヲシテ日本ノ要求ヲ容レスト斷定スルコト能ハシメサルモノナキニ非ス果シテ然ラハ則橫濱居留地ニ於ケル反對論ノ如キハ素ヨリ深ク意ニ介スルニ足ラサルナリ同地居留ノ外人ハ曾テ輕佻危激ニ流レ爲ニ今日ニ於テハ大ニ其ノ聲譽ヲ失フニ至レリ 論シテ茲ニ到リ尙ホ潛思熟考スルニ余ハ條約改正ノ事業ノ爲ニ更ニ事端ヲ啓キ戰亂ヲ起スノ虞アルヘシト觀察スルコト能ハス試ニ見ヨ目下泰西諸政府ハ極メテ平和ヲ愛セリ且其ノ列國ノ間ニ存スル艱難ハ彼等ヲシテ東洋ニ於テ大手腕ヲ揮フノ餘地ナカラシムルニ足レリ且夫レ現時ノ文明思想ノ風潮ハ日本ノ要求ニ對シ

テ同感ヲ表スヘシ蓋領事裁判制ハ中古ノ制度ニシテ之ヲ撤棄スルハ至大ノ進歩ナリトス之ヲ要スルニ領事裁判制ハ早晩廢絶ニ歸セサルヲ得ストスルハ一般ノ感想ナルカ如シ故ニ日本ハ東洋ノ先進國トシテ此ノ感想ヲ利用スヘキナリ抑々此ノ畫策ヲ實行セント欲スレハ乾剛ノ斷ヲ以テ寸步モ動サルノ決心ヲ示スヲ要ス若シ諸外國ニシテ日本カ一步モ

讓ヲサルノ決心ヲ定メ必要ノ場合ニ於テハ其ノ權利ノ爲ニ砲烟劍戟ノ間ニ見ユルコトヲ辭セサルノ決心アルヲ見ルトキハ多少ノ抵抗ヲ試ミタル後若シ日本ニ於ケル其ノ貿易及航海業ニシテ寬大ナル要件ニ依テ之ヲ進捗スルヲ得ルニ於テハ遂ニ日本ノ要求ニ應スルニ至ルヘキヤ必セリ 原案ニ於テ所謂治外法權ノ撤去ニ對スル報酬トシテ列記シタル要件ハ甚タ正當ナリト愚考セリ然レトモ余ハ當初ニ於テ多ク讓與セザランコトヲ勸告セントス何トナレハ初ヨリ多クノ讓與ヲ爲サントスルトキハ日本ノ權利ハ薄弱ナリトノ疑念ヲ生スレハナリ日本ハ宜シク權利及國際法ヲ以テ其ノ立脚ノ地トナシ決シテ普通條約談判ニ於ケル如ク相互ノ讓與ニ於テ成レル契約ノ地位ヲ取ルヘカラス

日本ノ法律ニ從ヒ、國際法ノ原則ニ依レル適法ノ貿易旅行及居住ノ爲ニ内地ヲ開放スルコト固ヨリ必要ナラン然レトモ内地ノ開放ハ外國人民ノ有スル條約權ニ基クニアラスシテ單ニ外國人ニ關スル一般普通ノ法ヲ實施スルノ結果タルニ過キサルナリ日本政府ハ外國人ノ格違スヘキ條件ニ關シテ法律及命令ヲ制定スルノ自由ヲ有セサルヘカラスト雖モ外交上内地ヲ閉鎖スルノ權ハ之ヲ撤棄セサルヘカラス但危

險ノ虞アル又ハ其ノ他特殊ノ人物ノ爲ニ特別ノ法ヲ設クルハ固ヨリ其權内ニアリ苟モ眼ヲ放テ字内ノ形勢ヲ觀察セハ各文明國ニ於テ外國人ニ關スル要件ハ特別ノ條約ノ存セサル限ハ皆此ノ如キノミ 例ヘハ合衆國ニ於テハ移住民其ノ他ノ外國人ニ關スル要件ニ付キ何等ノ條約ヲ有セサルヲ以テ事情ノ必要ニ應ジテ自由ニ其ノ要件ヲ規定スルヲ得ヘシト雖モ獨リ清國トノ間ニハ特別ノ條約ヲ有スルカ爲ニ近年困難ヲ生シ遂ニ其ノ條約ヲ廢止排棄シタリ。要スルニ一國ニ於ケル外國人ニ關スル要件ハ之ヲ條約ヲ以テ規定セサルヘカサルノ必要アルコトナク却テ法律若ハ一般ニ是認シタル國際法上ノ例規ヲ以テ之ヲ制定スルノ至當ナルニ若カサルナリ 日本ニ於テモ亦宜シク此ノ方針ヲ取ラサルヘカラサルナリ英國ニ於テ外國人ニ關スル要件ハ其ノ歸化人タルト否トヲ問ハス皆一千八百七十年ノ歸化法ヲ以テ之ヲ規畫セリ此ノ如キ歸化法ハ日本ニ於テモ早晚之ヲ必要トスルニ至ルヘシ今ヤ日本人ト外國人トノ交渉ハ専ラ商業上ノ性質ニ屬スルヲ以テ今ニシテ民法殊ニ商法ノ實施セラレサルハ實ニ不幸ノ至ト云ハサルヘカラス蓋此ノ事實ハ必ス各條約國ノ最モ反對スル所ト爲ラン故ニ成ルヘク速ニ應スルノ

ハナリ若シ漫ニ一箇年ノ期限ヲ以テ旅券ヲ交付スルトキハ商業其ノ他政治上ノ運動等違法ノ目的ノ爲ニ旅券制ヲ濫用スルノ恐ナシトセス

以上開陳シタル所ニ依レハ日本ハ各條約國ニ向テ左ノ如ク辯論スルヲ得ヘシ曰

日本ハ既ニ說明シタル理由ニ依リ排棄手段ヲ以テ現行條約ヲ廢止スルノ權利ヲ要求ス又之ヲ廢止スルノ必要ニ迫レリ然レトモ日本ハ姑ク此ノ權ヲ實行スルヲ猶豫シ穩和ナル商議ヲ遂ケンカ爲ニ各國ニ向テ茲ニ其ノ要求ヲ提出セントス日本ハ此ノ措置ニ依テ以テ其ノ外國トノ間ニ有スル關係及其ノ國內ニ在ル外國人ニ關スル要件ヲ衰退セシメント欲スルニアラスシテ全ク之ヲ進捗セント企圖スルニアリ故ニ日本ハ其ノ法律ニ從ヒ國際法ノ原則ニ依レル適法ノ貿易旅行及居住ノ爲ニ全國ヲ開放スルコトヲ約ス又日本ハ普通ノ國際法ヲ基礎トシテ新條約ヲ締結スルニ至ルノ間ニ於ケル相互ノ交渉ニ關シテ満足ナル商定ヲ爲シ以テ目下ノ規定ニ代ント欲スルノ條約國アラハ之ト共ニ寬大懇親ナル協議ヲ爲スヲ辭セサルヘシ

措置ヲ施サマルヘカラス 他ノ二箇條ノ讓與即チ最惠國特權ヲ保證スルコト及產業上並才智上ノ財產保護ニ關スル同盟ニ加入スルコトノ二事モ敢テ不可ナキカ如シ殊ニ前者ハ各條約國ニ於テ必ス請求スヘシ余ハ此レ等ノ讓與ニ付テハ更ニ談判ヲ開テ確定スルヲ以テ得策ナリト思惟セリ而シテ最惠國特權ノ效力ハ今後締結スヘキ新條約ノ實施ニ至ルマテノ間ニ限ルモノトセサルヘカラス

又當分ノ間外國人ノ爲ニ旅券制度ヲ擴張シ商業ヲ營ムノ目的ニアラサル限リハ内地何レノ地ト雖モ一箇年ヲ越ヘサル期限ノ間隨意ニ旅行ヲ許サントスルノ議ニ對シテ亦余ハ別ニ異論ヲ存セサルナリ 然レトモ日本ニ於テ夥多ノ讓與ヲ提出スルハ余ノ甚タ取ラサル所ナリ殊ニ現行條約ノ下ニ於テ外國人ニ關スル要件ハ該條約ノ廢止ニ至ルマテハ決シテ之ヲ寬大ニスヘカサルナリ 且夫レ目下旅券制ハ實際甚タ寬大ナルカ故ニ假令上文ノ如キ擴張ヲ實行スルモ之カ爲ニ便益ヲ増スコトナカルヘク之カ爲ニ便益ヲ感スルモノハ獨リ宣教師アルノミ蓋他種ノ外國人ハ其ノ居留人ト旅人トヲ問ハス内地ニ於テ二三箇月ヨリ長ク滯留スルコトナケレ

六箇年ヲ以テ條約廢止ノ期限トスルノ一事ハ余ノ見ル所ニ於テハ稍々長キニ過キタルカ如シ此ノ如キ長歲月ノ間ニハ數多ノ事實湊生スルノ虞アルカ故ニ之ヲ以テ約束ノ期限ト爲スハ安全ノ策ニ非サルナリ苟モ條約改正ノ事ニ關シ日本國民ノ間ニ常ニ狂奔激昂スルノ事情ヲ顧念スルニ於テハ今日ノ事態ハ決シテ永ク之ヲ存續スルコト能ハサルヲ知ルヘキナリ各國ニ於テ強テ之ヲ要求スルニアラサレハ日本ハ決シテ歲月ノ限定ヲ爲スヘカナス若シ已ムヲ得ス其ノ限定ヲ爲スモ二三年ヲ越ユヘカラス 余ノ思惟スル所ニ依レハ條約廢止ハ改正刑法及商法ノ實施前ニ之ヲ行フヘカラス又之ヲ決行スルノ前新ニ關稅條約ヲ締結スルヲ得策ナリトス蓋成文法ナキトキハ日本裁判所ハ外國人ニ對シテ其ノ裁判權ヲ執行スルニ際シ當ニ困難ト紛雜ヲ免レサルノミナラス外交上ノ交渉ヲ生スルノ恐アレハナリ

關稅ニ關シテハ特別ノ約定ヲ爲サマルヘカラス抑々關稅ノ割合ヲ定メンカ爲ニハ條約ヲ以テスルコト決シテ必要ナラス 近年ニ至テハ全ク反對ノ傾向アリ即チ自主ノ權ニ依リ法律ヲ以テ稅率ヲ確定スルノ制ヲ取ルモノ益々多キニ至レリ蓋此ノ如キノ制ハ保護上及憲法上ノ必須ニ適スレハナ

リ 日本憲法第六十二條ニ依レハ總テ租税ハ關稅ニ至ルマテ必ス法律ヲ以テ之ヲ定ムルヲ要スルカ如シ故ニ各國トノ談判ニ於テ該條ヲ引照スルヲ得ヘシ然リト雖モ自今ノ形勢ニ於テ外交上ノ約定ニ依ラサルヲ得サルカ故ニ該條ハ關稅ニ適用スルヲ得サルヘシ

英國ハ東洋事件ニ關シテ泰西諸國ノ首位ヲ占ムルカ故ニ本案ニ向テ英國政府ノ同意ヲ求ムルヲ以テ最モ緊要ノ事トス若シ英國ニシテ之ニ同意スルトキハ假令一二ノ邦國ニ於テ之ニ抵抗スルモ敢テ憂フヘキノ困難ヲ生スルコトナカルヘシ蓋英國ノ政略ニ於テ最モ重キヲ置クハ商業及航海業ナリトス故ニ特殊ナル利益ヲ英國人ニ讓與スルハ策ノ得タルモノナラン 英國政府ハ他國ト通商條約ヲ締結セント欲スルト同時ニ此ノ如キ條約ナキモ猶ホ莫大ノ貿易ヲ爲スニ妨ケサルヲ了知セリ例ヘハ合衆國ニ於ケルカ如キ其ノ一例ナリ今ヤ英國ハ一方ニ於テハ日本ト舊條約ヲ基礎トシテ新約ヲ締結スルハ到底成遂シ能ハサル所ナルヘク而シテ一方ニ於テハ縱令無條約ナルモ猶ホ且幾千ノ利益ヲ攫取スルコトヲ得ヘキ時機ニ際シ若シ意ヲ潛メテ寬容ナル政策ヲ取ルトキハ字内ニ於テ其ノ赫々タル威望ヲシテ更ニ大ニ増

進セシムルヲ得ヘシ策若シ之ニ出テサルトキハ日本ハ強迫ヲ以テ復舊(條約ヲ排棄スルヲ云フ)ヲ行ヒ之カ爲ニ英國ニ取リテハ困難ヲ接シテ起リ殆ント底止スル所ヲ知ラサルニ至ルヘシ今若シ此ノ理ヲ以テ懇切ニ英國政府ニ説クトキハ或ハ其ノ承諾ヲ得ルノ望ナシトセス

(附錄)

一千八百七十年十一月二十日附露國公文ニ付ギブリンノウ男ト爲シタル會談ニ關シ、英國外務大臣ヨリ在聖彼得堡大使ヘ發シタル通牒

肅啓 黑海中立ニ關ル一千八百五十六年ノ約定ヲ露國ニ於テ排棄セントスルコトニ付キ余カ去ル十日閣下ニ向テ發シタル通牒ニ對スルゴ、ルチャコフ公ノ答文ヲ茲ニ封入進呈スブルノウ男ハ過ル廿五日此ノ答文ヲ余カ面前ニ於テ朗讀シ、其ノ寫本ヲ余ニ渡セリ

余ハ之ヲ受ルニ當リ同僚ト協議ヲ遂ケタル後ニアラサレハ之ニ對シテ何等ノ意見モ吐露スルヲ得スト雖モ事實ニ關シテ一問ヲ提出セント欲スル旨ヲ同男ニ向テ陳述セリ

此ノ答文ニ於テ露國ハ素ヨリ一千八百五十六年ノ條約ニ署名シタル各國ト協議シテ以テ其ノ目的ヲ達センコトヲ請求スルニ過キサリシナラント雖モ露國カ一體ノ平和ヲ破ラントスルカ如キ紛擾ノ原因ヲ避ケンカ爲ニ幾度カ各國ノ會議ヲ開ンコトヲ要求シ遂ニ其ノ志ヲ果スコトヲ如何センヤト記載セリ 是ニ於テ余ハブルノウ男ニ向テ露國ハ一千八百五十六年ノ條約ヲ改正センカ爲ニ英國ニ向テ何等ノ申込ヲ爲シタルコトアリヤト問ヒタルニ同男ハ露國ハ未ダ一タヒモ

三九四 明治三十五年一月二十五日

寺島伯條約改正舉行ニ關スル意見

頃日世間ノ側フル處ヲ聞クニ政府ハ更ニ前年來談判ノ緒ヲ繼キ條約改正ニ着手スト未タ其信否ヲ知ラサルモ固ヨリ今日ニ於テハ一日モ措クヘカラサル緊急問題ニシテ之レカ舉行ヲ計劃スルヲ當然ナリトス 特ニ此改正談判ハ既ニ三回ニ及ヘト未タ成ラズ早晚其完成ヲ期セサルヘカラサルハ論ヲ俟タス況ンヤ憲法發布ノ今日ニ及ンテハ現行條約ヲシテ一日モ存續スヘカラサルヤ明カナリ此ノ如ク目下ノ緊急問題ナルヲ以テ、政府ハ飽クマテ事難ヲ排シテ其成功ヲ遂クルノ方針タルヘキヲ以テ自ラ其成功ノ時ヲ期スルコト遠キニアラサルヘキモ、條約改正ノ業幾度カ發シテ破レ、未タ將來ノ目的確ナラサルハ憂患ニ堪ヘス 本官モ亦其憂ヲ俱ニシ或ハ陰ニ陽ニ意見ヲ述フル所アリ而シテ今日ニ於テハ一層其急成ヲ企望スルモ前後ノ事例ヲ鑑ミ之レヲ今ノ情勢ニ推スニ決シテ容易ナラサルヲ知ル 今日當局者ニ於テ其方向ヲ計劃スルモ依然從來ノ經歷ヲ繼ギ舉行スルノ外手段ナカルヘシ然レトモ年月ト共ニ世況ヲ一變ス故ニ往時ニ難

申込ヲ爲シタルコトナシト答ヘ更ニ語ヲ續テ曰ク會テ或ル事件ニ關シテ協議ヲ爲シタル時余(ブルノウ男)ハ「ハム、ハム、ハム」侯及クラ、レンドン侯ニ向テ若シ該事件ニシテ果シテ實事トスル如キコトアラハ露國ハ特ニ一千八百五十六年條約ノ或ル條項ニ付キ異議ヲ提出スルノ權利ヲ保有セントスト告ケタルコトアリト云ヘリ 余ハ上文記載ノ事件ハ果シテ實事ト爲リタルヤ否ヤト問タルニブルノウ男ハ消極ノ答ヲ爲セリ同男ハ又土耳其ニ關係セサル歐洲事件ニ關シテ各國會議ヲ開カントスルノ提案ニ付テ談スル所アリタリ余ハ以上記述シタル同男ノ談話ハ決シテ余ノ問ニ對スル答ト視做スコトヲ得スト昔ヒタルハ同男ハ此ノ答文ニ付テ余ト談論スルノ權利ヲ有セサルカ故ニ余ニシテ説明ヲ要スルコトアラハ閣下ニ通牒ヲ爲スヘシト語レリ 余ハ是ニ於テ一ノ公文ニ於テ或ル事實ニ付キ余カ之ヲ知レルカ如クニ記載シタルニ當リ其ノ事實ノ果シテ何タルヤヲ該公文ヲ携帶シタル大使ニ尋問スルハ決シテ奇異ノ事ニアラサル旨ヲ陳述シ更ニ問テ曰閣下カ當國ニ滞在シタル最近十二箇年ノ間ニ於テ曾テ露國ハ大不列顛國ニ向テ一千八百五十六年條約ノ改正ヲ申込タルコトアリヤト同男答テ曰否ト余ハ乃チ同男ニ向ヒ此ノ語ヲ以テ閣下ノ答語ト認定シテ不可ナキヤト問ヒタルハ不可ナキ旨ヲ答ヘ余ニシテ若シ更ニ説明ヲ要スルコトアラハ閣下ニ向テ文書ヲ請求スヘキ旨ヲ語ラレタリ 一千八百七十年十一月二十八日

外務省ニ於テ

グランヴィル

スル處今日ニ易キヤ豫期スヘカラストイヘトモ我カ國條約改正ノ事年ヲ追ヒ研究ヲ經一般ノ國論又往時ノ如クナラス之ヲ前回ニ比スレハ其難易同日ノ論ニアラサルナリ是ヲ以テ内ニ便ナリトシテ外ニ強ヒ難ク外ニ便ナラストシテ内ニ強ユヘカラスト内外ノ關涉ヲ照察セサレハ未タ今後條約改正ノ方案ヲ斷定スル事難シトイヘトモ熟ラ前後ノ事蹟ヲ參考スルニ蓋シ今日ニ於テハ斷然從前ノ方案ヲ廢棄シ茲ニ改メテ其方略ヲ一決シ以テ胥議ニ及ハスハ恐ラクハ前時ノ覆轍ヲ踏ムヲ免レサルヘシ故ニ從前ノ方略ヲ改メ更ニ胥議ノ順序ヲ變スル方案ヲ概陳ス

明治十九年井上前外務大臣條約改正會議ヲ外務省ニ開クヤ十數列國全權委員ヲ一堂ニ會集シ會議會ノ議案ヲ本題トナシ數月間ノ談判ニ亘レリ 其議事ノ形況タルヤ全員ノ合意ヲ得ルコト難ク一ノ委員ノ異議アルモ之レカ爲メニ制セラレ其結果ハ我ニ不利ニシテ彼ニ利アルノ決議ニ歸着ス是レ畢竟條約問題ハ爾他ノ議事ト其性質ヲ異ニシ一員ノ異議モ亦議事ノ歸決ヲ妨クルモノニシテ多數採決ノ例ニ倣ハサルハ國際上ノ通規ナレハナリ此ノ如ク各國ノ委員ヲ一堂ニ召集シテ胥議ヲ開クハ其各委員ヲ擧ケテ合意一決ニ歸スル能

リ

前兩外務大臣カ採用シタル談判ノ方法ハ如此ニシテ其ノ趣異ナルトイヘトモ其結果ハ均シク成功ヲ奏セサリキ 然レトモ今後ニ至リ改正談判ハ其兩法中何レカ撰ハサルヘカラスト然ルニ我國二回ノ條約談判ニ於テ充分ノ結果ヲ奏セサリシハ其起因種々アルヘシトイヘトモ要スルニ各國人民交互款通ノ自在ナルト情實ノ入易キニ仍ルコト多シ即チ各國全權委員ニシテ東京一府内ニ駐劄スルヲ以テ彼我自國ノ利害ニ就キ互ニ其意ヲ通シ其議ヲ約スルニ便ナリトス特ニ各港自國商民ノ如キハ隱然委員ノ意見ヲ動カスノ力アリ 是ヲ以テ委員ニシテ我要求ヲ適當ナリト信認スル者アルモ多數商民ノ情願懇求アルニ於テハ勢ヒ其ノ意ヲ酌ミ其情ヲ採ラサルヲ得ス故ニ我要求ハ常ニ外國商民ノ意嚮ニ隨ヒ取捨セラルノ傾向アリ今後トイヘトモ決シテ其ノ弊ヲ脱スヘカラス 況ンヤ外國人中聯合シテ我要求ヲ絶ツノ同盟ヲ結フ者アリシニアラスヤ此ノ如ク列國委員ハ隱然自國人民ノ同議ヲ盾トシ我ニ對スルノミナラス聯合ノ力ヲ以テ我要求ヲ拒斷シ我孤力ヲ以テ之ニ對スルモ其間既ニ強弱アルヲ免レサルナリ 故ニ右ノ如ク從前ノ談判方法何レニ據ルモ其

ハス一人ノ異論者モ亦全體ノ議決ヲ動カスモノニシテ結局我要求ノ幾十歩ヲ讓ルニアラスンハ議事ノ完結ヲ望ムヘカラス其成績ニ至テハ既ニ井上前大臣ノ時ニ徴シテ明カナリトス 故ニ今後ニ於テ合會議ヲ開クノ時期アリトスルモ恐ラクハ我カ要求條件ノ貫徹ヲ保證スヘカラサルナリ 次ニ明治二十一年大隈前外務大臣改正談判ヲ開ラキ井上伯ノ例ニ倣ハス特ニ締盟國各個ニ胥議シ、合集ノモノニアラス之ヲ國別談判ト稱シタリ是ヲ以テ委員ヲ一堂ニ會集スルニアラサルヲ以テ他ノ委員ノ爲メ議事ヲ左右セラル、ノ患ヒナク胥議ノ便易ハ前時ニ優リ米獨露三國委員トハ容易ニ談判終結シ調印ヲ了スルニ至レリトイヘトモ是レ又其成績ニ至テハ前ノ合會議ト異ナル處ナシ 如何トナレハ獨露兩國ト締結スルノ旨趣ハ米國ト締結スル所ト異ナリ此ノ如クニシテ各其條件ニ多クアリ要求ニ強弱アルニ及ンテハ到底各締盟國ヲ通シテ均等ノ條約ヲ締結スルヲ得サルヲ以テ假令各列國ト締約ヲ了シタリトスルモ最惠國條款ノ在ル限リハ其ノ實施ニ及ンテ我ニ何ノ利益カアラン 要スルニ合會議モ國別會議モ唯ニ談判手續ノ方法ヲ異ニスルニ止マリ其結果我ニ不利ナルニ至テハ彼此差違アルヲ見サルナ

成功ノ難キヤ想フヘキナリ然ラハ即チ如何ニシテ可ナラン唯一法アリ曰ク從前ノ如ク内地ニ於テ各國公使ニ對スル談判ヲ止メ、對國政府ヘ我全權委員ヲ派遣シ直接ニ彼ノ當局者ト談判ヲ開クニ若カサルナリ

前述ノ如ク爾今條約改正ノ談判ハ内地ノ胥議ヲ停メ之ヲ外國政府ノ下ニ開クニ若カサルノ理由ヲ述ヘンニ内地ニ於テ改正談判ヲ開クノ難事タルハ既ニ前項ニ陳フルカ如ク各國委員ノ款通ト其自國人民ノ情實トハ決シテ免カレサルノ妨障タリ 之レニ加フルニ往々談判ノ機密漏布シ内國ノ輿論モ生シ、内外煽起シテ交々障害ヲ加フルノ姿ニシテ到底其妨礙ヲ免カル、ヲ得ス然ルニ我ヨリ全權委員ヲ派遣シ當該政府ニ就キ談判ヲ開クニ於テハ單純ニ其政府ノ意思ヲ決スルニ止マリ我内地ニ於ケルカ外キ内外ノ刺激之ヲ支障スルモノナキヤ明カナリ 況ンヤ外地ニ於テ内地ノ情況ヲ説クハ之ヲ内地外人ノ眼前ニ於テ説クヨリハ難カラス 曾テ明治六年岩倉大使伊藤副使等ト共ニ本官在英日本ノ公使ノ任ヲ以テ龍同英外務省ニ至リ當時ノ英外務大臣「ロルドガランウイル」ニ對シ日本政府ハ自ラ地方法律ヲ製シ日本ニ來レル英人ニ施行セント欲スルヲ以テ十分ニ行ハルヘキ指

令ヲ發セラレンコトヲ乞フト言ヒケレハ彼ノ外務大臣ハ之ヲ容易ニ承引シテ指令スヘシト答ヘシニ傍ラニ當時ノ英公使「パークス」之ヲ拒ミ更ニ外務大臣ヲシテ指令猶豫ノ答ヲナサシムルカ如キノ例アリ況ンヤ我國派遣委員其人ニシテ時機ニ應シ方略ヲ運ラスニ於テハ外國政府ヲシテ我國改正條約ノ要求ヲ容レシムルヤ決シテ難シトセサルナリ 既ニ明治十一年米國ニ於テ改正條約締結ノ成績等ニ顧ミハ思半ニ過クルモノアラントス然レトモ我國外交官タルモノ、外交上ノ經驗ニ於テハ未タ歐米列國外交官ノ技倆ニ比スヘキニアラス 然ルニ之カ内地ニ於テセス直接外國政府ニ胥議ヲ開クハ其成功如何ヲ顧慮スルハ固ヨリ至當ノ事ナリ特ニ内地ト違ヒ談判上ノ進退概シ全權委員ノ專斷ニ出ツルヲ以テ一方ニ向テハ國家ヲ表シ一方ニ向テ其責任ヲ果スニ於テハ容易ノ事ニアラス故ニ或ヒハ内地ニ於テ列國公使ニ對スルニ、我政府ノ全力ヲ注クノ易々タルニ若カサルヲ説ク者アラン 然レトモ既ニ前項ニ陳フル如ク我國ニ於テ之ヲ舉行センニハ幾多ノ支障アルヲ免レサルヲ以テ從前慣用ノ對外策ヲ改メ、進テ我委員ヲ國外ニ派遣シ直ニ彼政府ニ就キ接對セシメハ反テ我要求ヲ貫徹スルニ便ナルヤ疑ハサ

ルナリ 既ニ明治十四年佛國公使「トリクー」氏ハ伊藤前參議ニ對シ、貴國條約改正ヲ舉行セント欲セハ宜シク歐洲ニ出テ談判スルニ若カスト云ヘリ 然レトモ當時ノ條約改正ニ於テハ内治各般ノ事項ニ關係シ遠ク外國ニ在テ此等ノ調査ヲ遂クルニ至難ナル理由アルヲ以テ、不得止本官ハ伊藤前參議ト相伴ヒ佛公使ニ面シ其ノ發議ヲ謝絕シタルコトアリキ尋テ當時露國公使モ亦歐洲ニ於テ改正談判ヲ開クノ利アルコトヲ本官ニ説キタル事アリ

然レトモ談判ヲ國外ニ開ク其事決シテ易カラス若モ一步ヲ誤レハ其事ノ破綻ヲ見ルニ止マラス或ハ國命ヲ辱ムルヲ保セス故ニ其成否ハ委員其人ノ練達ト措置ノ巧拙ニ存ス尋常ノ式法ニ倣ヒ我駐在公使ニ命令シテ處置スルヲ以テ足レリトナサルナリ 然ラハ則チ其人ヲ撰フト其法ヲ講スルノ二ノ途ニ於テ、決シテ易シトセス其人ノ如キ固ヨリ才識練達ニシテ世望隆渥且凡其國語ニ通シテ條約ノ大主意ヲ解シタル人ヲ以テ先ツ歐洲派遣ノ觀察官ヲ命スヘシ 惟明治二十三年我外務大臣ヨリ英國公使ニ内示スル所ノ書ニ由リ其年七月英國政府ヨリ覆案ヲ送り之ニ答フルノ關係アルヲ

以テ我ヨリ談判ヲ開クハ唯先ツ英國ノミニシテ其他ハ此談判ヲ推セハ幾ント同一ノ條約ヲ承諾スルナルヘシ 而シテ其觀察官ハ先ツ條約改正取調ト稱シ直ニ英政府ニ改正談判ヲ開カス其間專ラ歐米朝野ノ名士ヲ叩キ日本條約改正ノ要領ヲ質問シ龍同ニ至リ其説ヲ以テ間接ニ要路者ニ諷誘セシメ幾分カ當局者ヲシテ我要求ニ向テ傾聽スルニ至ルヲ待テ之ヲ我政府ニ申達スレハ政府ハ其觀察官ヲシテ條約改正ノ全權ヲ命セシ旨ヲ日本在留英公使ニ公言シ此時ヨリ我委員ハ直接ニ彼政府ニ談判ヲ開クニアリ 此ノ如ク豫メ當局者ヲシテ我要求ノ範圍ヲ知ラシメハ胥議ニ當テ彼我ノ情衷ヲ交通スルニ便ナリトス其法或ハ奇僻ニ流ル、ヲ疑フ人アリト雖海外列國ニ於テハ概スルニ未タ我國情ヲ知ル者乏シク往々誤迷ノ感ヲ抱ク者多シ偶々之ヲ聞クヘキモ駐在公使其他ノ報告ニ據ルノ外ナク多クハ皮想ノ觀ニ流レ未其眞想ヲ知り得ルモノ稀ナリ 故ニ我特派委員ヲシテ我國情ヲ彼要路者ニ須告スヘシ是レ即チ改正談判ヲ遂クノ要素ナリ既ニ我國之ニ類スル方法ヲ採用シテ效果ヲ奏セシ例尠シトセス横濱駐在兵撤回ノ如キハ議院ノ贊助ニ因リ鴉片紛議裁判ノ如キハ彼國鴉片會盟ノ助言ニ由ル又米國政府下ノ關償金

返還ノ如キ國論ノ勸告ニ由ル。皆好適例ナリトス故ニ我國條約改正ノ如キ又之ヲ其國ノ輿論ニ訴ヘ有志ノ贊助ヲ促カストキハ其效ヲ奏スルヤ疑フ存セサルナリ 以上條約改正ノ舉行ハ宜シク前時ノ失過ヲ鑑ミ現時ノ情勢ヲ察シ斷然從前ノ方案ヲ廢シ以テ更ニ其方案ヲ一新シ内地談判ノ方針ヲ代ヘテ之ヲ外國談判ニ移シ國論ヲ藉リテ我カ要求ノ貫徹ヲ達センコト實ニ我國目下ノ緊急問題ナラン須ヘカラク前項ノ趣意ヲ熟考シ其眞意ヲ採酌シ以テ速カニ目下ノ處斷ヲ決セラレンコト切望ニ堪ヘサルナリ 仍テ別紙改正條約ニ關スル附言ヲ添テ提出ス宜シク精考熟覽アランコトヲ請フ

明治二十五年一月二十五日

樞密顧問官伯爵 寺島 宗則

內閣總理大臣伯爵 松方 正義 殿

外務大臣子爵 榎本 武揚 殿

改正條約案ニ關スル附言

明治十五年以來改正談判ノ繼續シタル情由ノ存スルニ由リ今日ニ於テ遽カニ其大體ヲ變更スルハ當局者ノ最モ至難ヲ感スル處ナルヘシトイヘトモ憲法政治ヲ實施シ全然社會ノ

情況ヲ一變シタル時ニ及ンテハ舊套ヲ續クコト能ハス一
國立法ノ權ニ係ル條件即海關稅及他ノ法律ニ至リハ悉ク
帝國議會ノ協賛ヲ經サル可カラサルヲ以テ改正案ノ如キハ
務メテ右ニ關係ナキ條項ニ止メ從前ノ如ク我權内ニ屬スヘ
キ細則ニ至ルマテ國際條約中ニ籍入スルカ如キ事ナカルヘ
シ

項目國家經濟會ノ出版ニ係ル條約改正ノ標準ト題セル書冊
中條項ヲ追ヒ其目次ヲ掲ケテ漏サス且所載ノ趣意同意ナル
ヲ以テ一冊ヲ添付シテ本議ヲ補フ仍テ本書ニ就テ閱覽アラ
ンコトヲ請フ

本官ノ趣意ハ昨年既ニ青木前外務大臣ニ陳フル處アリ對等
條約ノ名義ニ泥マス、完全ナル條約ヲ締結センコトヲ希望
ス其所以ハ對等條約ハ其名美ナリトイヘトモ其實完ナラサ
ル所アリ故ニ事々物々現今ノ國情民庶ニ照ラシ最モ至幸ナ
ル條約ヲ締結センコトヲ欲スルニアリ 故ニ單ニ對等條約
ノ名ニ泥マス完全ナル條約ヲ締結スルヲ希望スルナリ故吉
田顧問ノ意見モ亦本官ト同一ノ方向ナリシト思惟ス仍テ稍
々細節ニ亘ルモ左ノ四項ハ注意アラシム

一、外交用文書ノ用語ハ日本文ノ外ハ爾來一切英語ヲ用ユ

現今ノ稅目ニハ銀貨ヲ以テ其價ヲ付シタリトイヘトモ
列國ノ形勢ニ鑑ミ國家經濟上ノ利害ヨリ考フレハ宜シ
ク金貨ヲ以テ其價ヲ定ムルノ利アルヲ信ス故ニ今後海
關稅金ハ金貨ヲ以テ基本ト定メ從前ノ如ク三ヶ月毎ニ
其相場ヲ平均シ銀貨ヲ以テ收入スヘシトス但シ外國製
銀貨ハ如論、日本製銀貨ト雖モ其正量ヲ檢實スヘシ是
最モ緊要ナリト思惟ス

四、法律規則ヲ洋文ニ翻譯スルモ官府ノ刊行ト爲スヘラカ
サル事

年限ヲ定メ各般ノ法令ヲ洋文ニ翻譯刊行シテ外國人ノ
遵由ニ便ナラシムルノ規約ハ前回改正談判ノ際ニ約定
スル所ナリ 爾今再ヒ此ノ如キ規約ヲナササル蓋論ヲ
俟タストイヘトモ萬一之ニ類スルノ例アレハ實ニ立國
ノ主權ヲ汚スニ當ルヲ以テ斷シテ此レ等ノ事アルヘカ
ラス何ゾ外人ノ爲メニ法典法令ヲ翻譯シテ以テ之ヲ便
ニスルノ所爲アル可ケンヤ若シ一時機宜ノ措置トシテ
之ヲ爲スアレハ國家千百ノ法令悉ク之ヲ翻譯シ外人ノ
看聞ヲ便ニスルノ責ヲ辭スヘカラス此事果シテ易シト
スルカ決シテ遂ク可カラサル事ナリ況ンヤ數千百中萬

ル事

各國從前ハ羅旬語ヲ以テ國際上ノ用語トナセシトイヘ
トモ其後佛文ヲ用ユルヲ以テ普通トセリ然ルニ彼ノ獨
逸ノ如キハ國際上情由ノ存スルアルヲ以テ斷シテ佛語
ヲ用ユルヲ忌ムノ傾キアリ故ニ日本國ノ外國文ヲ用ユ
ルニ於テ單ニ英語ヲ用ユルコトヲ規約スヘシ是レ國際
條約ノ條文ハ一語一句ノ相違ヨリ重大ノ關係ヲ及ボス
ヲ以テ、用語ノ一定最モ緊要ナリト思惟ス

二、訴訟用文ハ悉ク皆日本語或ハ日本文ヲ用フヘキ事
訴訟用語或ハ用文ハ外人ノ訴訟ニハ洋語或ハ洋文ヲ用
フルノ慣例ナリシカ條約改正ヲ遂ケ裁判權ヲ回復シタ
ル時ニ至リテハ、外國人ハ總テ日本語或ハ日本文ヲ用ヒ
サルヘカラス現行裁判所構成法中ニハ洋語洋文ヲ用ユ
ルヲ許スノ例ナリ 然レトモ此等ノ特例ヲ許スハ裁判
上ノ秩序ヲ破フルノミナラス司法權ノ神聖ヲ汚スニ至
ラントス故ニ訴用語或ハ用文ハ一切洋語或ハ洋文ヲ用
ユルヲ禁シ全ク我裁判制度ニ服從セシメ毫モ特例ヲ許
スコトナカルヘシ是レ最モ緊要ナリト思惟ス

三、海關稅金ハ銀貨ニ代ヘ金貨ヲ以テ正當稅金ト定ムル事

一、意義ヲ誤リ轉旨ヲ過ツ虞アリトセハ遂ニ法文上ニ是
非ノ紛議ヲ惹起スルニ至ランコトヲ保セサルナリ故ニ
法典法令ノ翻譯ハ官刊ニ屬スルコトヲ約スヘカラス是
レ最モ緊要ナリト思惟ス

以上四項條約ノ本文ニアラス稍々細目ニ屬スト雖モ最要ノ
事項ナルヲ以テ茲ニ附記ス

四〇〇 明治三十五年三月五日 改正協議

榎本外務大臣墨江私邸ニ於ケル協議概況

本官ハ嚮キニ條約改正ニ關スル甲乙二案ヲ閣議ニ提出セシ
モ閣議歸着スル所ナクシテ以テ今日ニ至レリ
本月五日伊藤樞樞密院議長、青木全權公使、墨江ノ私邸ニ來
會ス本官前案ヲ出シテ商議スルコト數時其要領及ヒ結果左
ノ如シ

本官云ク條約改正ノ要領ヲ約言スレハ領事裁判權ノ撤去ト
海關稅恢復ノ二件ニ過キス而シテ領事裁判權ノ撤去ハ今ヤ
殆ント條件ヲ附セスシテ年ヲ指テ(五六年內)撤去シ得
ヘキハ英政府ノ提出ニ係ル原案ニ就テモ亦明ラカナリ斯レ

ハ殘ル所ハ單ニ海關稅恢復ノ一事ニ在リ舊現行條約ノ稅率ハ從價稅五分(其實ハ四分強)ナルヲ以テ較近(二十一年乃至二十三年)三箇年平均四百五十六萬五千九百七拾圓餘ニ過キス(就中輸入稅平均二百八十四萬圓餘輸出稅壹百七拾二萬五千圓餘)今假ニ改正案ニ附隨スル稅率平均壹割一分(即チ井上伯ノ編制ニ係リ而シテ大隈伯青木子モ共ニ因襲スルモノ)ヲ締盟各國ニ於テ承諾ストスルモ輸入稅全額ハ七百八十一萬四千六百九十九圓ニ過キサルヘキヲ以テ(但シ之ニ輸出稅平均額壹百七拾二萬五千圓ヲ加レハ九百五拾三萬九千六百九拾九圓トナル)前文新稅率壹割壹分ヲ改テ壹割四分ト爲ストキハ輸入稅ノ全額ハ壹千萬圓トナル可シ而シテ此増額ハ今距三十四年前米國ト結約ノ稅法大約貳割ニ比スレハ猶ホ四分ヲ減セリ勿論海關稅ノ收入額ハ稅率ノ高低ヨリモ商況ノ盛衰ニ關スルコト多キヲ以テ一概ニ稅率ヲ高ムルヲ得策ト爲スニハフラストモ此邊ニ就キ各位ノ賢慮如何

因ニ記ス左ニ締盟各國輸入海關稅率及ヒ其收入稅額ト歲入全額トノ比較表ヲ掲ケ以テ參考ノ便ニ供ス

○締盟諸國輸入稅收入高比較

國名	年 度	(輸入ニ對スル百分ノ割合)	(對輸入金高ニ對スル百分ノ割合)
奧國	千八百八十年	五七	八五
白耳義	千八百八十年	八〇	一八
佛蘭西	千八百八十年	五〇	二〇八
日耳曼	千八百八十年	八九	七九
英吉利	千八百八十年	三九	二四
伊太利	千八百八十年	一三〇	四六
和蘭	千八百八十年	四三	〇四
葡萄牙	千八百八十年	四七	二九二
露西亞	千八百八十年	一三七	一八三
西班牙	千八百八十年	一六四	一九二
瑞典及諸國	千八百八十年	三七四	二〇六
瑞 西	千八百八十年	四〇〇	二七
北米合衆國	千八百八十年	五七九	三〇四
日 本	千八百八十年	三五	四一六
同	同	九四	二〇三
青木公使云ク子ハ井上伯ノ稅率(平均壹割壹分)ニ因ルヲ以テ可トス該稅率トテモ五十六年後ニハ終了スヘキヲ以テ今頃ニ一層稅率ヲ高ムルハ却テ與國ノ不同意ヲ惹起ス可シ伊藤議長亦以テ然リト爲ス是ニ於テ本官モ亦之ニ同意ヲ表ス本官云ク世上ニ稅權恢復論者ノ多キハ畢竟現行條約ノ稅率	現行稅率	提出ノ稅率	

タル互相主義ニ基カサルヲ以テナリ今假ニ新稅率(壹割一分)終了後ハ(即チ結約ヨリ五十六年後)稅權恢復スト雖トモ直チニ保護主義ヲ採リ米國等ノ如キ普通稅率(自定稅率)ヲ外國品ニ課スルハ我カ貿易ヲ發達セシムルノ道ニアラサル可シ故ニ我カ爲メニハ現歐洲多數ノ國ニ行ハル、互相主義ナル定約稅率ニ依ルヲ以テ得策タルヘシト思惟ス前日本官カ英公使ト私話ノ節同公使カ英政府ハ自定稅率ニ同意ヲ表メルヲ得スト主張セシモ畢竟新稅率終了後直チニ高額ノ保護稅ヲ課スルモ知ルヘカラストノ疑ヲ抱クニ坐スルナルヘシ但シ我邦モ亦歐洲諸國ノ如ク普通稅率ヲ制定セサルヘカラスト而シテ新稅率終了後ハ此普通稅率ニ基キ更ニ定約稅率ヲ編制スルヲ要ス

(以上伊藤議長、青木公使共ニ異議ナシ)

伊藤議長云ク子ニ一案アリ他ナシ新タニ普通稅率ヲ制定シ而シテ締盟各國中ニ就キ重要ナル物品文ケ(譬ヘハ英ノ鐵、綿、米ノ右腦油ノ如キ)ヲ甄別シテ國別ニ定約稅率ヲ結約シ其他ノ物品ハ一切我カ普通稅率ヲ賦課スルコトヲ得ハ體面上ニ於テモ大ニ都合ヨシ

青木公使云ク伊藤伯ノ案ハ固ヨリ可ナリト雖トモ今直チニ

國別ニ定約稅率ヲ結約セント欲セハ幾多ノ時月ヲ費サルヲ得サルヘク且ツハ各國ノ同意ヲ得ヘキヤ否豫測シ難シ故ニ予ハ新稅率終了ノ期後ヲ待テ舉行スルヲ妥當トス本官云ク伊藤伯ノ案ニシテ各國ノ同意ヲ得ハ幸ナリト雖トモ稍疑ナキ能ハス故ニ實際談判ノ際ニ試ミルヘキモノトシテハ如何(伊藤伯別ニ異議ナシ)

○商議ノ結果

一改正談判ハ本官提出ノ甲案ヲ以テ基礎ト爲シ彼レ如シ我カ請求ヲ承諾セサル時ハ不得已乙案ニ移ルコト其他甲案ノ各條共ニ異議ナシ
一明年一月ヨリ實施セラルヘキ商法、民法ハ一日モ早ク委員ヲ組織シテ修正ニ從事スルコト
一談判ヲ彼地ニ移シ我遣外各公使ニ訓令ヲ與ヘテ負擔セシムルコト

但シ全權大使特派ノ便否ハ未決ニシテ散會ス

明治二十五年三月

榎本武揚

四〇一 明治三十五年四月十二日 條約改正案調査委員會

條約改正案調査委員會日記

附屬書

一 寺島伯案和親通商航海條約併ニ條約案編成理由ノ説明

二 井上樞密顧問官提出不動産所有殖民人民貨物ニ關スル實議(第一書)

三 第二書ニ對スル榎本外務大臣意見

四 井上樞密顧問官提出條約廢棄ニ對スル意見(第二書)

五 井上樞密顧問官提出不動産所有禁止ニ關スル件(第三書)

六 第三書ニ對スル榎本外務大臣ノ意見

七 井上樞密顧問官提出不動産所有禁止ニ關スル方法調査案(第四書)

八 寺島伯案第一條乃至第三條及ヒ議定書ニ關スルデニソン氏ノ意見

九 條約改正案ニ對スル第一議 伊藤博文

一〇 伊藤伯條約改正案ニ對スル第一議ノ所答 寺島宗則

一一 伊藤樞密院長提出條約廢棄ニ關スル件

一二 井上樞密顧問官提出沿海漁業ヲ内國人民ニ專屬セシムル意見

一三 井上樞密顧問官提出議定書中ノ修正ヲ要ス

調査ヲ以テス卿等誠實公正ヲ旨トシ戮力協議シ以テ朕カ採擇ニ供セヨ

先是四月五日ノ閣議ニ於テ今度組織セラルヘキ條約改正案調査委員會ハ外務省ニ於テ會議ヲ開クコトニ決定シタルヲ以テ外務大臣官邸内ノ一室ヲ以テ委員會合ノ場所ニ充テ四月十三日ヲ以テ第一會ヲ開ケリ

四月十三日 第一會

出席者 伊藤樞密院長 榎本外務大臣

後藤遞信大臣 副島内務大臣

井上樞密顧問官

松方内閣總理大臣 大木文部大臣

河野農商務大臣

議事ノ順序及文書ノ保管ニ關シ左ノ六ヶ條ヲ議決ス

一、議事ノ纏マリノ爲メニ委員中ヨリ一ノ委員長ヲ推薦ス

二、委員長ハ議事ヲ開閉シ議題ヲ提出シ之ヲ整理シ書記官ヲ指揮シテ文書ヲ整頓ス

三、議事ノ都合ニ因リテハ出席員(内閣員ヲ加フ)ノ多數又ハ重大ノ件ニ就テハ各員ノ多數ヲ以テ決ヲ取ル

榎本外務大臣時代 四〇一

ル件

一四 榎本子案第十條海員逃亡ノ件ニ關スル一方案 中田敬義

一五 榎本子案議定書第三條旅行免狀ノ件ニ關スル一方案 中田敬義

一六 議定書第二條中宿兵義務、兵役及ヒ軍用捐資等ノ免除ニ關スル條款ノ説明 デニソン

一七 バテルノ・ストロー氏意見書

1 對等條約ト非對等條約ニ關スル件

2 海關稅目ニ關スル件

3 沿海貿易ニ關スル件

明治三十五年四月十二日午前十一時宮中ニ於テ伊藤樞密院長榎本外務大臣後藤遞信大臣副島内務大臣黒田樞密顧問官寺島樞密顧問官井上樞密顧問官ニ親シク條約改正案調査委員仰付ケラレ松方總理大臣始メ他ノ國務大臣ニモ調査ニ參列スヘキ旨御沙汰アラセラレ委員ニ賜フニ左ノ勅語ヲ以テセラレタリ

朕即位以來内治百般ノ事粗々其緒ニ就クモ外政未タ舉ラサル者アリ惟フニ條約改正ハ中興ノ鴻業ニ隨伴シ國權ノ大本ニ關緊ス朕ハ我臣民ト俱ニ條約改正ノ成局ヲ望ムニ切ナリ今特ニ卿等ヲ選任シテ委スルニ改正案ノ

ヘキコトヲ委員長ノ見込ヲ以テ定ム

四、多數決ノ場合ニハ委員長ハ一ノ表決權ヲ有シ可否同數ナルトキハ委員長ノ意見ニ決スヘシ

五、出席ノ委員三人ニ滿タサルトキハ當日ノ議決ヲ爲サス

六、文書ハ外務大臣ノ指揮ニ從ヒ書記官之ヲ保存ス次ヒテ委員長ノ選舉ヲ行ヒ多數ヲ以テ榎本外務大臣其任ニ當ラレタリ

委員長ハ政務局長栗野慎一郎秘書官中田敬義ヲ委員會ノ書記官ニ任命シ外務省出仕ノ松方幸次郎ニ其補助タルヘキコトヲ命セラレタリ

榎本外務大臣ハ四月五日ノ閣議ニ於テ松方内閣總理大臣伊藤樞密院長大木文部大臣榎本外務大臣後藤遞信大臣高島陸軍大臣田中司法大臣副島内務大臣河野農商務大臣列席ニテ決定セシ條約改正問題ニ關スル左ノ四個條ヲ各員ニ出示セラレタリ即チ

一、條約改正ハ全權ヲ派出シ各外國政府ニ就キ商議決定セシムヘキ事

一、改正立案ハ我政府ニ於テスヘキコト

一、條約草案調査ヲ選定シ外務省ニ於テ會議ヲ開ク事
一、委員會ノ事務ハ凡テ外務大臣擔當スヘキ事
寺島樞密顧問官ヨリ和親通商航海條約及議定書案ト右約案
編成理由ノ説明書トヲ委員會ニ提出セラレタリ

(以下此案ヲ單ニ寺島伯案ト稱ス)

因ニ云フ寺島伯案ハ遷移期限ヲ置カス現行條約ヨリ一
躍シテ對等條約ヲ結ハントスル主意ニテ立案セシモノ
ナレトモ此事タルヤ恐クハ締盟國ノ肯諾スヘキコトニ
非サルヘシ云々ノ議論アリ

榎本子案ノ甲案ニ對シ意見ヲ有スルモノハ各々之ヲ起草シ
テ委員長ニ提出シ委員長ハ各員ノ意見ヲ集メテ之ヲ議事ニ
附スヘキコト及ヒ寺島伯案ト榎本子案ノ約案トヲ對照シ之
ヲ印刷ニ付シ其成ルヲ俟テ第二會ヲ開クコトヲ決シテ散會
ス

四月十八日天皇陛下ヨリ德大寺侍從長ヲ勅使トシテ榎本外
務大臣ニ左ノ聖旨ヲ傳サセ玉ヘリ

抑條約改正ノ事タルヤ至難至重ノ問題ニシテ大ニ國家
百年ノ利害ニ關繫ス今假リニ全國開放後ノ成行如何及

四月二十二日 井上樞密顧問官ヨリ現行條約廢棄說ニ對ス
ル意見書ヲ提出セラレタリ (第二書) 五月三日寫テ各委員
各大臣ニ送付セリ

四月二十三日 井上樞密顧問官ヨリ不動産ノ相續ニ關スル
件ニ付意見書ヲ提出セラレタリ (第三書) 因テ榎本外務大
臣ハ之ニ對スル意見ヲ起草セラレタリ 五月三日寫テ各委員
各大臣ニ送付セリ

四月廿五日 井上樞密顧問官ヨリ外國人不動産所有禁止ニ
關スル方法調査案ヲ提出セラレタリ (第四書) 四月廿七日
寫テ各委員
各大臣ニ送付セリ

同日「デニソン」氏ヨリ寺島伯案ニ對スル意見書ヲ提出セ
リ
四月廿七日 伊藤樞密院議長ヨリ條約改正案ニ對スル第一
議ヲ提出セラレタリ 四月廿八日寫テ各委
員各大臣ニ送付セリ

五月二日 寺島樞密顧問官ヨリ提出セラレシ約案編成理由

領事裁判權撤回後ノ模様如何ヲ豫想スルトキハ深思熟
慮ヲ要スヘキトコロアレハ充分慎重ニ利害得失ノアル
トコロヲ鑑ミ時機ノ來ルヲ待ツ方可ナラン云々(此時
機ノ來ルヲ待ツ方可ナラントノ聖意ハ今急速ニ改正ノ
業ニ着手セスシテ寧ロ現行條約ヲ姑ク存續シ以テ內國
諸事ノ更ニ進テ整頓ノ域ニ達スルヲ待ツヘシトイフニ
在ルカ如シ)

因テ榎本大臣ハ聖訓ハ謹テ服膺スヘシ但シ之ニ關シテハ猶
ホ御前ニ伺候シテ意見ヲ縷陳スヘシト奉答セラレタリ

因ニ云黒田樞密顧問官エモ同様ノ勅使ヲ遣ハサレタリ
ト

四月二十日 寺島伯案ト榎本子案ト對照ノ分印刷成リタル
ヲ以テ各委員及各大臣ヘ一部ツ、送付セリ

四月二十一日 井上樞密顧問官ヨリ外國人不動産所有禁止
ノ件及英領殖民地人民貨物ニ關スル件ニ付質疑書ヲ提出セ
ラレタリ (第一書) 因テ榎本外務大臣ハ之ニ對スル意見ヲ
起草セラレタリ 五月三日寫テ各委員
各大臣ニ送付セリ

ノ説明書ト「デニソン」氏ノ同伯案ニ對スル意見書譯文ヲ
各委員各大臣ヘ送付セリ

五月三日 寺島樞密顧問官ヨリ伊藤樞密院議長ヨリ提出セ
ラレシ「條約改正案ニ對スル御一議」ニ對スル答議書ヲ提
出セラレタリ 即日寫テ各委員各
大臣ニ送付セリ

五月六日 伊藤樞密院議長ヨリ條約廢棄問題ニ關スル意見
書ヲ提出セラレタリ 五月九日寫テ各委員
各大臣ニ送付セリ

五月十三日 井上樞密顧問官ヨリ沿海漁業ヲ內國人民ニ專
屬セシムルコトニ關シ意見書ヲ提出セラレタリ 五月十八日
寫テ各委員
各大臣ニ送付セリ

五月廿九日 井上樞密顧問官ヨリ議定書中ノ修正ヲ要スル
件ニ付意見書ヲ提出セラレタリ 五月三十一日寫テ各委
員各大臣ニ送付セリ

以上 中田秘書官記之

附屬書一

明治二十五年四月十三日 條約改正調査委員會文書(一)

榎本大臣原案
寺島伯案及條約案編成理由ノ説明

和親通商航海條約

日本皇帝陛下及ヒ某國皇帝陛下（又大統領閣下）ハ兩國臣民ノ交際ヲ皇張増進シ以テ兩國間ニ存在スル所ノ親和ヲ維持センコトヲ欲シ而シテ此目的ヲ達センニハ從來兩國間ニ存在スル所ノ條約ヲ改正スルニ如カサルヲ確信シ公信ノ主義ト相互ノ利益ヲ基礎トシ其改正ヲ完了スルコトヲ決定シ之ヲ爲メニ日本國皇帝陛下ハ某ヲ某國皇帝陛下（又大統領閣下）ハ其ヲ各其全權委員ニ任命セリ因テ右全權委員ハ互ニ其委任狀ヲ示シ其妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

本項ハ明治二十二年米國全權委員ノ調印ヲ經タル改正條約案（甲號ト名ツク）及ヒ明治二十四年英國ヨリ提出シタル改正條約案（乙號ト名ツク）ノ序文ニ據ル

條約第二項
第一條

兩締盟國版圖ノ間ニハ互ニ充分ナル通商及航海ノ自由アルヘシ

本項ハ甲號第二條第一項ニ據ル

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ版圖内何處ニ

條約第二項
第二條

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ其國ノ法律ヲ遵守スルモノハ何ノ處ニ到リ或ハ旅行シ或ハ住居スルモ全ク隨意タルヘシ而シテ其身體及ヒ財産ニ對シテハ完全ナル保護ヲ享受スヘシ

本項ハ甲號第一條一項ニ據リ左ノ字句ヲ追加ス

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ニシテ他ノ一方ノ版圖内（ニ於テ其國ノ法律ヲ遵守スルモノハ）何ノ處ニ到リ或ハ旅行シ或ハ住居スルモ全ク隨意タルヘク而シテ其身體及ヒ財産ニ對シテハ完全ナル保護ヲ享受スヘシ

同前

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ各種動産ノ處分ニ關シテハ内國臣民ト同様ノ特典、自由及ヒ權利ヲ享有シ且此事ニ關シテハ唯内國臣民ト同一ノ租稅若クハ賦課金ヲ徵收セラルヘシ

本項ハ甲號第一條ニ據リ左ノ字句ヲ修正ス

「居住權不動産及ヒ各種動産ノ所有委囑又ハ其他ノ方法ニ因ル所ノ不動産若クハ動産ノ相續並ニ各種財産ノ授受ニ關シ」兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在テ（各種動産ノ處分ニ關シテハ）内國

於テモ各種ノ生産物、製造品及ヒ法律ニ違背セサル貨物ノ卸賣營業ニ從事スルヲ得ヘシ右營業ニ從事スルニ於テ自身ニ之ヲ爲シ或ハ代理人ヲ以テシ又ハ一人ニテ之ヲ爲シ或ハ外國人若クハ内國臣民或ハ人民ト組合ヲ結ビテ之ヲ爲スモ隨意タルヘシ但内國臣民或ハ人民ト同様其國ノ法律ヲ遵守スルヲ要ス

本項ハ甲號第二條第二項ニ據リ左ノ字句ヲ修正ス

但内國臣民或ハ人民ト同様其國ノ法律「警察規則及ヒ稅關」規則ヲ遵守スルヲ要ス

條約第三項
第二條

兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ其船舶並ニ貨物ヲ以テ他ノ一方ノ版圖内ノ各地、諸港及ヒ諸河ニシテ以テ外國通商ノ爲メ現ニ開カレ又ハ將來開カルヘキ場所ニ自在ニ到來スルヲ得且工業製造、通商及ヒ航海ノ事項ニ關シテハ政府、官吏、一己人或ハ會社等ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其利益ノ爲メニ課セラルル所ノ租稅或ハ取立金ハ其性質若クハ名稱ノ如何ヲ論セス内國臣民ノ拂フ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノモノヲ拂フコトナク内國臣民ト同一ノ待遇ヲ受クヘキモノトス

本項ハ甲號第二條第三項ニ據ル

臣民ト同様ノ特典、自由及ヒ權利ヲ有シ且此事ニ關シテハ唯内國臣民ト同一ノ租稅若クハ賦課金ヲ徵收セラルヘシ

同前

右臣民或ハ人民ハ不動産ニ關シテハ最惠國人民ノ待遇ヲ與フルモノトス

本項ハ千八百七十一年合衆國ト伊太利國通商航海條約第二十二條二項及ヒ千八百四十年合衆國ト葡萄牙國通商航海條約第二十二條二項ニ據リ新クニ挿入ス

同前

何等ノ名義ヲ以テスルモ該臣民或ハ人民ヲシテ内國臣民ノ納ムヘシ所ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ取立金若クハ租稅ヲ納メシムルヲ得ス

本項ハ甲號第一條五項ニ據ル

條約第三項
第三條

兩締盟國ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在テハ内國臣民ト異ナル條件ヲ履マス又之ニ異ナル制限ヲ受ケス若クハ内國臣民ニ賦課セル稅金外ノモノヲ拂ハスシテ其權利ヲ伸張シ及ヒ防護センカ爲メ自由ニ裁判所ニ訴出ツルコトヲ得ヘク又該裁判所ニ於テ其權利ヲ伸張シ及ヒ防護スルニ關シ内國臣民或ハ人民同様ニ内國ノ法律ニ依リ代言ノ業務ニ

從事スル免許ヲ得タル者ノ中ヨリ代言人、辯護人及ヒ代人ヲ選擇シ且ツ使用スルコトヲ得ヘシ

本項ハ甲號第一條第二項ニ據リ左ノ字句ヲ修正ス

(兩締盟國ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在テハ内國臣民ト異ナル條權ヲ履マス又之ニ異ナル制限ヲ受ケス若クハ内國臣民ニ賦課セル税金外ノバノヲ拂ハスシテ)其權利ヲ伸張シ及ヒ保護センカ爲メ自由ニ且ツ容易ニ裁判所ニ訴出ツルコトヲ得ヘク又該裁判所ニ於テ其權利ヲ伸張シ及ヒ保護スルニ付内國臣民或ハ人民ト同様ニ代言人、辯護人及ヒ代理人ヲ選擇且ツ使用スルコトヲ得ヘシ」而シテ右外司法取扱ニ關スル各般ノ事項ニ關シテ内國臣民或ハ人民ノ享有セル總テノ權利及ヒ特權ヲ享有スヘシ」

附定第二條
條權内項

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ良心ニ關シ完全ナル自由及ヒ住居國ノ憲法、法律、慣行ニ遵依スル限リハ公私ノ教式ヲ行フノ權利并ニ自國人ヲ埋葬スルノ權利ヲ享有スヘシ

本項ハ甲號第一條四項ニ據リ其字句ヲ左ノ如ク修正ス

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ

本項ハ甲號第三條一項ニ據ル

第三條

第五條

某國皇帝陛下又某國ノ版圖内ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ日本皇帝陛下ノ版圖ニ輸入シ又日本皇帝陛下ノ版圖内ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ某國皇帝陛下又某國ノ版圖内ニ輸入スルモ總テ別國ノ生産或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ニ課スル所ノ税ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ税ヲ課セラルコトナカルヘシ又締盟國ノ一方ノ版圖内ニ別國ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ノ輸入ヲ禁止セサル間ハ他ノ一方ノ版圖内ノ生産或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ノ何レノ地ヨリ輸入スルコトヲモ禁止スルコトナカルヘシ但此末項ノ條款ハ人民、畜類或ハ農業ニ有用ナル植物ノ安全ヲ保護スルニ必要ナル衛生上及ヒ其他ノ禁止ニハ適用スヘカラサルモノトス

本項ハ甲號第四條及乙號二條ニ據ル

第三條

第六條

兩締盟國ノ一方ノ版圖内ニ一切ノ物品ヲ輸入スルニハ他ノ各外國ニ輸入スル同種物品ニ對シテ賦課シ又ハ賦課スルコトアルヘキ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ税金又ハ雜費ヲ

於テ良心ニ關シ完全ナル自由及ヒ法則及ヒ規則ニ從ヒ(住居國ノ憲法、法律、慣行ニ遵依スル限リハ)公私ノ教式ヲ行フノ權利並「其宗教上ノ慣習ニ從ヒ」自國人ヲ埋葬スルノ權利ヲ享有スヘシ「尙ホ其爲メ適當且便宜ノ埋葬地ヲ設置保有セラルコトアルヘシ」

附定第二條
條權第三項

右臣民或ハ人民ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ住居スル者ハ陸軍、海軍、護國軍、民兵等ニ論ナク總テ強迫兵役ヲ免ルヘシ且其服役ノ代トシテ取立ル所ノ金錢若クハ物品ノ徵收ハ總テ之ヲ免ルヘシ又一切ノ取立金及ヒ軍事上ノ捐資ヲ免ルヘシ但不動產ノ所有若クハ借用ニ關シテ内國臣民或ハ人民ニ賦課スル所ノ税金、賦金並ニ所有者若クハ借用者トシテ負擔サルコトアルヘキ取立金或ハ軍事上ノ捐費ハ免除ノ限リニアラス

附定第二條
條權第三項

本項ハ甲號第一條六項ニ據ル

附定第二條
條權第三項

第四條

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在テハ法律ニ於テ定ムル處ノ手續ヲ履行スルトキハ事實特許、商標及ヒ意匠ニ關シ兩國臣民或ハ人民ト同一ノ保護ヲ有スヘシ

賦課スルコトナカルヘシ又兩締盟國ノ一方ノ版圖内ニ於テ他ノ各外國ニ向ヒ物品ノ輸出ヲ禁止セサル間ハ他ノ一方ノ版圖内ニ同種ノ物品ヲ輸出スルコトヲモ禁止セサルヘシ

本項ハ甲號第四條及乙號第三條ニ據ル

附定第二條
條權第三項

第七條

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在リテ内地通關税ノ免除、庫入、恩惠、便益及ヒ税金拂戻ノ諸事項ニ就キ全ク内國臣民ト同一ノ待遇ヲ受ケヘシ

本項ハ甲號第七條一項及乙號第四條ニ據ル

附定第二條
條權第三項

第八條

某國皇帝陛下又某國ノ版圖内ノ外國通商ヲ許サレタル港ニ於テ某國船舶ヲ以テ法律上輸入スルヲ得或ハ輸入スルヲ得ルコトアルヘキ一切ノ物品ハ日本國船舶ヲ以テ之ヲ同港ニ輸入スルモ其國船舶ヲ以テ輸入セルト同一ニ何等ノ餘分若クハ特種ノ税金或ハ賦課ヲ負擔スルヲ要セス又日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ外國通商ヲ許サレタル港ニ於テ日本國船舶ヲ以テ法律上輸入スルヲ得或ハ輸入スルコトアルヘキ一切ノ物品ハ某國船舶ヲ以テ之ヲ同港ニ輸入スルモ日本國船舶ヲ以テ輸入セルト同一ニ何等ノ餘分若クハ特種ノ税金或ハ

賦課ヲ負擔スルヲ要セサルヘシ而シテ此相互平等ノ待遇ハ各方ノ物品カ直接ニ其生産地ヨリ來ルト他ノ地方ヲ經テ來ルトニ關セス均シク適要スヘキモノトス右同様ニ輸出物品ニ關スル待遇モ充分平等ナラサルヘカラス即チ法律上輸出スルヲ得ルコトアルヘキ各物品ハ日本國又ハ某國孰レノ船舶ヲ以テ輸入スルヲ論セス又ハ其輸送地ハ各締盟國版圖内ノ海港タルト別國ノ海港タルヲ論セス兩締盟國ノ版圖内ニ於テ總テ同一ノ輸出稅ヲ拂フヘシ

本項ハ乙號第七條ニ據リ左ノ字句ヲ修正ス

某國皇帝陛下又某國內版圖内ノ(外國通商ヲ許サレタル港)諸港ニ於テ

以下本項ノ儘

第九條

兩締盟國ノ沿海貿易ハ本條約ニ於テ規定スルノ限ニアラス日本及ヒ某國ニ於テ現ニ施行シ又ハ將來施行スヘキ法律規則ヲ以テ之ヲ規定スヘキモノトス

本項甲號第十條一項前節及ヒ乙號第八條一項前節ニ據ル後節ハ削除ス

前節略「然レトモ某國ニ於ケル日本國臣民又ハ日本國

ヲ得ヘシ但商船ノ艦長ニシテ其費用ヲ辨償スル爲メ其積荷ノ一部ヲ賣却スルヲ要スル場合ニハ該艦長ハ其寄港地ノ規則及レ稅目ヲ遵守スヘキモノトス兩締盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ他ノ一方ノ沿岸ニ於テ淺瀬ニ乘リ上ケ或ハ難破シタルトキハ地方官ヨリ該地方ニ在ル處ノ總領事、領事、副領事或ハ領事代理ヘ其旨ヲ通知スヘシ若シ該地方ニ領事官ナキトキハ最近地方ノ總領事、領事、副領事又ハ領事代理ヘ通知スヘシ

本項ハ甲號第十二條一項及ヒ乙號第十條一項ニ據ル日本帝國版圖内ノ海上ニテ難破シ若クハ海岸ニ乗上ケタル某國船舶ノ救助ニ關スル一切ノ手續ハ日本國法律ニ從テ之ヲ爲スヘク又互相ノ主意ニ基キ某國版圖内ノ海上ニテ難破シ若クハ海岸ニ乗上ケタル日本船舶ニ關スル救助ノ處分ハ某國法律ニ從ヒ之ヲ爲スヘシ

本項ハ甲號第十二條二項及ヒ乙號第十條二項ニ據ル右難難ノ船舶並ニ其器具及ヒ其他一切ノ附屬品及ヒ該船舶ヨリ救上ケタル貨物並ニ商品及ヒ右等ノ諸物件ニシテ海中ニ投棄セラレタルモノ或ハ之ヲ賣却セル所得金並ニ該難難船内ニ發見セラレタル一切ノ書類ハ右船舶ノ持主或ハ代理

ニ於ケル某國人民ハ此事項ニ關シテハ右法律ニ因テ他ノ外國臣民或ハ人民ヘ許與セラレ又ハ許與セラルルコトアルヘキ諸權利ヲ享有スルモノトス」

某國ノ二個以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル日本船舶及ヒ日本ノ二個以上ノ港ヘ仕向港ノ一ニ於テ其積荷ノ一部ヲ陸揚シ而シテ其最初ノ積載シタル貨物ノ剩餘ヲ陸揚スル爲メ外國貿易ヲ許サレタル他ノ一港若クハ數港ヘ進航スルコトヲ得ヘシ但常ニ兩國ノ法律及ヒ稅關規則ニ從フヘキモノトス

本項ハ甲號第十條二項前節及ヒ乙號第八條二項前節ニ據リ後節ヲ削除ス

前節略「然レトモ日本帝國政府ハ左ノ讓與ヲ爲スヘシ即チ合衆國船舶ハ橫濱神戸及ヒ長崎ノ諸港ノ間ニ於テ荷物ヲ運搬スルコトヲ得ルモノトス」

第十條

兩締盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ暴風又ハ其他ノ危難ニ遭遇シ避難ノ爲メ無據地ノ一方ノ海港ニ進入スルモノハ內國船舶ノ拂フヘキ稅金ノ外一切ノ稅金ヲ拂フコトナク其港ニ於テ更ニ機裝ヲ爲シ一切ノ需用品ヲ求メ再ヒ航行スル

人ヨリ要求スルトキハ引渡スヘシ右持主或ハ代理人ノ現場ニ在ラサルトキハ內國法律ニ定メタル期限内ニ當該總領事、領事、副領事或ハ領事代理ヨリ請求スレハ之ヲ引渡スヘシ而シテ右領事官或ハ持主或ハ代理人ハ內國船舶難破ノ場合ニ於テ拂フヘキ所ノ物品保存費並ニ難破救助費及ヒ其他ノ費用ヲ拂フヘキモノトス

本項ハ甲號第十二條三項及ヒ乙號第十條三項ニ據ル難破船ヨリ救上ケタル貨物及ヒ商品ハ消費ノ爲メニ之ヲ賣捌クニ非サレハ一切ノ關稅ヲ免除スヘシ但消費ノ爲メニ賣捌ク場合ニハ通常ノ稅金ヲ納ムルヲ要スルモノトス

本項ハ甲號第十二條四項及ヒ乙號第十條四項ニ據ル兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ニ屬スル船舶ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ淺瀬ニ乘リ上ケ或ハ難破シタルトキ其持主、船長若クハ持主代理人不在ノ場合ニハ當該總領事、領事、副領事若クハ領事代理ハ其自國臣民或ハ人民ニ必要ノ扶助ヲ與フル爲メ職權上ノ助力ヲ爲スヲ許サルヘキモノトス此規則ハ持主、船長若クハ持主代理人現ニ其場ニ在ル時ト雖トモ右様ノ扶助ヲ與フルヲ要スル場合ニモ交適用スヘキモノトス

本項ハ甲號第十二條五項及ヒ乙號第十條五項ニ據ル

第十條 第十一條

若シ締盟國ノ一方ニ屬スル軍艦或ハ商船ノ海員ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ逃亡スルモノアルニ際シ右船舶所屬國ノ領事又ハ其代理官ヨリ其逮捕引渡ノ事ヲ地方官ヘ依頼スルトキハ該地方官ハ其權力ノ及フ限り該逃亡人ヲ逮捕シ且之ヲ引渡ス爲メ助力ヲ爲スヲ要スルヒノトス

本項ハ甲號第十四條一項及ヒ乙號第九條一項ニ據ル

此條款ハ右海員ノ逃亡シタル國ノ臣民或ハ人民ナルトキハ適用スヘカラサルモノトス

本項ハ甲號第十四條二項及ヒ乙號第九條二項ニ據ル

第十二條

政府、官吏、一私人、會社若クハ其他ノ施設等ノ利益若クハ名義ニ於テ課スル各噸税、港税、水先案内料、燈臺税、檢疫税其他何タル名義ヲ以テスルヲ論セス同種同質ノ課税ハ兩締盟國ノ一方ノ版圖内ノ諸港ニ於テモ他ノ一方ノ船舶ニ自國ノ船舶ニ課スルヨリ餘分ノ税ヲ課セサルヘシ而シテ斯ル待遇上ノ平等ハ各締盟國ノ船舶カ何港何地ヨリ來着シ若クハ何處ニ行クヲ論セス相互ニ適用スヘシ

與スル處ノ一切ノ特權、殊遇若クハ免除ハ他ノ一方ノ臣民ニモ即時ニ且條件ナクシテ之ヲ許與スヘキコトヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

本項ハ乙號第十五條ニ據ル

第十五條

本條約ハ調印後成ルヘク速ニ之ヲ批准シ其批准書ヲ交換シ其後何箇月ニシテ之ヲ實行シ其實行ノ日ヨリ滿十二年間效力ヲ有スルモノトス

本項ハ乙號第十七條一項ニ據リ左ノ字句ヲ修正ス

本條約ハ（調印後成ルヘク速カニ之ヲ批准シ）「實施シ調印後一年間ニ東京ニ於テ批准シ」其批准書ヲ交換シ其後

一「箇月」（何箇月）ニシテ之ヲ實行シ（其實行ノ日ヨリ）而シテ「滿十二年間效力ヲ有スルモノトス

第十八條

兩締盟國ノ何レノ一方ニテモ本條約實施ノ日ヨリ十一年ヲ經過シタル後ハ何時ニテモ一方ニ對シ本條約ヲ廢止セント欲スル旨ヲ通知ノ權利ヲ有シ而シ右通知ヲ爲シタル後十二箇月ヲ經過セハ本條約ハ全ク廢止終了スルモノトス

本項ハ甲號第二十四條二項ニ據ル

右證據トシテ雙方ノ全權委員ハ本條約書四通即チ日本文二

本項ハ乙號第十三條ニ據ル

第十三條

兩締盟國ノ一方ハ他ノ一方ノ海港、都府及ヒ其他ノ場所ニ總領事、領事、副領事及ヒ領事代理ヲ置クコトヲ得ヘシ然レトモ右總領事、領事、副領事及ヒ領事代理ハ定式ニ從ヒ其赴任國政府ノ認可ヲ經ルニ非サレハ其職務ヲ行フヘカラス但領事官ノ駐在ヲ認許スルニ便宜ナラサル場所ハ例外タルヘシ

本項ハ甲號第十八條一項及ヒ乙號第十四條一項ニ據ル然レトモ右ノ例外ハ他ノ諸外國ニ對シ之ヲ適用スルニ非サレハ一方ノ締盟國ニ對シテ之ヲ適用スルヲ得サルモノトス

本項ハ甲號第十八條二項及ヒ乙號第十四條二項ニ據ル

總領事、領事、副領事及ヒ領事代理ハ其在留國ニ於テ最惠國ノ領事官ニ現ニ許與セラレ或ハ將來許與セラルヘキ一切ノ特權及ヒ免除ヲ享有スヘキモノトス

本項ハ甲號第十八條三項及ヒ乙號第十四條三項ニ據ル

第十四條

兩締盟國ノ版圖内ニ於ケル通商或ハ航海ニ關スル一切ノ事項ニ於テ現時或ハ將來其一方ヨリ別國ノ臣民或ハ人民ニ許

通及ヒ英文二通ニ記名調印スルモノナリ而シテ右ノ四通ハ總テ同一ノ意義及ヒ趣旨ヲ有スルモノトス

本項ハ甲號第二十四條三項及ヒ乙號第十七條三項ニ據リ左ノ字句ヲ削除ス

前節略「若シ其抵牾スルコトアル場合ニハ英文ヲ以テ正

確ナルモノト爲スヘシ」

明治二十年何月何日即チ西曆千八百何十年何月何日何々ニ於以書ス

議定書

日本國皇帝陛下ノ政府及ヒ某國政府ハ本日調印シタル和親通商航海條約ノ外更ニ公正ナル取極ヲ爲サント欲シ雙方ノ全權委員ハ左ノ約款ニ同意セリ

序文ハ甲號ニ添ヒタル議定書ノ序文ヲ取捨シテ之ヲ掲ク第一 某國カ日本ニ於テ其臣民（又人民）ニ對シ執行スル領事裁判權ハ本日調印シタル和親通商航海條約實施ノ日ヨリ直チニ其執行ヲ廢止スヘキ事ヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

本項ハ英國提出ノ議定書第一項ノ旨趣ヲ參酌シテ之ヲ掲ク

四

第二 現行ノ條約或ハ取極ニ由リ從來某國臣民カ治外

法權ヲ爲メ日本國ニ於テ享有セル一切ノ權利、特權及ヒ免除ハ右和親通商及ヒ航海條約實施ノ日ヨリ廢止セラレ

ヘキコトヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

本項ハ甲號第二十條及ヒ乙號第十八條ノ旨趣ヲ參酌シテ之ヲ揭ク

第三

日本海關稅及ヒ開港場ニ關スル諸規則制定ノ權ハ右和親通商航海條約實施ノ日ヨリ獨リ日本政府ニ屬スルコトヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

本項ハ明治十二年米國改定條約第二條二項ノ旨趣ヲ參酌シテ之ヲ揭ク

第四

和親通商航海條約實施ノ時ニ於テ某國領事裁判所ニ於テ裁判中ノ訴訟事件ニ付テハ裁判終決迄某國領事裁判所ノ裁判權ヲ繼續スヘキ事ヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

第五

現行ノ條約或ハ取極ニ由リ從來開港場ニ於テ某國官民（又人民）カ日本政府ヨリ賃借シタル居留地ノ不動産ニ關スル事項ハ總テ日本現行ノ法律ニ準依シテ處分スヘキ事ヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

殖ノ通路ナレハ株主タル外國人ノ多數ニテ其運賃ヲ上クル等ノ奸策アル時ハ之ヲ制スルコト能ハサルカ如キノ患アリ若シ是迄ノ如ク外國人ヲシテ鐵道ノ株主タルコトヲ得セシメサラント欲セハ復タ議定書中ニ鐵道株ヲ得ルコトハ內國臣民ノ權利ト同フセストノ約定ヲ爲ササルヘカラス然レトモ此ニツノ例外ヲ舉クルハ互相ノ基礎ヲ傷リ體裁甚タ穩當ナラサルヲ以テ議定書中ニ此條ヲ揭セサレトモ更ニ再考ヲ要スヘキモノナリ

一

從來ノ條約ニ人民ニ阿片及ヒ兵器類ヲ輸入スルコトヲ禁制シタリ此新約ニモ之ヲ加ヘントスレハ議定書ニ載スヘキモノナリ

一、本條約ニ海關稅目等ヲ附セスシテ收稅權ヲ悉ク我ニ屬セシモノナレトモ他ノ各國條約一二ヲ覽ルニ五ニ輸入稅率ヲ條約ニ加ヘタルモノアリ千八百七十三年ノ獨逸伊太利通商條約ノ如シ獨逸ノ輸入品數二十二種ニシテ大抵製造セサル農產物ナリ其中免租九品アリ又伊太利ノ輸入品數九種ニシテ廉價ナル礦物ナリ獨逸壤地利ノ條約ニ附屬セル輸入稅率モ雙方共少數ノ農產物ノミナリ又千八百七十七年獨逸ト「ルマニヤ」ニテ結ヘル條約ニ附屬

本項ハ英國提出ノ議定書二項中ノ「節ニ對シタル青木子ヲ修正案ノ旨趣ヲ參酌シテ之ヲ揭ク

第六 現ニ外國貿易ノ爲メ開カレタル五港即チ橫濱、兵庫、長崎、函館、新潟ノ外日本國政府ニ於テ將來必用日、便利ト認メタルトキハ「年期ヲ約シ」漸次新クニ他ノ一二港埠ヲ開クヘキ事ヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

本項ハ甲現行條約廢止ニ伴ヒ開港場ノ名稱モ隨テ消滅スルニ由リ爾後之ヲ指示スルカ爲メニ特ニ之ヲ揭ク
右雙方ノ全權委員記名調印スルモノ也

寺島宗則附言

一本條約第二條二項ハ甲號第一條二項ニ依リタルモノナレトモ不動産所有ノ語アルヲ以テ之ヲ削リ更ニ三項ヲ加ヘタリ此三項ハ合衆國ト伊太利トノ條約ニ依ルモノナリ蓋シ合衆國ハ不動産所有ヲ禁スル場合アルヲ以テ此ノ如キ條約ヲ加ヘタルモノト見ユ尙ホ審考ヲ要ス

又此項中ニ「內國臣民ト同様ノ特典、自由及ヒ權利ヲ享有セシムル趣ヲ載セタリ然ルニ外國人ヲシテ我邦ノ鐵道株ヲ買ハシムレハ其富力我人民ヲ越ルヲ以テ配當利益ノ額外國ノ金額ヨリ多ケレハ之ヲ買フナルヘシ鐵道ハ生產繁

セル稅率ハ「ルマニヤ」ニ輸入スル稅目ノミアリテ獨逸ニ輸入スル稅目ナシ若シ本邦モ各國ト今般結フヘキ條約ニ稅目ヲ附添スルコトヲ約セハ何國ニ爲セル條約ニ從フヘキヤ且其他ノ國トノ條約ニ最惠國條款アリトセハ此ニモ同様ニ免ササルヘカラス故ニ稅目ヲ條約ニ附スルハ其點甚タ困難ナレハ注意セサルヘカラス

一、此條約案ハ法權及ヒ稅權ヲ全ク我ニ掌握スルノ案ニシテ會テ井上大隈青木諸大臣ノ案トハ大ニ相違スルヲ以テ是レヲ我國ニテ談判スルトモ決シテ成ラス外國ニ於テ開談スルハ公法學者其他有力ノ各人ニ我國ニ於テ其權ヲ握ルヘキ當然ノ理由ヲ了解セシメ更ニ機會ニ應シテ要路ニ說諭スルノ便宜アルヲ以テ內國ニ於テスルヨリ外國ニ於ケル間談ヲ大ニ優レリトス

明治二十五年四月十三日記

伯爵 寺島 宗則

條約案編成理由ノ說明

榎本外務大臣ヨリ昨年以來條約改正ノ成行並ニ頃日政府ニ於テ粗ホ決スル處アリトテ改正案ヲ示サレタリ。其方案ヲ覽ルニ前外務大臣カ執ル處ノ方案ニシテ單ニ諸定書中一

項ヲ修正シタルニ過キス且ツ榎本子カ提出シタル意見書中ニ於テモ青木子ノ立案ヲ決行スルヲ以テ得策トスルモノナリト斷言セルニ於テハ之ヲ新案ト見ルヘキニアラス只前條ヲ繼承シテ之ヲ今日ニ提出シタリト見ルモ可ナリ 然ルニ明治二十三年二月青木前大臣カ英公使ニ贈レル書牘中大隈前大臣ノ改正案ヲ排却シ更ニ修正案ヲ提出スルノ要領ヲ明言シテ曰ク「立憲制度ト治外法權トハ互ニ相牴牾シテ到底兩立シ得ヘキモノニアラスト云フ事ニ付キ閣下ノ注意ヲ喚起シ云々」又曰ク「現行日本ニ於テ行ハル、如キ治外法權ハ立憲主義ノ行ハル、邦國ニ於テ未タ嘗テ存セザリシモノニシテ而シテ如此相互ニ牴牾スルニ原案ハ到底久シク兩立シ能ハサルモノト斷言スルモ本大臣ハ敢テ事實ヲ誤ラサルモノト確信スルナリ」ト又曰ク「直接ニ日本ノ主權ヲ犯シ且ツ立憲主義ニ牴牾スルモノハ立法ニ關スル事項是レナリ」ト條約案ニ修正ヲ加ヘ對等ノ國權ヲ維持センコトヲ努ムルハ畢竟憲法施行上相牴牾スル處アルニ基クコトヲ宣言セリ其他日本ノ情勢ハ既ニ一變シ尙ホ現ニ變遷スルヲ以テ、現行約條ヲ改正スルノ止ムヘカラサルヲ陳フルモ。歸スル處ハ全ク憲法施行ニ伴フノ必用ニ仍ルノ外ナキナリ。故

ニ同年六月英國首相ノ同國公使ニ答フル處ニモ「日本政府カ今回ノ提議ヲ採用スルヲ正當ト認メタル處ノ理由ノ確實ナルコトニ關シテハ英國政府ハ更ニ疑ヲ容ル、コトヲ欲セサルナリ」ト明言セリ 此ノ如ク英國政府ノ如キモ日本ニ於ケル憲法施行ニ伴フ處ノ條約改正ヲ正當視シテ其要求ヲ容ル、ニ吝ナラサルノ情勢ハ窺フニ餘リアリ然ルニ尙ホ青木子ハ此正明確固ナル理由ノ存スルニ拘ハラス尙且ツ憲法發布前ノ案議ニ拘泥シテ其範圍ヲ脫却スルヲナサス五年ヲ期シテ裁判權ヲ取り稅權ノ如キハ別ニ確約スル處ナク單ニ稅率ノ修正ニ甘ンシテ之ヲ掌握スルノ手段ニ出テス僅カニ一段歩ヲ進ムルコトニ安ンシ治外法權ハ立憲主義ト兩立セサルヲ認メナカラ前例ヲ繼承スルニ泥ミシハ蓋止ムヲ得サルノ情勢ニ由ルヘキモ果シテ日本カ數十年間不利不幸ヲ忍ビタル羈束ヲ破毀スルノ道具即チ憲法ヲ汚辱スルノ嫌ナシトスルカ。青木子ヨリ英公使ニ送レル書牘中ニ云ヘリ「改正條約案ニ提議スルカ如キ期間内ニ、相互ニ共存スルコトアルモ到底無窮ニ兩立ヲ期スヘキモノニアラサルナリ」ト治外法權ト立憲主義ト兩立セサルコトヲ信スルモ短キ期間内ニ於テハ支障ナシトスルカ。萬一或ル事情ノ爲

メ期限ヲ遷延スルカ如キコトアラハ外國人ヲシテ日本ノ憲法ハ頒布前後ニ拘ラス尙ホ治外法權ヲ容ル、ノ餘地アリト謂ハシムルノ嫌ナキカ。是レ恰モ其非ヲ曉ルモ亦其非ヲ遂クルニ均シカラスヤ是ヲ以テ英國首相ハ云ヘリ「裁判管轄ニ關シテ外國人ニ特別ノ權利ヲ與フルハ遠カラス日本ニ於テ施行セラルヘキ憲法及代議制度ト矛盾スルヲ以テ之ヲ拒絕スルヲ必要ト爲シナカラ他ノ一方ニ於テハ外國人ヲ特種ノ束縛若シクハ制限ニ服從セシムルノ權利ヲ保存センコトヲ發議セラレタルハ全ク遺憾ナシト云フコトヲ得サルナリ」ト豈ニ條理アル言ニアラスヤ 畢竟我輩請スル條件ト其條述スル理由ト吻合セス立憲主義ト矛盾スルヲ以テ裁判權ノ施行ヲ拒ムニ拘ラス尙ホ若干年ヲ期シテ之ヲ約定スルニ於テハ彼ノ怪訝ヲ招キ種々ノ口實ヲ以テ其危險ヲ豫防センコトヲ主唱セシムルニ至ルハ免レサルノ情勢ナリ。然ルニ榎本子カ條約改正ニ關スル斷案ヲ案スルモ尙青木子ト同一ノ見解ヲ有スルモノ、如シ其斷案中ニ「抑モ現行條約ヲ改正スルコトハ從前ハ只一ノ希望タリシニ過キサリシモ、今日ハ變シテ爲サルヘカラサルノ必要トナレリ（中略）何ヲ以テ希望ノ二字變シテ必要ノ二字トナレリヤト謂フニ

他ナシ井上大隈二伯ノ改正案ハ我憲法實施前ニ係ルヲ以テ治外法權ノ存立スルヲ以テ猶忍フヘシト雖モ今日ハ憲法已ニ實施セラレ立法ノ權全ク兩議院ニ屬スルヲ以テ凡ソ內國百般ノ事件ニシテ苟クモ法律ノ範圍ニ屬スルモノハ唯我議院アルヲ知ルノミ外國アルヲ知ラサルナリ故ニ立憲政體ノ下ニハ治外法權ノ存スルヲ許サス此二者ハ實際相牴牾スル水火ノ如キヲ以テ、現行條約ハ到底數年ヲ出テスシテ我ヨリ廢棄ヲ各條約國ニ公言セサルヲ得サルニ至ルヘシ」ト。其旨趣同一ニシテ立憲制度ノ今日ニ於テハ現行條約ト並行スヘカラサルヲ知了明言スルニ拘ラス依然從前ノ案議ニ基キ矛盾ヲ改ムルコトヲ爲サス事ノ行ヒ難キニ託シ又ハ行懸ニ泥ミ事ノ毀レ易キヲ恐レ殆ント對等條約ノ域ニ隣セルモノトシテ青木子ノ立案ヲ決行スルヲ得策ナリト爲スニ至テハ條約改正ニ力ヲ盡サルモノト謂ハサランカ。本官謂ラク今日ニ於テ條約改正ノ方針ヲ斷スルヤ他ナシ曰ク立憲政體ノ下ニハ立法權ノ制限ヲ受クルヲ許サス 故ニ從前ノ方案ヲ改メテ完全ナル對等條約ヲ結フノ外斷シテ其他ノ方策ニヨルヘカラスト 然ルニ榎本子ノ斷案中ニ現行條約ヨリ一躍シテ完全無缺ノ對等條約ヲ結ヒ糸毫モ差違ア

ルヲ許サストハ到底言フヘクシテ行フヘカラサル事ニ屬スルハ苟クモ彼我ノ情勢ヲ詳ニスル者ノ能ク了知スル處ナリ」ト稱シテ、我ヨリ其企望ヲ棄テ其方策ヲ講セス依然舊時ノ情況ニ泥ミテ今日ノ新況ヲ察セス達シ得難キノ疑アルヲ以テ姑ク之ヲ措キ推讓其歩ヲ進ムニ若カサルヲ説ク。蓋シ其理ナキニアラスト雖モ立憲政下ニ治外法權ノ存スルヲ許サス兩者抵觸スル水火ノ如シト明言スルニモ拘ラス尙且ツ至難ナリト稱シテ之ヲ避ケ假令僅々數年ニ過キアルモ依然治外法權ヲ存スルヲ厭ハスト謂フニ至テハ矛盾モ亦甚タシカラスヤ。故ニ英國首相ノ如キモ一方ニハ我要求ノ憲法及代議制度ト矛盾スルヲ以テ治外法權ヲ拒絕スルヲ必要ト爲シナカラ一方ニハ尙ホ之ヲ保存センコトヲ主唱スルハ何事ソヤ。此時ニ方テ斷然從前ノ行懸ヲ問ハス憲法實治ノ下斷シテ治外法權ノ兩立スヘカラサル條理ヲ以テ各國政府ニ通告シ、法權稅權兩ナカラ領收セラルヘキ對等條約案ヲ提出シ一意專心其企望ヲ底徹スルニアラレハ止マサルヘシ。若シ夫レ一時ノ情況ヲ難シト立憲政治ノ行ハル、今日ニ於テ尙舊時ト同一ノ方策ヲ執リ今日半歩ヲ進ムルコトヲ甘ンセハ後日全歩ヲ占ムルノ支障ナシトセサルナリ。況

國ノ權利ヲ以テ取捨スルモノニシテ何ソ日本ノ定約稅率ト同視スヘキモノナランヤ本項ニ關シテ尙ホ追テ論スル處アラシ。且某國ノミト稅率ヲ約スルモ他國トノ條約中ニ無條件ノ最惠國條款アルトキハ別段ノ約束モ無益ナルヘシ依テ此稅率ヲ約スル件ハ各國ノ條約ヲ廣ク研究シテ後害ナキノ注意ヲナスヘシ

故ニ本官力提出セル條約案ハ從來歐洲各國間ニ締結セル條約ノ互相對等ノ基礎ニ據リシモノナレハ前日我各大臣ノ提出シタルト大ニ異ナルヲ以テ去一月二十五日松方榎本兩大臣ニ建議セルカ如ク從來ノ手續ヲ以テ本邦ニ於ル公使ト談判ヲ爲スハ無用ナレハ外國ニ至リ公法學者等ノ扶助ヲ得テ之ヲ爲スヲ優レリトセシ所以ナリ

明治二十五年四月十三日

附屬書二

條約改正案調査委員會文書 (二)

井上樞密顧問官提出 不動產所有殖民地人民賃

物ニ關スル質議 (第一書)

條約ノ成文ハ可及丈精確明瞭ニシテ後日ニ一點ノ疑惑ナ

榎本外務大臣時代 四〇一 附二

ンヤ榎本子ノ謂ヘル如ク內國百般ノ事件ニシテ苟クモ法律ニ屬スルモノハ唯我議院アルヲ知リ外國アルヲ知ラサルノ今日ニ於テ假令短キ時間ナリトモ法權稅權兩ナカラ其羈ヲ解クト能ハス依然內國アルヲ知ラスシテ尙外國アルヲ知ルノ條約ヲ締結シ以テ國家ノ體裁ヲ度外視セサルモノト謂フヘキカ。將タ日本ノ主權ヲ傷害セサルモノト謂フヘキカ。又多言ヲ要セサルナリ。

特ニ榎本子ノ案モ治外法權ノ撤去ヲ謂フモ關稅率ノ更改ニ及ハス依然大隈伯ノ條約案ニ附錄セルモノニ同シト言フノミ。惟フニ明治十九年井上伯ノ條約案ニ附帶セルモノト大同少異ナカランカ。曾テ榎本子カ伊藤伯青木子ト私談中ニ曰ク「世上ニ稅權恢復論者ノ多キハ畢竟現行稅率タル互相主義ニ基カサルヲ以テ後日之ヲ恢復スルト雖モ直ニ米國ノ如キ保護主義ヲ採ルハ不可ナリ宜シク歐洲各國ニ行ハル、普通稅率ニ基キ更ニ定約稅率ニ編制スルヲ要ス」ト論セルヲ見タリ。然レトモ關稅權ヲ領收セサレハ法權ヲ失フモノニ異ナラス毫モ彼此ノ差違アラシヤ。況ヤ歐洲各國ノ定約稅率ヲ見ルニ概ネ二三未製品ヲ交換スルニ止マリ全體ノ稅率ヲ規約スルモノト雖モ亦一國經濟上ノ本義ニ照ラシ獨立

ク彼我兩様ノ解釋ナキヲ期スルハ勿論ナルベシ故ニ小官先此條文中或ハ明確ヲ闕ク者ナキヤヲ指摘シテ提案者ノ致ヲ乞フ

第一 外人不動產所有ノ事ニ付仍疑義ヲ遺スモノ、如シ何トナレバ議定書ノ成文ハ消極的ニ不動產所有ノ權ヲ削除シタルニ止マリ其削除ノ理由ヲ説明書ニノミ明言シタルニ止マリ一モ之ヲ禁止シタルノ明文ナク其明文ナキハ條約ノ體裁ニ於テ然ルモノトスルモ條約附屬ノ議定書中ニ關テ從前居留地ノ爲ニハ所有ヲ許スノ積極的ノ正條アリテ而シテ居留地ハ一般規則ノ除外例タルコトヲ明示セズ故ニ推理法ニ依リ立論スルトキハ日本條約ハ既ニ不動產所有ノ事ヲ條約ニ明言シ又之ヲ許可シタルモノナリト云フコトヲ得ベキガ如シ

加之外人不動產所有ノ事ハ國法ノ定ムベキ所ナリトセンハ我民法ハ正文ヲ以テ之ヲ禁ゼザルノミナラズ論テ推理的ニハ之ヲ許可シタリ何トナレバ法例第四條ハ外人ニ對シ不動產處分ニ於ケル「處分ハ所有權ノ一ナリ」極點自由主義ヲ採用シタルバナリ且各國ニ於テ或國ハ外人ニ對シ

(甲) 外國人ハ法律ノ許可スル限私權ヲ享有ス(即チ法

律ノ明文ヲ以テ許可セザル限ハ私權ヲ享有セズ故ニ其享有ハ狭キナリ)

トノ主義ヲ取リ又或國ハ

(乙) 外國人ハ法律ニ於テ之ヲ禁ゼザル限ハ私權ヲ享有ス(其享有ハ廣キナリ)

トノ主義ヲ取リタリ而シテ我民法ハ實ニ此ノ乙ノ主義ニ從ヘリ
人事編
 第四條

故ニ法律ノ正文ヲ以テ禁止セザルモノハ許可ノ明文ナシト雖モ外國人ト同ク私權ヲ享有スルノ權利ヲ民法上ニ得タルモノナリ從テ不動産所有ノ權モ固ヨリ不可爭ノ享有者タリ

條約已ニ禁止ノ明文ナク却テ許可ノ端ヲ開キ民法ノ精神ハ寧ロ之ヲ許可シタルモノヲ禁止シタルモノニハ非ラズ而シテ僅々説明書仍將來ニ幾何ノ効力ヲ有スベキヤ? 此レ疑問ナリ

此疑問ヲ未來ニ豫防スル爲ニハ第一法例ヲ改正シ、第二議定書第一條第二項ノ終ニ左ノ末文ヲ加フベ
 但本項ノ適用ハ從前ノ居留地内ニ限ル

第二條約第十五條ニ付一ノ疑問アリ本條ニ列舉シタル殖

抑モ條約ヲ解釋スルノ通則ハ條約ニ因リ許與スルモノハ外ハ讓與セザルモノナリト云ハザルヲ得ズ議定書第二條第三項ノ明文ヲ觀ルニ開國ノ後チ土地ニ關スル外國人ノ權利ハ住居旅行ノ權、竝ニ住居及ビ商業ノ爲メ土地ヲ借用スルコトヲ得ルニ止マリテ他ニ我ヨリ讓與スル所ノモノナシ然ルニ此條約ヲ指シテ「不動産所有ノ事ヲ條約ニ明言シ又之ヲ許可シタルモノナリ」ト云フガ如キハ蓋シ議定書ノ明文ヲ誤解スルモノナリト云ハザルヲ得ズ然ルニ我民法人事編第四條ニ規定シテ曰「外國人ハ法律又ハ條約ニ禁止アルモノハ私權ヲ享有ス」トアリ故ニ本邦ニ於テ外國人土地所有ノ權ニ關シテハ條約ニ因リ土地ヲ所有スルコトヲ得ルモノナリ是故ニ之ヲ禁ゼント欲セバ特ニ法律ヲ發布セザルベカラザルナリ

又議定書第一條第二項ノ終ニ「本項ノ適用ハ從前ノ居留地内ニ限ル」トノ但書ヲ加ヘタシトノ注意アリ然ルニ該項ハ全然現在ノ居留地處分ニ關スル約定ニシテ更ニ該項ノ趣旨ヲ明白ニスルモノニ非ザルナリ。

一 第二問 條約第十五條ニ關スル疑問ニシテ殖民地ノ人民及生産貨物ハ各條ニ掲ゲタル英國臣民貨物ノ中ニ包含

民地ニ對シテ條約外ノ處分ヲ行フベキモノトスレバ從テ此殖民地ノ人民及生産貨物ハ各條ニ掲ゲタル英國臣民及貨物ノ中ニ包含セザルヤ?

若包含セズトナラバ第五條ノ場合ニ於テ英人ノ輸入タルニ拘ハラズ、英産ニ非ザル貨物トシテ條約外ニ普通關稅ヲ課スベキノ結果ヲ生ズベキヤ?

二十五年四月二十一日

井 上 毅

附屬書三

條約改正案調査委員會文書 (三)

井上樞密顧問官提出第一書ニ對スル榎本外務大臣意見

一 第一問ハ外人不動産所有ノ事ニ關シテハ議定書ノ成文ヨリ消極的ニ不動産所有ノ權ヲ削除シタルニ止リ又一方ニ於テハ從前居留地ノ爲メニハ所有ヲ許スノ積極的ノ正條アルヲ以テ推理法ニ由リ立論スルトキハ日本條約既ニ不動産所有ノ事ヲ條約ニ明言シ又之ヲ許可シタルモノナリト云フコトヲ得ベキカト云フニアリ

スルヤ否ニアリ

從來英國ガ外國ト締結シタル條約ヲ觀ルニ千八百八十年前ニ在テハ殖民地ヲ包含スルコトヲ約定シタルモノアリ然ルニ同年後ニ至リテハ今般呈出ノ條約案ニ列記スル各殖民地ヲ舉ケ之レニ條約ヲ適用スヘカラザルコトヲ約束スルヲ以テ通例トセリ此條約ヲ適用セサル以上ハ各條ニ掲ケタル英國臣民及貨物ノ中ニ殖民地ノ人民及生産貨物ヲ包含セザルヤ一言ヲ贅セザルモ明カナルベシ故ニ若シ該殖民地ニシテ此條約ニ依遵セザル地ヨリ輸入スル貨物ニ對シテハ何人カ之ヲ輸入スルモ普通關稅ヲ課スヘキモノナリ

附屬書四

條約改正案調査委員會文書 (四)

井上樞密顧問官提出條約廢棄ニ對スル意見 (第二書)

現在條約廢棄ノ一説ハ内閣ノ執ラサル所タルニ拘ラス民間ニ於テ頗ル勢力ヲ有スルカ如シ故ニ小官ハ別紙一小文ヲ草シテ閣下ノ高覽ニ供シ且閣下高慮ノ取捨ニ任セ委員諸君ノ傳覽ヲ得ルノ幸ヲ冀望ス。終ニ更ニ一言ス小官ハ固ヨリ改正事業ニ於テ現條約ノ成文ニ示シタル委員協議ノ要件ヲ履行シタルノ後ハ正理公法ニ依リ條約廢棄ノ手段ヲ取ルノ必

要ヲ斷行スルノ決心ナカルヘカラサルコトヲ認メサルニ非
ス但シ條約上正文ノ業務ヲ履行セスシテ此非常手段ヲ執ル
ノ說ハ獨リ得策タラサルノミナラス又法理ニ於テ正當ナラ
サルコトヲ論スル者ナリ 頓首

二十五年四月二十二日

井 上 毅

委員長 外務大臣 殿

公法學者ノ大抵一般ニ是認スル如ク條約ハ永久ノ性質ヲ有
セス他國ト結ビタル條約ニシテ其ノ締結ノ時ノ事態已ニ變
遷シタルノ後ニ於テハ其ノ條約ノ廢棄ヲ宣告スルノ權利ア
ルハ疑ヲ容レサルノ法理ナルヘシ 然シナカラ此權利ハ條
約ノ外ニ於テ國家自主ノ權ニ基ケル法性ヨリ來ル者ナリ
吾人ハ條約ノ期限及改正ニ付明文アル限ハ條約各國ハ其ノ
明文ニ遵守スル義務ヲ負ハサルヘカラサルコトヲ忘却スヘ
カラス而シテ此義務ハ性法論理ノ上ニ位置スル者ナリ

現行條約ニハ正文ノ在ルアリテ條約國双方ハ此ノ正文ノ
指示スル所ヲ履行スルノ義務アリ而シテ此ノ義務ハ疑ナク
双方ノ自由ニ主張スル性法ノ上ニ位置スルナリ即チ現行條

無効ヲ宣言スヘカラサルハ是レ我カ各國ニ於ケル條約ノ性
質ナリ

故ニ條約廢棄說ハ双方委員ノ協議調ハサルノ後ト云ヘル
緒言ニ從屬スルトキハ至當ノ論ナルヘシ即チ條約ノ正文ニ
對シ負フヘキ義務ヲ脫離シタレハナリ而シテ性法的ノ論理
正當ニ應用セラルレハナリ 然ルニ若シ今日ノ現況ノ儘ニ
テ或ハ一應改正ノ要求ヲ爲シタルノミニテ委員ノ協議ナシ
ニ直チニ數年ヲ期シテ無効ヲ宣告スヘシトノ說ナラハ是レ
仍條約ノ正文ヲ履行スルニ不足ノ點アルヲ免レス。故ニ實
際ニ於テ危險重大ナルノミナラス又法理ニ於テモ其ノ正當
ヲ認ムヘカラサルナリ

附屬書五

條約改正案調査委員會文書 (五)

井上樞密顧問官提出 不動産所有禁止ニ關スル件

(第三書)

法例第四條ニ國際私法ヲ規定シテ動產不動産共ニ所在地法
律ニ依ラシメタルハ即チ英米ト同ク管地法ノ主義ニ從ヘル
モノニシテ國ノ主權ヲ重シ且國ノ富資ハ國ノ政策ニ關係ス

約ニハ左ノ三要件ノ規定アリ

第一 締約双方トモ明治五年ニ至リ改正ヲ申込ムノ權
利アルコト

第二 一ヶ年前ニ改正ヲ豫言スルコト

第三 双方ノ協議ヲ要スルコト

但條文ニハ双方ノ協議調ハサルトキハ如何トノ意義ヲ顯サ
サル爲ニ此ノ場合ニ於テハ始メテ一般ノ性法即チ立法ノ自
由權ニ基キ條約廢棄ヲ宣言スルノ條約外ノ權利ヲ生スヘシ
故ニ安政五年後ニ於テ(イ)一年前ニ改正ヲ申込ムコト
(ロ) 双方委員ヲ命ジ協議シテ(ハ) 協議調ハサルノ結果
明白トナリ委員ハ改正協議調ハザルコトヲ其委任者ニ報告
シタル上(ニ)ニ非ザレバ双方ノ政府ハ仍現條約無効ナリ
ト宣言ヲ爲スノ權利ヲ有セス 縱令數年後ヲ期シテ無効ナ
リト宣言スルモ亦同ク其ノ權利ヲ有セス其ノ權利ヲ有セサ
ルノミナラス亦條約ノ正文ニ違背スルノ責ヲ對約國ニ負フ
ヘシ

蓋シ條約ノ正文アル者ニ對シテハ決シテ條約外ノ法理上
ノ解釋ヲ爲スヘカラズ故ニ條約ノ正文ニ依リ双方改正協議
ノ手續ヲ經過シタルノ後ニ非サレハ決シテ一方ヨリ條約ノ

ルノ必要ヲ認メ危害ヲ防制スルノ主意ニ出タルナリ

然ルニ次項ニ於テ俄ニ「相續ハ其人ノ本國法ニ從フ」コ
トヲ規定シタルハ是レ同一財産ノ處分ニ就テ一定ノ主義ヲ
誤リタリ 抑モ相續ハ財産處分ノ一今動產不動産俱ニ所在
地ニ依ラシムコトヲ明定シテ而シテ相續ノ場合ニ限り管人
法ヲ取ルハ全ク其理由ヲ失フ者ナリ各國ニ於テ動產ノ相
續ニ限リ外國法ヲ認ムルハ全ク好誼ノ處分ニ出、死者ノ家
屬ヲ保護スル者ナリト雖動產不動産ノ相續俱ニ被相續者ノ
本國法即外國法ニ從フハ近來伊太利學派ノ新說ニ過キスシ
テ之ヲ實施シタルハ獨リ伊太利法律及白耳義法草案ノミ今
左ニ之ヲ圖解シテ其系統ヲ示サン

(甲) 英 米

動 所在地法ニ從フ 動ハ本國法ニ從フ
不動 所在地法ニ從フ 不動ハ所在地法ニ從フ

(乙) 佛荷及其他各國此法尤多シ
動 本國法ニ從フ 相續場合 同上
不動 所在地法ニ從フ 相續場合 同上

(丙) 伊及白草案
動 本國法ニ從フ 相續場合 (俱ニ本國法ニ從フ)
不動 所在地法ニ從フ

(丁) 日 本

動) 所在地法ニ從フ(相續場合俱ニ本國法ニ從フ)
 爰ニ尤條約改正ニ關係シテ注意ヲ要スヘキハ左ノ點ニ在
 リ民法第三十條ハ所有權ノ義ヲ解釋シテ曰ク所有權トハ自
 由ニ物ノ使用收益及處分ヲ爲ス權利ヲ謂フト此レニ據レハ
 處分ハ即所有權ノ一部ニシテ處分ノ權アル者ハ即所有權アル
 コトヲ證明スルニ充分ナリ而シテ相續遺贈ハ處分ノ最
 大ナル事實ニ非ズシテ何ゾヤ 法例第四條ハ内外人ノ關係
 即國際私法ヲ規定シタル各條ヲ一ニシテ而シテ正ニ外人ノ
 不動產處分ノ權ヲ認メタリ既ニ處分ノ權ヲ認メナカラ仍ホ
 不動產所有ノ權ハ之ヲ許サスト謂ハ、稍法理ヲ知ル者ノ一
 笑ニ當ルニ足ランノミ而シテ辯護者或ハ直接ニ所有權ヲ許
 サスト云ハハ是レ民法第三十條ヲ讀マサルナリ

四月廿三日

附屬書六

條約改正案調査委員會文書 (六)

井上樞密顧問官提出第三書ニ對スル榎本外務

大臣ノ意見

二 不動產ノ相續ニ關シ現ニ歐米數多ノ國ニ行ハル、法律
 ハ其不動產所在地ノ國ノ法ヲ適用スルモノナリト雖モ相
 續法ニ關シ近世歐洲法學大家ノ說ク所ニ依レバ被相續者
 ノ本國法ヲ適用スルヲ正當ト認メタリ 簡單ニ其理由ト
 スル所ヲ舉クレハ相續ハ被相續者一人ノ關係ニアラス其
 親族ニ關係スルヲ以テ若シ其本國法ト異ナリタル外國法
 ヲ適用スルトキハ親族一般ニ對シ不當ノ損害ヲ蒙ラシム
 ルモノ多クレバナリ是レ決シテ伊太利學派ノ所說トハ斷
 言シ能ハサルナリ

三 一概ニ相續遺贈ヲ指シテ處分ノ最大事實ナリトハ云ヒ
 難カルベシ遺贈ハ人爲ノ財產處分法ナルモ相續ハ法律
 ノ作用ニ因リ實行セラルルモノナシトセス 假令ハ英國
 ノ如キ不動產ノ所有主死スルトキハ法律ノ作用ニ因リ嫡
 男之ヲ相續スルヲ以テ法トセリ 然ルニ相續及遺贈ハ財
 產處分ノ權ナルニ因リ法例第四條ハ我邦ニ於テ外人ノ不
 動產處分ヲ認メタルモノナリトハ看破シ難シ 本條ハ前
 項ニ於テ説明シタルカ如ク國際私法ノ原則ヲ言明シタル
 法ナルニ因リ重ニ外國ニアル土地財產ニ關シ訴訟アリタ
 ル場合ヲ豫期シテ規定シタルモノナレバ假令ヒ我國ニ於

一 法例第四條ハ國際私法ノ原則ヲ言明シタル法ニシテ必
 スシモ外國人カ本邦ニ於テ所有スル土地ニ適用スル目的
 ヲ以テ制定シタルモノニ非ス今日ノ如ク各國間ノ交通頻
 繁ナル時ニ際シテハ外國人ニシテ外國ニアル不動產不
 動產ニ付我裁判所ニ訴出テ其判決ヲ乞フモノアルニ至ルヤ明
 カナル事實ナリトス 斯ノ如キ場合アルニ當リ日本裁判
 所ハ之ニ如何ナル法ヲ適用シ公正ノ判決ヲ爲スヲ得ル
 ヤ 若シ英國人ノ所有ニ係ル財產ニシテ英國ナリ佛國ナ
 リ外國ニ在ル者ニ對シ出訴シタルトキ日本裁判所ニ於テ
 日本ノ法律ヲ適用シ裁判ヲ下スニ於テハ必ス訴訟人ニ對
 シ不測ノ損害ヲ與フルコトナシトハ云フヘカラス故ニ國
 際私法ニ於テ不動產不不動產所在地ノ法律ヲ適用スルヲ以テ
 正當ト認メタル所以ナリ如何トナレハ英國ナリ米國ナリ
 佛國ナリ某國ニ於テ土地ヲ所有スル者ハ其國ノ法律ニ因
 リ其權利ノ保護ヲ受クベキモノト推定セサルヲ得サレハ
 ナリ 法例第四條ノ如キ此原則ニ因リタルモノニシテ他
 ニ理由アルニアラス 由是觀之井上氏ノ所謂國ノ主權ヲ
 重ニスル云々ノ主意タリト云フカ如キハ了解シ易カラサ
 ルノ理由ナリトス

附屬書七

條約改正案調査委員會文書 (七)

井上樞密顧問官提出 不動產所有禁止ニ關スル

方法調査案 (第四書)

去ル廿一日並一昨廿三日奉書致候不動產所有ヲ禁スルノ
 件ニ付各國ノ條約文例取調ヘ候處英伊千八百六十三年ノ條
 約(此時英ハ未タ不動產所有ヲ外國人ニ許サス)十六條ニ
 云

締盟兩國ノ臣民ハ兩國及其版圖内ニ於テ國法カ凡テノ外
 國人ニ許ス所ノ各種財產ヲ護有シ占有シ處分スル爲ニ充
 分ナル自由ヲ有スヘシ

又露伊千八百六十三年ノ條約ニ

締盟兩國ノ臣民ハ兩國及其版圖内ニ於テ國法カ凡テノ外
 國人ニ許ス所ノ各種財產ヲ護有シ占有シ讓與スル爲ニ充

分ナル自由ヲ有スヘシ

今我條約ニ於テ外人ニ不動産所有ヲ禁止シ及其禁止ヲシテ效力ヲラシメントナラハ左ノ三ツノ方法ノ内ノ一ヲ取ラサルヘカラス

甲、即チ前ニ掲ケタル文例ニ倣ヒ條約ヲ以テ國法ニ讓ルノ明文ヲ掲ル事

此方法ニ依ルトキハ國法ノ明言ヲ以テ禁令ヲ示スノ必要ヲ生ス然ルニ我カ國ノ民法ハ此禁令ヲ示ササルノミナラス却テ自由所有ノ款條ヲ掲ケタリ 是ノ難事ナリ 第一回第三回書ニ具フ

乙、條約ニ禁止ノ明文ヲ掲ク

今其文ヲ試草スルニ

兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ國又ハ版圖内ニ於テ去種財産ノ所得占有及處分ニ關シ内國ノ法律ニ從ヒ充分ナル自由ヲ有シ且内國臣民ト同一ノ租稅若ハ賦課金ニ服從スヘシ但不動産ハ除外ナリ(但國法カ凡テノ外國人ニ禁スル所ノ者ヲ除外スル尤好)

此禁止ノ明文ヲ要スル所以ハ他ニ非ス即チ民法人事編第四條ハ

禁止ノ明文ナキ限ハ總テ自由ナリ

右三ツノ方法ノ中ノ一ヲ擇ハルルハ委員會ノ議決ヲ要スル事ナラン嶼前書ノ不備ヲ補フ爲メニ 謹言頓首

四 二十五日

井 上 毅

榎本外務大臣閣下

附屬書八

條約改正案調査委員會文書(八)

寺島伯條約改正案第一條乃至第三條及ヒ議定書

ニ關スル「デニソン」氏ノ意見

第一條乃至第三條ハ國民全體ノ特權免除ヲ主トセス專ラ個人各自ノ特權免除ニ關スルモノニシテ其趣旨及ヒ文體ハ不動産所有權ノ一項ヲ除キ大隈伯條約案第一條第二條及ヒ千八百八十九年ノ英國提議ト異同アルナシ 唯タ其條項ノ配置ニ於テ聊カ異ナル所アルノミ 而シテ更ニ溯テ千八百八十七年ノ提案ヲ視ルニ右第一條乃至三條ノ諸約款ハ司法制度ニ關スル事項ヲ除キ總テ同年四月二日日本委員ヨリ條約改正會議ニ提出セシ通商航海條約案ニ掲載スル所ニシテ同年七月十二日商專調査委員ヨリ該會議ニ報告セシ修正案ニ

トノ意義ヲ表明シタレハナリ故ニ民法ヲ改正セス現在ノ儘ニシテ又條約ニハ不動産ノ事ヲ默過シ間接ニ其所有ヲ與ヘサルノ意味ナリトシテ解釋ヲ下サンモ將來此解釋ハ必民法ヲ根據トシテ立論スル者ノ爲ニ容易ニ打破セラルルニ至ラン 好シ打破セラルルニ至ラストモ多少ノ困難ヲ惹起シ後人ヲシテ立約者ノ不注意ヲ指摘セシムルニ至ラン

要スルニ條約ノ默過ハ即チ民法ニ讓リ禁止スルニ非スシテ却テ民法ニ讓リ許與スルノ結果ヲ生スヘシ(但民法ヲ改正スレハ別段ナリ)

丙、外人不動産所有ヲ禁スルノ特別法ヲ設ク
此レ亦一法ナリ但シ此事ニ付單行法律ヲ公布スルコト體裁ハ甚タマツシ

都兒其ニテ外人不動産法ヲ公布シタルトキハ半ハ之ヲ禁スルノ複雜ナル規定ナレハナリ

若此方法ヲ取ルトキハ又前ニ掲ケタル英伊及露伊ノ條約ノ文例ニ依ラサルヘカラス且議定書ノ居留地置分ノ項ニ於テ一般規則ノ除外例ナル事ヲ明示セサルヘカラス

此方法ニ從フモ法例第四條ハ必ス改正セサルヘカラス何トナレハ特別法ト相盾矛スレハナリ

モ亦同シク右ノ諸約款ヲ轉載シタリ尤モ司法制度ニ關スル事項ハ別ニ裁判權條約ヲ以テ規定スルノ計畫ナリシニ依リ之ヲ通商條約ニ掲ルノ必要ナカリキ

千八百八十七年ノ提案ハ現今通商條約ノ模範ト認メラル、千八百八十三年ノ英伊條約ヲ採酌セシ所頗ル多シ而シテ近世ニ於ケル完全整備ノ通商條約ニハ前編第一條乃至第三條ニ列舉スル如キ諸約款ヲ掲ケルヲ以テ常例トス

是ニ依テ之ヲ觀レハ寺島伯提議ノ公明寛大ナルハ更ニ疑ヲ容レサル所ナリ然レトモ現時特異ノ情況ニ於テ果シテ宜ニ適スルヤ否ヤノ點ニ關シテハ聊カ疑ナキヲ得サルナリ

現今日本ト條約關係ヲ有スル諸國ニ於テ

天皇陛下ノ臣民カ寺島伯提案第一條乃至第三條ニ列舉セル特權免除ヲ享有スルハ固ヨリ國際上ノ好誼ニ基クト雖モ現ニ之ヲ享有スルノ程度ノ確實且完全ナルハ恰モ現行條約ニ之ヲ規定スルノ明文アルト異ナルコトナシ

故ニ右第一條乃至第三條ノ約款ハ日本臣民カ諸外國ニ於テ享有スル利益ヲ増進スルコトナク唯日本ニ於ケル外國人ノ權利ヲ伸張スルニ止マリ其他現時ノ事體ニ何等ノ變更ヲ加フルコトナシ 實際日本カ得ル所ハ外國ニ在テ其臣民カ既

ニ國際上ノ好誼ニ因テ享有スル特權ヲ條約ヲ以テ確定スルノ一事アルノミ 此ノ如キ結果ハ感情ノ點ヨリ觀察スルトキハ或ハ満足ヲ與フルナルヘシト雖モ其實益上ノ價值ハ頗ル僅少ナリト云フヘシ

然レトモ片時モ忘却ス可カラサル一事アリ即チ諸條約國ハ其現有ノ利益ヲ拋棄スルノ條件トシテ前顯三箇條ニ列舉セル諸事項ニ對シ或ル保證ヲ新條約ニ掲ケラレンコトヲ要求スルハ必定ナリ 依テ日本ハ諸條約國ノ穩當ナル要請ト牴牾スル所ナキ限りハ可成約款ヲ以テ規定スル事項ノ範圍ヲ狹少ナラシムルコトヲ勉メサル可カラス

或ハ將來ニ至テ內國ノ法律即チ單ニ內國ノ立法機關ノミニテ改廢シ得ヘキ法律ヲ以テ外國人ニ如何ナル特典ヲ與フルコトヲ便益ト認ムルコトアルニモセヨ現時ニ在テハ日本ハ新條約ヲ締結スルニ必要缺クヘカラルモノ、外ハ國際條約即チ條約ヲ以テスルニ非レハ改訂スルコト能ハサル條約上ノ規定ノ羈束ヲ受ケサルコトヲ注意セサル可カラス 寺島伯提案ノ全體ヲ其儘採用スルモ更ニ危險ノ生スルコトナキハ余カ固ク信シテ疑ハサル所ナリ 日本ニ於ケル外國人競争ノ恐れ、ニ足ラサルハ既往三十年ノ日本外交史ニ徵

國ノ紳商數名ヲ見受クルカ若シ余輩ニシテ彼ノ所謂事實權ト稱スルカ如キ商利ノ壟斷ヲ行ヒタリトセハ余輩ハ今尙ホ此地ニ滞留スル筈ナシ是レ斯ル妄説ノ採ルニ足ラサル確證ナリ云々

然ルニ外國商人ハ内地雜居ニ反對セリ何トナレハ此事ハ其利益ヲ増進スルノ道ニ非スト思惟スレハナリ

若シ日本人ハ外國人ノ資本及ヒ企業ト韻頑スル能ハスト云ハハ試ニ帝國今日ノ紡績業ヲ見ヨ 全ク日本人ノ手ニ在リテ年一年ヨリ隆盛ニ赴キ今ハ其產出高輸入綿糸ノ一倍餘ニ及ヒタルニ非スヤ現時日本人ノ手ヲ以テ運轉スル三十五萬本ノ紡錘ハ毎週一本ノ綿糸繰出高三封度四分ノ三ニ對シ印度ニ於テハ毎週一本ノ繰出高ニ封度三分ノ二ニ及ヒ「ヲルダーム」(英國)ニ於テハ僅カ一封度半ニ非スヤ 若シ日本人ノ工業ハ外國人ト競争セハ全敗スルニ至ル可シト云フナレハ何ゾ右ノ紡績業ヲ外國人居留地ニ於テ起サ、ルヤ現ニ諸開港間ノ沿岸貿易ハ悉ク日本船舶ノ營業ニ屬スルニ非スヤ何ヲ以テ日本人ハ其貿易ヲ維持スル能ハスト云フヤ若シ外國商人ハ銀行ニ又商業上ノ組織ニ於テ著シキ便益ヲ有ストイハ、何故ニ日本商人ノ手ニアル帝國ノ外國貿易ハ

シテ明確ナルノミナラス現ニ外國貿易ニ從事スル日本商人ノ資力カ外國商人ノ資力ニ比シ頗ル鞏固ナル事實ニ就テ見ルモ斯ル競争ノ虞ナキヲ悟ルニ足ルヘシ 日本商人ニシテ外國貿易ニ從事シタルカ爲メ豪富ヲ占メタルモノハ其數決シテ僅少ナラス 之ニ反シテ外商ハ一人ニテモ斯ル豪富ノ位地ニ達シタルモノヲシ 二三ノ外商カ相應ノ資産ヲ得テ聊カ餘裕アルコトハ事實ナリト雖モ日本ノ外國貿易ヨリ生スル利潤ノ要部ハ日本商人ノ掌中ニ歸スル所ナリ 此點ニ關シテハ橫濱ニ在留スル有力ノ一英國商「モルリゾン」氏カ去月十四日商業會議所ノ總會ニ於テ爲シタル演説ヲ引證スヘシ 同氏ハ貿易上ノ情況カ外商ニ取リテ不満足ナル理由ヲ述ヘタル後更ニ語ヲ曰ク

終ニ臨ミ余ハ一言セサルヲ得サル事アリ 即チ條約改正ノ事ニ關シ或ル新聞紙上ニ論スル所ヲ見ルニ日本ニ於ケル一派少數ノ外商カ内地雜居ヲ拒ムハ主トシテ彼輩カ各開港場ニ於テ享有セル事實權ノ妨害ヲ蒙リ或ハ全ク絶滅ニ歸センコトヲ憂慮スルカ故ナリト云ヘリ 惜テ事實權トハ何事ゾ余輩ハ之ニ依テ幾分カ利スル所アリシ歟此席ニハ既ニ二十年或ハ二十五年餘モ日本ニ在留セラル、各

千八百八十二年ニハ八分千八百八十六年ニハ一割ナリシカ千八百九十一年ニハ一割六分ニ達セシヤ

高島炭坑ハ之ニ關係セシ外國人ヲシテ殆ント破産セシメタルニ其日本人ノ手ニ歸スルニ及ンテ始メテ利益アル業トナリタルニ非スヤ若シ日本ノ營業法及ヒ企業カ外國ニ比シテ遙カニ劣ルトセハ何ヲ以テ如此クナルヲ得ンヤ

右ニ掲ケタル數箇ノ疑問ニ對スル答ハ明白ナリ所謂危險ト稱スルハ想像ニ過キサルナリ 外國人ハ工業、製造、採鑛、農業若クハ内地貿易ノ孰レニ於テモ日本人ト日本ニ於テ競争センコトハ到底望ム可カラサルナリ 此等ノ事業中或ハ日本人ト協同經營シテ利益アルモノモアルヘシト雖モ日本語ヲ學ブノ困難及ヒ其他種々ノ事情アルニ依リ競争ハ頗ル至難ノ業ナリトス 一旦内地ヲ開放スルノ曉ニ於テモ外國資本ノ國內ニ充溢スルニ至ラサルノミナラス帝國政府ハ反テ之ヲ誘引センカ爲メニ全國開放ヨリモ猶一層價值アル擔保ヲ與フルノ必要ヲ見ルニ至ルヘシ 今ヨリ三十年以前ニ在テ其頃ノ大家ト稱セラレタル人々ハ日本ハ西洋諸國ト條約ヲ締結セシタメ其運命盡キタルナリト確信シテ之ヲ豫言セリ

然ルニ日本現國ノ有様ヲ見ルトキハ此豫言ノ正確ナラサリシコトヲ知ルヘシ 一方ニテハ西洋各種ノ新發明品機械等ヲ適用シタル結果ニ依リ日本ニ於テ有形的ノ事物頗ル進歩セシト同時ニ日本ノ美術家工業家ノ製作品並ニ其農産物礦物等ヲ充分需要スル新市場ノ起リシヲ見ルニ於テモ日本國ハ現今ノ如ク甚タ不利益ナル狀態ノ下ニ國ノ一部ヲ開キタルニモ拘ハラス無量ノ利益ヲ得タルコトヲ充分證スルニ足レリ

天皇陛下ノ忠誠愛國ナル臣民中ニハ現時ニ於テモ其祖先ノ如ク内地開放ハ帝國ニ不利ナリ否危險ナリトマデ確信スル者アルハ疑ヲ容レサル所ナリ

未來ヲ斷スルニハ之ヲ過去ニ徵スルヨリ宜シキハナシ 日本ハ外國人ニ與フルニ日本人ニ優ルノ便益ヲ以テシ納税ノ義務及ヒ國法ノ遵奉ヲ免セシムル一種ノ制度ノ下ニアリナカラ既ニ過クル三十年間ニ於ケルカ如キ繁榮ヲ來センコトナレハ日本カ一層寛大公平ナル條約ヲ結ヒ舊來ノ偏狹ナル制限ヲ脱却スルニ至ラハ其進歩ハ猶ホ一層神速ナル可ク又日本ノ萬國ニ對スル位置モ一層確然タルニ至ルヘキヤ論ヲ待タサルナリ

カ或ハ又タ法律上適當ト認ムル條件及ヒ制限ヲ附シテ其特權ヲ附與スルカ帝國政府ハ隨意ニ處置ヲ施シ得ルノ自由ヲ有スルナリ

又寺島伯ノ提案ニハ強制兵役、免役税、強募公債及軍事上ノ賦斂等ニ關シ外國人ニ對シテハ互惠主義ニ據テ全ク之ヲ免除スルノ規定アリ 榎本子ノ案ニ依レハ外國人ハ此點ニ關シテハ最惠國ノ人民及ヒ内國人ト同等ノ待遇ヲ受クルナリ

日本ノ諸條約ハ孰レモ皆同一ノ方案ヲ以テ改正スヘキモノナレハ若シ榎本子ノ提案ニシテ終ニ採用サル、ニ至ラハ右兵役等ノ事ニ關シテハ何等ノ規定ヲ設クルコトナキヲ以テ日本ニ對シ最惠國條款ヲ適用セントスルモ其據ルトコロヲ見出ス能ハサル可シ 故ニ日本ニアル外國人ハ新條約ノ下ニ於テハ(國法ヲ以テ許與スル特典ハ格別トシ)兵役及ヒ軍事上ノ賦斂ニ就キ唯タ内國人ト同様ノ免除ヲ受クルニ止マルヘシ 之ニ反シ外國ニアル日本臣民ハ概シテ此種ノ義務ヲ免カル、ヲ得ルナリ何トナレハ各條約國ハ殆ント皆各自ノ條約ニ該件ニ關スル規定ヲ設ケタルカ故最惠國條款ニ基キテ直ニ之ヲ日本ニモ適用シ得ルヲ以テナリ

此等ノ理由アルヲ以テ日本ハ寺島伯ノ提案ヲ採用スルモ決シテ恐ル、所ナカルヘシ 然レトモ右提案ハ諸條約國ノ要求セサルコトマデモ明記詳述セリ 余ハ再び言ハント欲ス實際ノ必要ニ應スルノ外他ニ條約上ノ羈束ヲ受クルハ日本ノ爲メニ取ラサル所ナリ 榎本子改正案ノ一部ヲナス議定書ノ第二條ニ於テハ寺島伯提案ノ第一條乃至第三條ニ掲クル事項ヲ盡ク規定セリ而シテ右第二條ノ同伯ノ提案ニ優ル所ハ其約款ノ廣濶ナルニ在リ 榎本氏ノ提案ハ寺島伯ノ案ニ比スレハ數個ノ點ニ於テ其意義ノ狹隘ナル所アリ而シテ他ノ點ニ於テハ兩案ノ間ニ判然タル差異ヲ顯セリ 今日本現時ノ狀態ニ就キテ觀察スルトキハ其差異アル所コソ榎本氏提案ノ因テ以テ優レリトスル所ナリ

例ヘハ寺島伯ハ日本ニ於ケル外國人ノ工業及ヒ製造ヲ内國人ト同等ノ地位ニ置カントノ考察ナレトモ榎本氏ノ提案ハ之ニ反シテ此點ニ關シテハ更ニ規定スル所ナシ 故ヲ以テ今寺島伯ノ考察ニ從ヘハ外國人ハ工業及ヒ製造ノコトニ就キ内國人ト同等ノ權利ヲ有スルニ至ルヘシ 然レトモ榎本子ノ考察ニ從ヘハ此事ニ關シ日本ハ自由ノ處置ヲ行ヒ得ルノ餘裕アリ即チ時勢ノ變遷ニ從ツテ此特權ヲ全然拒絕スル

榎本子ノ考察ヲ採用スヘキ理由ハ既ニ斯ク述ヘ來リタルヲ以テ其採否如何ヲ決スルニ充分ナルヘシ而シテ猶ホ其他ニ確乎タル理由アリテ此提案ノ基礎ニ變更ヲ加フ可カラサルモノアリ 千八百八十六年以來日本カ條約改正ノ事ニ關シ採用シタル手段ヲ見ルニ日本ハ萬國ニ對シテ其地位ヲ高尙鞏固ナラシムルコトヲナサ、ルノミナラス、却テ自ラ立案シ自ラ提出シタル者ヲ再三撤回シタルヲ以テ日本國ハ一定ノ見識ナク且ツ誠意熱心ヲ缺ケリトノ評ヲ受クルニ至レリ 是ノ故ニ今後設令ヘ好機會ノ生スルコトアルモ此ノ久シキニ亘ル難問題ヲ迅速且ツ満足ニ結了スルノ途ニ於テ一大障礙ヲ與フルナルヘシ

顧フニ帝國政府カ今回要求セントスル所ニ對シテハ、各條約國モ必ス其大體ニ於テ同意ヲ表スルニ相違ナカルヘシ然レトモ之ヲ二年前ノ頃ニ比スレハ、此事業ハ一層困難ニ赴キタルコトト信ス 故ニ日本政府カ條約改正ノ事業ヲ完了セント欲セハ先ツ第一着ニ萬障ヲ排シテ一意之ヲ貫カントスル決心アルコトヲ諸條約國ニ示シテ満足セシムルニアラスンハ何事モ成就スルコトナカルヘシ 而シテ如何ナル事ヲ以テスレハ之ヲ證スルニ足ルヤ又如何ナル方法ヲ以テ此

保證ヲナスヘキヤノ點ニ至リテハ余ハ一言セントス 右ノ如キ満足ヲ與フヘキ保證ヲシテ效驗アラシメントスルニハ確實明晰ニシテ且ツ異常ノモノヲラサル可カラサルナリ故ニ此際日本カ又タモ榎本氏ノ提案ヲ撤回シ新案ヲ以テ之ニ代ヘントスルコトアラハ日本カ其志望ヲ達スルコトハ到底望ム可カラス何トナレハ如此キ處置ハ益々日本ハ條約改正ノコトニハ誠實ト熱心トヲ缺ケリトノ風評ヲ確カムルニ至ルヘケレハナリ

余ハ東京ノ各國公使館員トハ大抵親密ノ間柄ナルヲ以テ此等ノ人人カ重要ナル時事問題ニ就テ有スル意見ノ大要ヲ知ルコトヲ得タリ 今余カ一個人ノ資格ヲ以テ知り得タル所ヲ述ヘンニ例ヘハ今國ノ條約改正調査委員ノ任命ニ就テ外交官中ノ噂スル所ハ此ノ任命ハ眞實其委任サレタル改正事業ヲ完結スルノ目的ニ非スシテ却テ内政ヲ調和スルノ目的ニ出テタルナルヘシト 以テ日本ノ條約改正事業ニ關スル外交官中ノ信用及ヒ感情ヲトスニ足レリ

余ハ右ノ如キ事ヲ述フルハ好マサルコトナルヲ以テ頗ル躊躇シタリ 然レトモ余ハ優游不斷ノ處置ヨリ生スルトコロノ結果如何ヲ舉示シ、且ツ本問題ニ關シ外國ニテノ輿論ノ

カラス 各條約國カ領事裁判權ヲ撤去シ又現行條約上ノ稅率ニ因テ與ヘラレタルトコロノ擔保ヲ拋棄スルニハ其間若干ノ經過期限ヲ設ケテ猶豫ヲ與ヘラレンコトヲ要求スルハ疑フヘカラサルノコトタリ而シテ此要求タルヤ全く不當ト云フコトヲ得サルナリ 現時外國商人ハ三十年以來繼續シ來レル狀態ノ下ニ其業ヲ營ミ居レリ 而シテ今彼等ニ於テ此三十餘年間某種ノ特權ヲ常ニ享有スルコトヲ要求スル權利ヲ生セサルコトハ固ヨリ論ヲ待タサレトモ新事態ノ下ニ推シ移ルニ際シ狼狽セスシテ之レニ應スルノ備ヲ大シ或ハ損失ヲ蒙ラスシテ其業ヲ退カシムル爲メ斯ル變換ノ期ニ先チ其如何ニ變換セラルヘキヤヲ充分豫知セラレンコトヲ要求スルハ外國商人ニ取リテ決シテ不當ニ非ラサルナリ 議定書第五條ニ就テハ各國必ス不同意ヲ表スヘキハ余ノ信スル所ナリ現時日本國ノ密開港場ニ於テ條約國臣民ノ所有ニ係ル不動產ハ少クモ貳千萬圓ニ及フヘシ 故ニ各國カ此條項ニ同意ヲ表スルハ恰カモ右金額ヲ失却スルト異ナルコトナシ

故ニ日本カ條約國ヨリ斷然拒絕サル、コトヲ望ムニ非ラスシハ寺島伯ノ立案ニ係ル議定書中ニ掲クル事項ヲ提出スル

孰レニ傾キ居ルヤヲ指示スルヲ以テ余ノ義務ト信シタルナリ而シテ余ハ猶ホ爰ニ確信スル所ヲ陳述セント欲ス即チ此際果斷硬強ノ處置ヲ以テ速カニ前記ノ如キ風評ヲ消滅セシムルニ非スンハ満足ナル改正ヲ遂クヘキ機會ハ益々遠サカル可シ

寺島伯ノ提案ニ附加シタル議定書ニ就テハ余ハ多言ヲ費スノ必要ナシト信ス 若シ該案ニシテ實際行ハレ得ヘク又各國ノ同意ヲ得ラルヘキニ於テハ余ニ於テモ亦進ンデ之ヲ贊成スルコトハ固ヨリ言ヲ待タサルナリ然レトモ凡テ條約改正ノ談判ニハ少クモ二人ノ談判者アルコト即チ一方ニ於テハ日本國、他ノ一方ニ於テハ條約國アルコトヲ記憶セサルヘカラス 日本國カ現條約ヲ廢棄スルノ覺悟ナキ限りハ一方ノ談判者ハ如何ナルモノヲ讓與スヘキヤヲ確カムルト同時ニ他ノ一方カ要求セントスル所ハ如何ナルモノヲ見出スコト肝要ナリ 國ト國トハ互ニ同等ノ位置ニ立ツヲ以テ一方カ欲スル所アレハ又必ス他方ノ權利ヲモ重ンセサルヘカラス故ニ今日日本國カ改正案ヲ提出セントスルニハ先ツ各條約國カ讓與スヘキ所ハ如何ナルモノナルヤ又自國ノ熱心ニ求メント欲スル所ハ如何ナルモノナルヤヲ考慮セサルヘ

ハ頗ル不得策ナルヘシト余ハ信スルナリ 茲ニ謹テ卑見ヲ呈ス

千八百九十二年四月二十五日

外務省ニ於テ テ ニ ソ ン

附屬書九

條約改正案委員會文書 (九)

條約改正案ニ對スル第一議

伯爵 伊 藤 博文

外務大臣ノ日英間通商及航海條約ノ修正案ト寺島樞密顧問官ノ立案ニ係ル新案トヲ對照査閲スルニ其大體ニ於テ異ナル所ハ條約其ノモノニアラス條約其ノ物ニ就テハ大體ニ於テ兩案ノ間著シキ異同ナキカ如シ而シテ其ノ大ニ同シカラサルモノハ條約改正ヲ施行スル方法ノ如何ニ存スルモノノ如シ

外務大臣ノ提案ニ依レバ治外法權ヲ撤去シ泰西諸國ト對等ノ位地ヲ以テ條約ヲ締結スルノ目的ヲ達スル爲メニハ彼我ノ便宜ヲ計リ有限ニ更遷ノ時期ヲ劃定スルコトヲ必要ナリト認メタルニ起岷セリ 而シテ其ノ所謂ル彼我ノ便宜トハ

我ニ就テ之ヲ云ヘハ權利ヲ恢復シテ對等ノ位地ニ立ツニ從テ又タ必ス之ニ伴フノ義務ヲ負ハサルヘカラス 此ノ義務ハ之ヲ履行スルニ周到ナル準備ヲ要ス 今一舉シテ治外法權ヲ撤去シ權利ヲ恢復スルハ美ハ即チ美ナリト雖モ條約ニ基因スル義務ハ準備ノ如何ニ拘ハラズ即日ヨリ之ヲ履行セサルヘカラス 故ニ更遷ノ時期ヲ劃定スルハ我ニ在テハ此ノ時期ニ於テ餘カニ準備ヲ爲スノ便宜アリ又彼ニ就テ之ヲ云ヘハ蓋歐洲諸國ト東洋諸國トノ間ニ締結セル條約ニシテ未タ對等ナルモノアルコトナシ而シテ又對等ノ條約ヲ締結センコトヲ希圖スルノ條アルコトナシ 萬一其ノ希圖ヲ有スルモノアリトスルモ、政治文物其ノ他社交上ノ情況恐ラクハ西洋諸國ノ視テ以テ對等條約ヲ締結スルノ位置ニ在リト認ムルニ足ルモノナカラン 此間ニ在テ我國獨リ對等ノ條約ヲ締結スルノ希望ヲ有シ而シテ又歐洲諸國ヲシテ我國ノ東洋諸國中獨歩ノ地位ニ立ツコトヲ認識セシメ且ツ我國ノ永ク舊來ノ條約ヲ墨守スルヲ甘ンセサルヲ至當ナリト公言セシムルニ至レリ 然レトモ彼ニ在テ今東洋諸國一般ニ對スル軌轍ヲ日本ニ對シテノミ一舉シテ改ムルハ積勢ノ餘又彼ノ難スル所ナラン 乃チ更遷ノ時期ヲ劃定スルハ轉移

ノ急劇ヲ避ケテ改正ヲ圓滑ニスルノ便宜アリ 外務大臣ノ案ニ於テ更遷ノ時期ヲ劃定シタルハ蓋是ノ如サ彼我ノ便宜ヲ計ルニ出デタルモノナラン 然ルニ寺島伯起草案ノ目的ハ右等ノ情勢ニ拘ハラズ普通泰西諸國間ニ行ハル、條約ノ例文ニ基キ直前一舉シテ治外法權ヲ撤去シ對等ノ條約ヲ締結セントスルノ希望ニ出デタルモノナリトス 二者ヲ比較シテ觀察ヲ下セハ其ノ歸着スル所ノ目的ハ同一ナルニ拘ハラス施行ノ方法ニ於テ大ニ異ナルモノアリ而シテ成功ヲ期スルニ於テモ自ラ難易ノ別ナクンハアラス 蓋外務大臣ノ提案ヲ履行スルニ於テハ從前ノ關係ヨリ見ルモ成功ヲ期シ易キモノアラン且ツ我ニ在テ條約上ノ義務ヲ履行スル爲メ其ノ準備ノ時間ヲ有スルヲ以テ便宜ヲ得ルコト少ナカラス

之ニ反シテ寺島伯案ヲ履行セントスルトキハ今遽ニ其ノ成功ノ期シ難キモノアルハ多辯ヲ費サスシテ知ルコトヲ得ヘシ好シ其ノ成功ヲ見ルモノトスルモ條約ニ基因スル外ノ義務ハ即日ヨリ悉皆其ノ責任ヲ負擔セサルヘカラス 夫レ然リ内ニ省シテ我準備ハ外人ヲ即時ニ放テ内地ニ雜居セシムルモ果シテ顧念スヘキモノナキヲ得ルカ且ツ其ノ成功既ニ

期シ難シ故ニ一タヒ談判ヲ開キテ妥協ヲ得サルトキハ其ノ結果或ハ異常ノ手段ニ出テ條約廢論ヲ斷行スルカ然ラサレハ數年間國權上國計上尙ホ舊套ヲ墨守セサルヘカラサルノ境遇ニ陥キランカ是深ク慮ラサルヘカラサル處ノモノアリ熟々惟フニ條約改正ノ事ハ實ニ國家ノ消長ト相關ス從來既ニ數回ノ着手ヲ經テ前後其ノ目的ヲ達スル能ハス 而シテ其ノ目的ヲ達セサリシハ或ハ却テ不幸中ノ幸ト稱スヘキモノナキニシモアラサリシナラント雖モ國家ノ威信上ニ於テハ亦缺損スル處ナシト云フヘカラス 今ヤ我輩此ノ重大ナル改正案調査委員ノ任ヲ奉スルニ方テ深ク將來ノ結果ヲ推究スルコトナク徒ニ理論ニ偏シ或ハ時情ニ縛セラレ、輕々論斷シテ容易ニ着手シ成功ヲ誤ルカ如キアラハ則チ國家百年ノ長計ヲ壞ルモノニシテ上ハ 至尊ノ明ニ負キ下ハ衆民ノ望ヲ失センコトヲ恐ル 是レ博文各位ト共ニ委員ノ大命ヲ奉セシヨリ夙夜憂慮シテ措ク能ハサル處ナリ希クハ各位ニ於テモ此ノ國家ノ消長ニ關スル重大ナル問題ニ就テ深思熟慮將來ノ利害得失如何ヲ講究シ甲乙兩案何レカ今日ニ適スルヤヲ審査シ以テ豫メ順序緩急ヲ着手ノ前ニ一定スル處ナカルヘカラス

今茲ニ各位ノ爲メニ參觀ノ便ヲ謀リ兩案ノ大體ニ就テ其ノ異同ヲ辨シ併セテ所見ヲ附スルコト左ノ如シ

外務大臣條約案ノ名義ト寺島伯案ノ名義トヲ比スルニ外務大臣ノ案ニ於ケル通商航海條約ナル名義ノ普通ナルヲ以テ可ナリトス 和親ノ名稱ハ對等條約上多ク其ノ例ヲ見スシテ却テ往々未開國ト締結スル處ノ條約ニ於テ見ル處トス 外務大臣ノ案ニ在テハ更遷ノ時期ヲ設クルノ必要ヨリシテ之カ第一第五第六ノ稅權ニ關スル條項、第十一條ノ噸稅燈稅ニ關ル條項及ヒ第十六條領事裁判權廢止後ニ於テ從前ノ特權免除等ヲ繼續セサルノ規定第八條末文即六個年ヲ限リ各開港間ノ運搬ヲ許スルノ規定アリ此等ノ條項規定ハ寺島伯ノ案ニ存セス。是レ兩案ノ大ニ異ナル處ナリ

寺島伯案ノ第一條即チ通商航海ノ自由ニ關ル條項ハ外務大臣案議定書第二條第二項ト同一ノ主旨ナリトス唯チ外務大臣案ニハ領事裁判權廢止ノ日ヨリ兩國云々トアリ若シ改正ノ方針ニシテ外務大臣ノ案ニ依ルモノトセハ本條項ハ其ノ立案ヲ改メテ寺島伯案第一條ノ如クシ而シテ其ノ末ニ「但シ本條項ハ日本ノ版圖内ニ於テハ領事裁判權廢止ノ日ヨリ有效」ナリトセハ可ナリ

寺島伯案ニ於テモ外務大臣ノ案ニ於テモ均シク住居商賣ノ權利アルコトヲ認メタルモ明カニ工業農業等ヲ營ムノ權利アルコトヲ明言セス 寺島伯案第一條ノ末項ニ於テ工業製造通商及航海ノ事項ニ關シテ納ムル所ノ諸稅ノ内國臣ニ異ナラサルコトヲ保證セリ 此ノ條ニ對スル外務大臣案ノ議定書第二條第三項ニ於テハ單ニ商業ノ爲云々トアリ 外國人タル者ノ工業農業運輸山林牧畜等ノ事ニ關シ内國人同様ニ營業ノ權利ヲ有スルヤ否ヤニ關シテハ兩案共條約上ニ於テ其ノ主旨分明ナラス或ハ外國人ハ此等ノ事業ニ從事スルニ於テ當然内國人同様ノ權利ヲ有スルトスルカ抑々又外國人ノ此等ノ權利ハ其ノ國ノ國法ニ於テ之ヲ伸縮スルコトヲ得ルモノトスルカ是レ亦講究セサルヘカラサルノ疑問ナリ 寺島伯案第四條ト外務大臣案議定書第四條ヲ比較スルトキハ寺島伯案ニ於テハ版權ノ保護ヲ削除セリ 然ルニ近時起リタル萬國同盟會ニ加入スルモノトセハ版權保護ノ事ハ同盟ノ目的ニ於テ重要ノ位置ヲ占メタリ 是レ亦其ノ同盟ニ加入スルヤ否ヤヲ決定スルコト必要ノ問題ナリ 寺島伯案第八條外務大臣案第七條ヲ對照スルニ寺島伯案ニハ外國通商ヲ許ルサレタル港ニ於テ云々ノ文字アリ 外務

伊藤伯條約改正案ニ對スル第一義ノ所答

第一 外務大臣ト本官トヲ比較シ一ハ準備ノ時期ニアリ一ハ直ニ實行スルノ差異アリテ我國狀民度ニ應シテ其優劣ヲ判スレハ外務大臣案ノ如ク假スニ五年ヲ以テスルトキハ我國ニ法權ヲ實行スルノ猶豫アリテ都合好カルヘク見ユレトモ現締盟國ハ二十國ニシテ其中十九國ハ皆領事裁判權アルモノニシテ此各國悉ク改正了了告ケタルノ後ニアラサレハ最惠國條款ノ爲メニ法權ノ實行ヲ遂ルコト能ハス假令ヒ最初締結スヘキ條約中ニ五年ト定ムルトモ爾後ノ分ハ漸次ニ多少ノ時日ヲ過クヘク終リニ第十九回ハ幾許ノ時日ヲ以テ批准書ヲ交換スヘキヤ最初ニ之ヲ推測スルコト能ハサルヲ以テ五年ノ期限ヲ定ムルハ悉ク無用ニ屬スヘシ 本官提共條約案第十五條ニ本條約ハ調印後成ルヘク速カニ之ヲ批准シ其批准書ヲ交換シ其後何ケ月ニシテ之ヲ實行シ其實行ノ日ヨリ滿十二ケ年間效力ヲ有スルモノトス」ト記載シタレトモ更ニ之ヲ熟慮スルニ右第十五條中實施ノ年期ヲ推知スルコト能ハス何者十九ケ國ヲ併セテ一舉ニ談判ヲ果シ粗ホ同一時ニ交換ヲ了スルモノトセハ或ハ其年期ヲ推測シテ之ヲ掲クル又難カラ

大臣案ニ於テハ單ニ諸港トノミアリ 寺島伯案ニ於テ外國通商ヲ許ルサレタルト記シタル明亮ナルニ如カス 寺島伯案第一條外務大臣案第十條共ニ海員逃亡ニ關スルノ條トス。兩案ヲ對照スルトキハ寺島伯案ニ於テハ軍艦乗組ノ者ヲモ之ニ加ヘ外務大臣ノ案ハ商船ノミニ限レリ 此ノ異同ハ何等ノ理由ニ基ツクカ 寺島伯案ノ第十四條ト外務大臣案第十四條ヲ對照スルニ最惠國待遇ノ規定ニ於テ外務大臣ノ案ニハ政府ヲモ加ヘ寺島伯ノ案ニ於テハ單ニ人民ノミヲ指セリ是レ各國間條約ニ就テ事例ヲ調査スルヲ要ス 寺島伯案ノ議定書第三ニ依ルトキハ日本ノ海關稅及開港場ニ關ル諸規則制定ノ權ハ條約實施ノ日ヨリ日本政府ニ屬ス云々トアリ 此ノ條蛇足ナルカ如シ如何トナレハ對等ノ條約ヲ締結シテ自立ノ權ヲ施行スルニ於テハ豈ニ獨リ海關稅及開港場ニ關ル諸規則制定ノ權ノミ我ニ屬センヤ且ツ制定ノ權ヲ謂テ施行ノ權ヲ謂ハサレハ却テ缺點アルニ似タリ 明治二十五年四月二十五日

附屬書一〇

條約改正案調查委員會文書(一〇)

サルヘシト雖モ各締盟國ヲシテ悉ク皆同一時期ヲ以テ談判了了了告ケシムルコト能ハス故ニ彼此ノ間時期ニ遲速アルモノトセハ其時期タルヤ實際ノ情況ニ照ラシ判知スルノ外ナキヲ以テ條約實行ノ期約ヲ立ツルノ穩當ナラサルヲ覺ユ 是ヲ以テ第十五條中「其何ケ月ニシテ之ヲ實行」ノ十二字ヲ刪除シ更ニ其期限ハ議定書中ニ移スノ妥當ナルニ若カサランカ今議定書中ニ掲クルモノトセハ左ノ文例ヲ以テセンカ

本條約實行ノ期限ハ日本國ト其他ノ締盟各國ト締結セル現行條約ヲ悉皆改正シ其最後ニ締約シタル締約ヲ批准交換シタル日ニ於テ之ヲ定ムヘキコトヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

本官提案ニテハ直ニ領事裁判ヲ廢シ我法權ヲ實行スト云フモ他列國ノ締結ヲ俟タスシテ直チニ實行シ得ヘキモノニアラス均シク數年ノ日時ヲ要スルヤ知ルヘシ 故ニ伊藤伯ノ議ノ如ク準備ノ時期ヲ約スルハ其理由ナキニアラサルモ歸スル所亦同一ニシテ各締盟國ヲ通シテ悉皆條約ヲ交換スルノ期ニ至ラスハ實行ヲ期スヘカラサルヲ以テ實際上ノ成績ニ至テハ甚タ異ナル所ナカルヘシ但右議定

書中ニ加フヘキ文刷ニ或ル國ニ對シ他ノ締盟各國ト日本トノ事ヲ約スルハ穩當ナラサルヲ覺ユト雖モ別ニ方法ナキヲ以テ試ニ載セタリ

第二 條約ノ名稱ニ關シテ和親ノ語ヲ除クモ異議ナシ

第三 法權ヲ五ヶ年後二期スルヤ如何ノ理由ハ前項ニ陳スルカ如シ稅權……ノ事ニ付キ外務大臣ノ案六ヶ年ノ期限ハ彼ニ於テ要求セルコトアルヲ聞カサルヲ以テ即時ニ之ヲ得ントスルノ外ナシ然レトモ是亦前項ニ述ルカ如ク十九國ノ條約結了ノ後ニアラサレハ實行スルコト能ハサルナリ

第四 工業、農業等ヲ營ムノ權利アルコトヲ明言セサルハ列國ノ例ニ參照スルニ明文ヲ掲クルモノヲ看出サス概ネ「商業ヲ營ムヲ得ヘシ」云々ノ明文アルノミ仍テ甲號案ニ倣ヒ之ヲ探レリ 蓋シ外國人ノ此等ノ權利ハ其國ノ法律ニ依テ伸縮スルコトヲ得ルノ意ニ則ランコトヲ望ム

第五 版權ノ保護ニ關スル事項ハ列國ノ條約中明文ヲ着共サス仍テ甲號案ニ據レリ 之ヲ條約ニ掲クルノ可否ハ先ツ萬國同盟會ニ加入スル如何ニ拘ハルヘシ

第六 海員逃亡ニ關スル規程中、軍艦乗組人ヲ加ヘタルハ

伊藤樞密院議長提出 條約廢棄ニ關スル件

最後條約改正ノ談判ヲ開キ各國政府ト協議決定ニ至ラサルニ方リ已ムヲ得スシテ舊條約ノ廢棄ヲ宣言セサルヲ得サルハ予モ亦同意ヲ表スル所ナリ 蓋シ舊來ノ條約ハ時勢ノ變遷ニ依リ今日ニ適セサル論ヲ待タス其ノ條文ニ於テ平和及友誼上永久ナルコトヲ保證シタルニ拘ハラス其ノ主眼トスル所既ニ通商及航海ニアリテ尙且時ヲ限り改正ヲ豫期セリ決シテ永久無限ニ拘束ノ効力アルヘカラサルハ其ノ性質ニ於テ既ニ明カナリト云フヘシ 是レ我カ國ノ條約ニ於テ獨リ然ルニアラス各國ノ間ニ行ハルル通商航海ノ條約ニシテ無窮ニ遵守ノ効力ヲ有スルモノアルコトヲハシ而シ是等條約ノ性質ニ於テ有限ナルコトハ公法學者ノ定論アリ 故ニ我現行ノ條約ニ於テモ彼我ノ間ニ廢棄ノ權利アルコトハ外國ノ法學者ニシテ我政府ニ奉職スル諸氏ノ論說ニ於テ詳細ニ討究シテ殆ムト餘蘊ナシト云フモ可ナリ

條約廢棄ヲ宣言スルノ權利ハ我之ヲ有セリ然レトモ之ヲ實地ニ施行セントスルニ於テハ先ツ當然ノ位置ト時期トニ際會セサルヘカラス而シテ又之ヲ廢棄スルニ於テ何等ノ結果ヲ生スヘキカラ豫察シ最モ慎重ニ善後ノ策ヲ講究シ其所置

列國條約ヲ參照スルニ其例アリ依テ甲號案ノ文例ニ據レルナリ深キ理由ナシ

第七 最惠國待遇ノ規定ニ政府ヲ加ヘサル所以ハ他ノ條約ヲ參照スルニ政府ノ文字ヲ挿ミシハ稀ナリ例スレハ英國ト暹羅共國ト波斯英國ト日本トノ條約(其第廿五條參看)ニ掲クルカ如シ仍テ之ヲ削除セリ

第八 議定書第三ニ係ル規定ハ蛇足ナリト感アルモ法權限收ニ關シタル規定ヲ掲ケタルモノニ對シテ稅權獨裁ノ事ヲ明瞭ニスルノ必用アリト認ム 若シ本項ヲ掲クルノ必用ナシトセハ第一項モ之ヲ削除スルモ可ナラン然レトモ本條約中ニ領事裁判ヲ廢シテ其裁判權ニ歸シ又稅權ノコトモ同様載セサレハ全編終ニ貫通セルヲ以テ不用ノ如ク見フレトモ彼ヨリ其權ヲ斷絶スルコトヲ明言セルナリ

明治二十五年五月三日

寺 島 宗 則

榎本外務大臣閣下

附屬書一

條約改正案調査委員會文書(一一)

方法ヲ誤マルコトナキヲ期セスンハアルヘカラス 但條約ヲ改正スルモ已ムヲ得スシテ之ヲ廢棄スルモ等シク是レ我獨立國タルノ權利ヲ回復シ以テ國威ヲ振張セント欲スルニ外ナラス 而シテ國權回復ノ目的ハ維新中興ノ廣漠ナリ國權回復國威振張ノ目的ヲ達シ是ニ依テ列國交際ノ範圍ヲ脫シ鎖國攘夷ノ舊態ニ復シ宇內趨勢ノ外ニ孤立セントスルニアラス 一國自主ノ權利ヲ完全ニ保有スルト同時ニ獨立國トシテ列國ノ間ニ并立シテ當ニ盡スヘキノ義務ヲ盡シ列國ト相對峙シテ國際法ノ範圍ニ於テ我ノ位置ト我ノ威嚴ヲ保持シ我東方ニ於テ卓然不羈大國ノ地ヲ占得セントスルニ他ナラス 抑々此ノ目的ヲ達スルハ國家生存ノ上ニ於テ一日モ緩慢ニ附スヘカラサル我政府ノ重大ナル責任ナリ 何ントナレハ此ノ目的ヲ達スルニアラサレハ將來國家ノ昌運ハ得テ望ムヘカラサレハナリ 是ニ由テ之ヲ觀ル外交ノ依然トシテ繼續セサルヘカラサルノミナラス彼我ノ交誼ヲシテ益増進セシメサルヘカラサルハ少シク宇內ノ形勢ヲ視ルノ明アル者皆既ニ承認スル所ニシテ尙且維新中興ノ廣漠ナリ 夫レ然リ條約ヲ改正スルモ廢棄スルモ亦其ノ目的ハ外交ヲ増進シ彼我ノ親密ヲ加フルヲ以テ國光ヲ發揚ス

ルノ助ト爲ササルヘカラス 而シ此ノ目的ヲ以テセハ萬已ムヲ得サルニ際シ廢棄論ヲ斷行セント欲シテ或ハ國家ノ危險ヲ誘起スルコトナク平和ニ其局ヲ結フモ亦得テ望ムヘカサルニアラス

今茲ニ條約廢棄ノ時期及其位置ヲ豫測シテ而シテ其ノ手段方法ヲ略論スルコト左ノ如シ

我ニ條約廢棄ノ權アルハ法學者ノ所論ニ於テ既ニ明ナリ然レトモ是レ畢竟條約ノ性質ト軌近我國勢トニ依リ之ヲ概論シタルノミ故ニ之ヲ實行スルニ方テハ宜シク之ヲ彼我交渉ノ時勢ニ照シ從來ノ關係如何ト省ミルトコロナカルヘカラス 抑々我改正ノ問題ハ十有餘年繼續シテ來リ其局ヲ了スルニ至ラス而シテ其ノ改正上ノ問題往々變轉シテ遷延今日ニ至レルハ我ノ要求スル所時ニ於テ異同アルニ基ツクコト少ナカラス我要求當初ニ在テハ彼ノ拒ム所ナリタルモノ少ナカラスト雖歲月ヲ重ヌルニ從テ我ノ要求スル所モ亦漸次歩ヲ進メ得隴望蜀ノ形跡アルニ拘ラス今日ニ至テハ列國多少ノ異同アルモ殆ムト之ヲ大體ニ於テ是認スルモノアルカ如シ 然レトモ最終ノ談判ヲ開ノニアラサレハ果シテ彼我妥協ニ至ルヤ否ヤ豫メ測ルヘカラサルモノアリ況ンヤ談

ノ國及國民ニ對シテ實際ヲ斷絶スルノ意ニアラサルコト論ヲ待タス故ニ廢棄ヲ宣言スルト同時ニ其臣民ヲ待遇スル方法ヲ公示スルヲ得策トス

此ノ如クニシテ條約ヲ廢棄ス我ノ盡スヘキノ義務ヲ盡シ而シテ妥協ニ至ラス國權ヲ保持スルニ於テ萬已ムヲ得サルノ意ニ出ツルヲ示シ彼我ノ間尙將來ノ交際慎重シ一モ暴斷ニ出ツルノ形跡ヲ貽コスコトナクンハ豈ニ之ヲ口實トシテ平和ヲ破フルノ餘地ヲ存センヤ或ハ之ヲ口實トシテ平和ヲ破フルカ如キ者之アラントモ我ニ於テハ名實共ニ正理ニ出ツ未タ必スシモ豫メ深ク顧慮スルヲ要セサルナリ

明治二十五年五月六日

伊 藤 博 文

附屬書二

條約改正案調査委員會文書(一二)

井上樞密顧問官提出 沿海漁業ヲ内國人民ニ

專屬セシムル意見

條約ノ改正ニ伴フテ同時ニ國民ノ事業ニ特別ノ保護ヲ加ヘサル可ラサル者アリ一ニ曰鐵道二ニ曰鐵山三ニ曰ク沿海資

榎本外務大臣時代 四〇一 附一二

判ノ至難ナル數十國ニ交渉シ實際ニ於テ各國多少其ノ利害ヲ異ニスルモノアルハ數ノ免レサル所ニシテ到底均シク各國ノ妥協ヲ得ルハ望ムヘカラサルモ測リ難キニ於テテヤ今假令利害ノ關係僅少ナル諸國ハ措テ問ハサルモ最モ重大ナル關係ヲ有スル大國トノ談判ハ勉メテ妥協ニ至ルヲ謀ラサルヘカラス 此ノ如クニシテ列國中遂ニ協議決定ヲ得サルモノアルニ於テ始メテ我ニ在テ已ヲ得ス廢棄論ヲ提共スルノ位置ヲ得ルモノト謂フヘシ

既ニ其ノ位置ヲ得ル其ノ時機如何ヲ審察セサルヘカラス此ノ時ニ方リ各國ノ我ニ對シテ離合如何我内國ノ事情如何ヲ省ミ假令平和ニ局ヲ結フノ望アルモ事體頗ル重大ナルヲ記臆セサルヘカラス

同時廢棄ヲ宣言スル對手ハ何國ナルカヲ審察セサルヘカラス改正ニ就テ我ト協議決定ヲ得タル者ハ之ニ對シテ廢棄ノ宣言ヲ爲スノ必要アルコトナシ 即チ廢棄ヲ斷行スルト云フモ各國ニ對シテ悉トク之ヲ斷行スルニアラスシテ一方ニ於テ其條約締結ニ至レル者ニ對シテハ既ニ締結シタル條約ヲ實行シ一方ニ於テ獨リ談判妥協ニ至ラサル者ニ對シテ廢棄ヲ宣言スルト云フニ過キス 而シテ廢棄ヲ宣言スルモ其

易四ニ曰沿海漁業五ニ曰北海道ノ開墾是ナリ

蓋文明各國ハ國際ノ間ニ漸ク博愛同仁ノ主義ヲ採ルト同時ニ又其ノ國民ニ向テ(殊ニ生業未タ發達セサル幼稚ノ國民ニ向テ)營業上ニ特別ノ保護ヲ加ヘサルハアラス 鐵道ノ保護ハ現在政府ノ取ル所ノ國有主義ヲ實行セハ充分ナリトス鑛山ハ鑛法既ニ外人ノ所有ヲ禁シタル沿海貿易ハ條約案ニ於テ之ヲ國法ニ譲リタリ只ク沿海漁業ノコトハ條約案一ノ明文ナク而シテ從前國法亦外人ニ禁スモノアラ

各國ノ例ヲ案スルニ大抵干潮以外三哩ヲ所屬海トスルノ國際法ニ據リ漁採ノ利ヲ以テ其ノ國民ノ事業ニ歸シ多クハ外國條約ニ依リ宣スルヲ借ラスシテ國法ヲ以テ外人ノ侵犯ヲ嚴禁シタリ 參照甲號 佛國ノ例 或ハ又内外ノ事端ヲ防ク爲ニ條約ヲ以テ之ヲ明言シタルアリ 參照乙號 我カ國地理上ノ天賦ニ依リ魚介ノ利國產ノ大部分ヲ占メ輸出品ノ第三又ハ第四ニ位シ 農商務省ノ調査ニ依ルニ明治二十一年全國重要水產物獲高千九百三十六萬千五百六十七圓二十二年全國水產製造物總價千五百三十四萬三千五百五十八圓二十三年北海道廳治一班ニ依ルニ北海道水產總收穫高七百九十六萬四千八

六十九國二十四年外國貿易表ニ依ルニ水産輸出總計三百九十一萬七千五百四十一圓其利亦少ナリトセス 然ルニ從來沿海漁業ノ外人ニ對スル禁令ナキカ爲メ又ハ嚴行セラレサルカ爲メニ千島ニ於ケル「ラツコ」ノ盜獵ハ明治元年以來概算四百艘ニ下ラス其ノ金額五千萬圓ニ下サルヘシト云フ北海道ノ水産ハ昆布ヲ最大ト爲ス（明治二十四年度貿易表ニ昆布輸出高七十六萬五千八百三十一圓）而シテ近來支那人ハ露領近海ノ昆布ヲ採獲スルモノアリ行々北海道ニ向テ手ヲ着ケサルヲ保チ難シ鱈漁ノ收穫ハ明治二十一年農商務省ノ調査ニ依ルニ二十萬〇四千五百八十九圓トス 而シテ昨午米國ノ富豪「カロー」氏ハ北海道沿岸ヨリ千島及「サカレン」島鱈漁ノ探險ヲ企テ淺野回漕店ノ汽船鶴丸ヲ一ヶ月一萬圓ノ約定ニテ借入レ三ヶ月ヲ期シ七月十二日ヲ以テ橫濱ヲ發シ十六日小樽ニ着シテ北航シタリトイフ今ニ及テ沿海漁業ノ外人ニ對スル禁令又ハ條約ヲ設ケサレハ我カ國天賦ノ利源ノ一ハ將來外人ノ爲メニ占侵セララルニ至ルモ亦知ルヘカラス此レ條約改正案ノ審査ニ際シ尤モ注意ヲ要スヘキ所タリ

今條約案第八條ニ於テ沿海貿易ト俱ニ沿海漁業ヲ以テ之ヲ

セス故ニ政府ハ此ノ條約ノ條文ニ依リ沿海貿易及漁業ヲ國民ニ專屬セシメント欲セハ必スヤ沿海貿易法及沿海漁業法ヲ作り其ノ條文ヲ以テ外國人ニ對スル禁止及罰條ヲ設ケサルヘカラス此ノ法律ヲ缺クトキハ條約第八條案ハ何等ノ効力ヲモ生セサルヘシ何トナレハ國法ニ禁止ノ條ナシト雖亦自由ノ區域ニ屬スヘケレハナリ

參照
丙號

明治二十五年五月

井 上 毅

(甲)

佛國沿海漁業

千八百八十八年三月一日發布ノ法律ヲ以テ左ノ如ク外國船ニ沿海漁業ヲ禁止セリ

第一條 外國船ハ佛國及「アルジェリー」領土ノ沿海干潮ノ所ヲ距ルニ海里以內ニ於テ漁業ヲ爲スコトヲ禁ス 灣ニ付テ三海里ヲ測量スルニハ其灣口十海里ヲ超ヘサルモノニシテ兩端ノ最接近セル處ヨリ灣口ヲ經テ引キタル直線ヲ以テ基點トナス

○佛國沿海ノ各州及「アルジェリー」ニ於テ命令ヲ以テ此區域ノ劃線ヲ定ムヘシ

內國ノ法律ニ屬セシムヘク而シテ同時ニ沿海漁業法ヲ設ケテ之ヲ施行スヘシ

各國多クハ海法ナルモノアリテ沿海貿易及沿海漁業ノ事ヲ規定セリ今單ニ沿海漁業ノ事ヲ規定セントスルモ亦先ツ我カ國所屬海ノ分界ヲ明ニセサルヘカラス今宜シク海軍省遞信省農商務省ヨリ選任シ委員ヲ設ケテ海法案ヲ起草セシムヘシ此事條約委員ノ區域外ニ涉ルト雖モ併セテ玆ニ附言ス

因ニ云フ條約案第八條ニ

兩締盟國ノ沿海貿易ハ本條約ニ於テ規定スルノ限ニアラス日本國及ヒ大不列顛國ノ法律ニ從ヒ之ヲ規定スヘキモノトス

トアルハ宜シク寺島伯案ニ從ヒ法律規則ヲ以テ之ヲ規定スヘシト改ムヘシ（英伊條約ノ文例亦同シ）何トナレハ單ニ法律ノミヲ掲ケル時ハ一切ノ沿海貿易又ハ漁業ニ係ル規定ハ大小トナク必ス議院ノ議ヲ經タル法律ニシテ始メテ外國人ノ服從ノ義務ヲ生スルノ嫌アレハナリ

終ニ又一言スヘキモノアリ我カ條約案ハ沿海貿易ヲ以テ國法ノ規定ニ屬セシメ而シテ外國人ニ之ヲ禁スルノ意ヲ明示

第二條 若シ外國船ノ船長又ハ其乘組員カ佛國領土沿海ノ禁制アル部分ニ於テ打網ヲ爲シ其他如何ナル方法タルヲ問ハス漁業ヲ爲シタルトキハ其船長ヲ十六「フラン」以上二百五十「フラン」以下ノ罰金ニ處スヘシ

第三條 前條ニ規定シタル罰金ノ刑ハ再犯ノ場合ニ於テ其額ヲ二倍シ之ヲ科スルコトヲ得若シ本法ノ違背者トシテ刑ノ言渡ヲ受ケタル日ヨリ二箇年以內ニ於テ再ヒ本法ヲ犯シタルトキハ再犯ナリトス

第四條 國有船又ハ小船ヲ支配スル士官及機關士其他總テノ職員及漁業監督官ハ犯罪ヲ證明スル爲メ調書ヲ作り其犯罪者及船舶ヲ最近ノ佛國港灣ニ引致シ又ハ送致スヘシ前項ニ掲ケタル職員ハ犯罪ノ調書及其他犯罪ヲ證明スル總テノ書類ヲ海上取締委員ニ引渡スヘシ

第五條 調書ニハ其終始ヨリ三日以內ニ所在治安裁判所ノ判事又ハ判事補ノ中一人ノ前ニ於テ若クハ調書ヲ作りタル者ノ居住地又ハ船舶所在地ノ區長又ハ助役ノ前ニ於テ署名簽言スルコトヲ要ス然ラスンハ其調書ハ無効ナリトス然レトモ海上取締委員士官機關士漁業監督官等ノ作りタル調書ニハ簽言ヲ要セス

總テノ場合ニ於テ調書ハ誓言ノ日ヨリ又ハ若シ誓言ナキトキハ調書終結ノ日ヨリ四日以内ニ之ヲ登記スルコトヲ要ス然ラスンハ其調書ハ無効ナリトス○登記ハ連債ヲ以テ之ヲ爲スセノトス

第六條 佛國領ノ港灣ニ船舶ヲ引致シ又ハ送致シタル職員ハ海上取締委員ニ其船舶ヲ供托シ其發見シタル漁具及捕獲物ハ所有主ノ何ハタルヲ問ハス之ヲ差押ユヘシ○捕獲物ハ船舶ヲ引致シタル港灣ニ於テ千八百二十九年四月十五日ノ法律第四十二條ニ從ヒ直ニ之ヲ賣拂フヘシ其賣拂代金ハ裁判ノ宣告アルマテ海上ノ金庫ニ之ヲ供托スルモノトス

第二條及第三項ニ規定シタル罰金ノ外裁判所ハ禁制ノ漁具ヲ破壊シ又ハ禁制セサル漁具捕獲物又ハ其賣拂代金ヲ沒收スルコトヲ命ス

禁制ニアラサル漁具ハ之ヲ賣拂フヘシ
漁具捕獲物ノ賣拂代金及罰金ハ悉ク之ヲ海軍恩給院ノ金庫ニ拂入ルヘシ

第七條 起訴ハ共和政府裁判所ノ檢事又ハ海上取締委員之ヲ爲スヘシ

ノトス

此ノ場合ニ於テ漁業船ノ遵守スヘキ特別ノ取締規則ハ行政規則ノ手續ニ依リ發布スル命令ヲ以テ之ヲ規定スヘシ
○此行政規則ニ違背シタル者ハ本法ニ從ヒ證明起訴セラハシ其犯罪者ハ十六「フラン」以上百「フラン」以下ノ罰金ニ處シ船舶ノ抑留ヲ妨ケス

第十二條 本法ハ國際條約及之ニ附屬スル法律ノ條項ニ牴觸スヘカラス

○千八百八十八年八月十九日ノ命令ハ千八百八十八年三月一日ノ法律ヲ執行スル爲メ佛國沿海ヲ航行スル外國漁業船ニ關スル航海取締法ヲ左ノ如ク規定シタリ

第一條 佛國沿海ニ於ケル一般ノ航海規則ニ關セス漁具ヲ備ヘタル蒸汽又ハ帆船外國船ハ千八百八十八年三月一日ノ法律第一條ニ定メタル限界内ニ於テ左ノ規則ニ從フヘシ若シ違背スルトキハ同法第十一條ニ依テ之ヲ處分ス

第二條 外國船ニハ外ヨリ容易ニ認識シ得ヘキ記標（名稱番號等）ヲ掲ケ置クヘシ

此記標ハ之ヲ被包シ抹殺シ又ハ變更スルコトヲ得ス

第三條 外國船ハ其政府ノ管轄官廳ヨリ交付シタル公正ノ

前項ノ職員此ノ場合ニ於テ裁判所ニ對シ事件ニ付其意見ヲ開陳スルノ權ヲ有ス

若シ犯罪ノ日ヨリ三箇月以内ニ起訴セサルトキハ其訴權ヲ失フモノトス

第八條 起訴ハ犯罪人ノ送ラレタル港ニ於テ裁判管轄區内ノ輕罪裁判所ニ之ヲ爲スモノトス管轄裁判所ハ可成速ニ判決ヲ與フヘシ

第九條 第六條ニ規定シタル犯罪ノ調書ハ偽造ノ反證アラサル以上ハ證明ノ効力ヲ有ス
調書ナキ場合ニ於テハ證人ヲ以テ犯罪ヲ證明スルコトヲ得

第十條 若シ犯罪者ニ於テ罰金及犯罪ヨリ生スル費用ヲ完済セサルトキハ其完納デルマテ又ハ初犯ニ付三ヶ月再犯ニ付六ヶ月以内犯罪ノ船舶ヲ抑留スヘシ

若シ犯罪者ニ於テ控訴ヲ爲シ又ハ故障ヲ申立ルトキハ罰金及其他總テノ費用ヲ供托シテ船舶ヲ自由ニ出港セシムルコトヲ裁判所ニ申請スルコトヲ得

第十一條 本法ハ佛國領土沿海ノ制限區域内ニ航海シ又ハ投錨スルノ特許ヲ得タル外國漁業船ニ之ヲ適用セサルモ

證明書ヲ所持セサルヘカラス此證明書ニハ其國籍ノ證明、船舶外部ノ記標證明及其船舶ノ所有、船長、其他船員ノ姓名ヲ記載スヘキモノトス

此證明書ハ千八百八十八年三月一日ノ法律第四條ニ定メタル官吏ノ請求ニ依リ之ヲ差出スヘシ

第四條 外國船舶ノ佛國沿海ニ停泊スル間ハ少クトモ幅六十六「サンチメートル」丈九十七「サンチメートル」ノ青色旗ヲ其檣頭ニ掲ケヘシ

夜間ハ佛國船舶ト同シク船端ニ點燈ヲ掲ケヘシ

第五條 外國漁業船ハ港灣出入ノ際軍艦ノ演習航海並佛國漁業船ノ公ニ漁業スルヲ妨害スヘカラス

故ニ外國船ハ佛國官廳ノ命アルトキハ之ニ從テ退去セサルヘカラス

○「アルジュリー」ニ於テハ千八百八十八年三月五日ノ命令ヲ以テ漁業ニ關スル規則ヲ定メタリ

千八百八十八年七月九日ノ命令ヲ以テ「アルジュリー」ノ灣ニ付漁業ニ關スル千八百八十八年三月一日ノ法律ヲ適用シテ佛國沿海ノ區域ヲ制限スヘキ基點ヲ定メタリ

(乙)

伊太利西班牙間ノ千八百八十八年ノ條約第十九條
條約ハ沿海貿易及漁業ヲ規定セス沿海貿易及漁業ハ締盟國
ノ國民ニ專屬ス

(丙)

佛國千七百九十三年九月二十一日ノ命令

第一條 佛國ト他ノ修好國トノ間ニ存スル航行條約及通商
條約ハ此命令ノ爲ニ毫モ變更セラレスシテ其法式及本文
ニ從ヒ之ヲ實施ス

第二條 千七百九十四年一月一日以後ニ至ラハ佛國ニ於テ
又ハ佛領殖民地佛國領地ニ於テ製造サレタルカ或ハ敵ヨ
リ掠奪シタル物ナリト宣言サレサルカ或ハ共和國ノ法律
ニ違反シテ沒收サレタルニアラサルカ或ハ全ク佛國人ニ
屬セサルカ或ハ士官及乘組員四分三カ佛國人ナラサル時
ハ如何ナル船ト雖トモ佛國船ト認メラレス又佛國船ノ有
スル特權ヲ受ルノ權利ヲ有セス

第三條 佛國船又ハ生産地製造地ノ住民ニ屬スル船又ハ士
官及乘組員四分三カ其褰ケタル國旗ノ國人タルモ通常ノ
販賣港及最初ノ輸出港ノ住民ニ屬スル船ヲ以テ直接ニ輸
入スルニ非サレハ如何ナル貨物、製作物、商品ト雖佛國

借用シ家屋倉庫ヲ所有シ賃借シ及使用スルノ權利ヲ有シ
竝ニ裁判管轄及手数料ニ關シ内國臣民ト同一ノ權利ヲ享
有シ且内國臣民若クハ最惠國人民ヨリ餘分ノ租稅又ハ徵收
金ヲ負擔セサルコト

兩國臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ軍役若クハ軍役代辦
金ヲ免シ且他軍人宿營ノ免除等ニ關シテハ最惠國人民ト
同一ナルヘキコト

右修正ヲ要スル所以ノ理由左ノ如シ

第一住居旅行ノ權及裁判管轄ニ付テハ内國臣民ト同一ノ權
利特權ヲ享有スト云フコトヲ得ヘキモ(何トナレハ内國臣
民ハ最惠ナル權利特權ノ標準ナレハナリ)此ニ反シテ軍役
若クハ軍役代辦金軍人宿營ノ免除ニ關シテハ内國臣民ト同
一ノ免除ヲ受クヘシト云フコトヲ得ス(何トナレハ此ノ事
ニ關シテハ國際法及各國ノ國法ニ於テ外國人ハ常ニ内國臣
民ノ受ケ得サル所ノ免除ヲ受クレハナリ

若シ兵役及兵役稅及軍事徵發ニ係リ外國人ニ課スルニ内國
人同一ノ規定ヲ以テセントセハ是レ國際法ニ於ケル局外中
立ノ元則ヲ敗ルノミナラス兩國ノ間ニ忽チ國法上ノ衝突ヲ
來スヘシ何トナレハ各國ノ國法ハ總テ皆本屬政府ノ特別ノ

佛領殖民地及佛國領地ニ輸入スルコトヲ得ス若シ之ヲ犯
ス時ハ船及載貨ヲ沒收シ船及載貨ノ所有者、受托者、掛
員及船長次長ニ連帶シテ三千「リール」ノ罰金ヲ科ス
第四條 外國船ハ佛國、佛領殖民地、佛國領地ニ於テ生産
又ハ製造シタル貨物、製作物商品ヲ佛國ノ一港ヨリ佛國
ノ他ノ一港ニ運輸スルヲ得ス若シ之ニ背ク者ハ第三條ニ
由リ之ヲ處罰ス

第五條 關稅率ヲ改正シ之レニ航行條例及佛國ト殖民地ト
ノ間ノ關稅ヲ廢スル所ノ命令ヲ合併ス

第六條 此命令ハ共和國ノ諸港及貿易市場ニ於テ直ニ法式
ニ從テ布告シ外務大臣ヨリ修好國ニ通知スヘシ

附屬書一三

條約改正案調查委員會文書(一三)

井上樞密官提出 議定書中ノ改正ヲ要スル件

議定書中第二款第三項ハ別テ二項トナシ左ノ如ク修正スヘ
シ

日本國ニ在留スル不利顯國臣民若クハ不利顯國ニ在留ス
ル日本國臣民ハ住居旅行ノ權竝ニ住居及商業ノ爲土地ヲ

許可ヲ得スシテ外國ノ兵役ニ服スルコトヲ禁スレハナリ
現今平均ニ内外國人ヲ待遇スルニ拘ハラス兵役及兵役稅ニ
付テハ外國人ノ爲ニ特ニ免除ヲ與フルハ各國ノ間ニ行ハル
ル通義ナリ故ニ原案ニ見エタル軍役若クハ軍役代辦金或ハ
軍人宿營ノ免除等ノ事項ニ關シテハ内國臣民ト同一ノ免除
ヲ享有スヘシトノ語ハ其ノ語ヲ成サ、ルノミナラス或ハ日
本政府ハ國際法ノ通義ニ拘ハラス内國臣民ヲ標準トシテ外
國人ヲ兵役ニ服セシムルコトヲ試ルノ疑アリ

予ハ初メ此ノ條ヲ讀テ是必文字上ノ偶然ノ不備ニ過キスシ
テ當局者ハ更ニ修正ヲ要スルニ於テ異議ナカルヘキコトヲ
信シ嘗テ外務大臣ノ注意ヲ促シタルコトアリシニ「デニソ
ン」氏ノ意見ヲ讀ムニ及テ同氏ハ新條約ノ下ニ於テハ内國
人ト同様外國人ニ兵役ヲ課スルノ利益ナルコトヲ主張スル
ヲ見初テ此ノ成文ハ獨リ文字上ノ錯誤ニ止ラサルコトヲ知
ルヲ得タリ 果シテ「デニソン」氏ノ說ク所ノ如クナレハ
原文ノ主義ハ到底對約國ト事實上重大ノ衝突ヲ來スヘシ何
トナレハ英國及其他ノ國ハ其國人カ本屬政府ノ許可ナクシ
テ外國ノ兵役ニ服スルコトヲ禁シ又ハ其ノ國籍ヲ除クヘシ
トノ法ヲ設ケ又ハ少クトモ局外中立ノ命令ニ背ク者ヲ罰ス

ルノ法アレハナリ

因ニ云若シ新タニ條約案ヲ草スルノ機會ニ際セハ兩國臣民兵役兵賦ノ事ハ之ヲ條約ノ本條ニ規定スヘシ何トナレハ此ノ事ハ領事裁判廢止ノ日ヲ俟タスシテ互ニ現行スル所ナレハナリ而シテ其條文ハ寺島伯案ノ如ク精備ナルヲ欲ス

第二ニ現稿ハ既ニ初稿ノ不動産所有ノ權ヲ刪リタルトキハ外國臣民ノ權利ハ内國臣民ト同一ニ享有ストノ一句ニ湊合スルコトヲ得サルヘシ

第三ニ原文租税ノ字重複ニ涉ルモノ、如シ蓋上ノ租税ハ裁判手數料ノ事ニ屬シ普通ノ租税ヲ云フニアラサルヘシ果シテ然ラハ其ノ英文ノ何タルニ拘ラス我カ常通ノ用語ニ從ヒ改メテ手數料トナスヘシ

更ニ注意ヲ要スルモノアリ本議定書ハ專ラ領事裁判權廢止ノ後ノ爲ニ結約スルモノナリ故ニ第二款第三項及第四項ハ共ニ第一項及第二項ノ例ニ依リ領事裁判權廢止ノ日ヨリ一句ヲ被ラシメサルヘカラス然ラサレバ第一項第二項ト其ノ文例ヲ異ニスルカ爲メニ第三項第四項ハ獨リ實行ノ期限ヲ曖昧ニ置クノ嫌アリ今第三項第四項ノ上ニ被ラシメタル一

ノ字ヲ削リ獨立ノ項ト爲サスシテ更メテ第二項ノ附屬トナシ第二項中ニ通商航海ノ事(一) 住居旅行土地借用家屋倉庫所有裁判管轄租稅徵收金ノ事(二) 軍役ノ事(三) 宗教ノ事(四) ヲ包含セシメ以テ「領事裁判廢止ノ日ナル」一句ヲ繰返スノ煩ヲ避ケ且實行期限ヲシテ條約上ニ明確ナラシムヘシ

五月二十九日

井 上 毅

附屬書一四

條約改正案調査委員會文書追補(一四)

榎本子案第十條海員逃亡ノ件ニ關スル一方案

中 田 敬 義

Seamen Deserters

“Regulated by Treaty.”—The surrender of deserter from foreign vessels, whether of war or of the merchant marine, is very generally regulated at the present day by Treaty. (The treaties in modern time which bear most analogy to the ancient treaties for the surrender of Fugitive slaves are treaties for the

Extradition of Deserters from the military or naval service of a State. It is almost the universal practice of civilised nations to conclude with one another treaties, which have the latter object in view. Twiss, Law of Nations, § 239.—No legislation was ever adopted with reference to its execution, and, being a law of the land, it was executed without any. The statutes of the United States respecting the surrender of deserting seamen apply only to seamen of those governments with which a treaty exists to that effect. The benefit of such a stipulation cannot be claimed by other governments under the most favoured nation clause.

“United States does not surrender without Treaty.”

—In the absence of a treaty it is held that the surrender of deserting seamen cannot be granted by the authorities of the United States.—On October 16, 1802, Mr. Thornton, British chargé d'affaires, complained of the refusal of the collection of customs at Norfolk, Virginia, to comply with an application of the Captain of her Majesty's frigate “Andromache”, made through the British Consul at that port, for the sur-

render of a deserter from that ship. Mr. Madison, then Secretary of State, November 9, 1802, replied, that as there was no treaty applicable to the case, and as the laws of the United States, like those of Great Britain, made no provision for the surrender of deserting seamen, the President could give no orders for their delivery.

On September 16, 1846, Mr. Pakenham, British Minister, applied for the surrender, to the first British ships which might be met with, of one Nelson, who had deserted from her Majesty's ship “Illustrious,” and taken service on board of the United States corvette “St. Mary's,” in the Gulf of Mexico, Mr. Buchanan, Secretary of State, replied that the President was without authority to deliver Nelson up; but that an order had been given that, if properly identified, he should be discharge from the service of the United States, so that he might be at liberty to return to that of her Majesty's, if he so desired.

Practice in Foreign Countries.—

Limitations of the power of the government to surrender deserting seamen, such as exist in the

United States, are not found in the laws of many other nations. Thus, in France, it is stated that desertion from the vessels, whether of war or the merchant service, is met by the expeditions remedy of the return of the delinquents to their ships, upon proofs furnished by their consuls, or, in the absence of such officials, by the commanders or masters. But in Great Britain the same general limitations exist as in the United States. On the 13th of September, 1864, while the U.S.S. "Iroquois" was lying in the Downs, three of her seamen deserted. Information of the occurrence was at once sent to the United States Consular Agent, who applied to the police authorities and had the men arrested; and an officer was sent from the "Iroquois" to receive them. On the following day the fugitives were brought before a police magistrate at Dover, and were discharged by him, on the ground that, as they had violated no law of England, there was no authority for their arrest and detention. The facts were at once communicated to Mr. Adams, United States minister, who brought them to the attention of the British Govern-

ment. Earl Russell confined his reply to the statement that "there is no law in force in this country by which these deserters could be given up." On July 11, 1864, Lord Lyons, British Minister, submitted under instructions of his government, a statement that two apprentice boys, employed on board of the British barque "Cuzco", had deserted at Valaraiso and enlisted on board of the U.S.S. "St. Mary's". Lord Lyons asked that an investigation be made and the results communicated to him. On December 14, 1864, Mr. Seward, Secretary of State, communicated the results of an investigations to Mr. Burnley, British Chargé d' Affaires, together with a statement that, in view of the action of the British Authorities in the case of the deserters from the "Iroquois", the men could not be given up.

(Moore's Extradition; Boston, 1891. Chapter XIX.)

Section 5280 of the Revised Statutes of the United States, authorizes the surrender of Deserters, (not being citizens) in pursuance of treaty stipulations.

The United States have treaty stipulations with the

following Powers, which provide for the surrender of Deserters from Men-of War as well as Merchant Vessels; Belgium; Bolivia; Colombia; Denmark; Dominican Republic; Ecuador; France; Germany; Greece; Hawaii; Hayti; Italy; Madagascar; Netherlands; Peru; Portugal; Roumania; Russia; Sweden and Norway; and Tonga.

In the following instances the treaty stipulations of the United States on the subject are limited to Deserters from Merchant Vessels:

Austria-Hungary; Salvador and Spain.

Act of Parliament 15 Vict. Cap. 26. (1852) authorizes upon conditions of reciprocity the surrender from H. B. M's Dominions, of seamen, not being slaves, who desert from foreign merchant vessels.

In pursuance of this statute Great Britain has concluded arrangement with many Powers providing for the mutual surrender of deserters from merchant vessels, but in no instance do those arrangement include deserters from Men-of-War and in fact in the absence of an enabling statute on the subject, the British Government could not include Naval

seamen in such arrangements.

May 10, 1892. T. Nakada

海國轉手

條約改正案調査委員會文書通稱(一冊)

條約改正案調査委員會文書通稱(一冊)

一六六

中 田 敏 藏

Suggestions.

In reference to the 3d Section of Draft Protocol.

1. That the Section be allowed to remain in its present form until treaty-revision negotiations reach a stage where a successful result is assured.
2. That when that point is reached, the Imperial Government, independently of such negotiations and as a voluntary and spontaneous act, announce to the Treaty-Powers, their intention of extending the Passport system.
3. That such extension be similar to that defined in the 3d Section of the Protocol, subject however to

the right of the Imperial Government to limit or suspend the system generally or in respect of designated localities in the event of public disturbances rendering it undesirable or dangerous for foreigners to visit the interior and subject also to the right on the part of the Imperial Government to refuse to grant Passports in individual cases, if in their judgment the conduct of the applicants justifies that course.

4. That at the same time the Imperial Government express their desire to charge a fee of Yen 5, for each Passport to cover the attendant cost of issue.

5. That thereupon the Imperial Government acquire the Powers of their wish to substitute in place of the present 3d Section of the Protocol, a clause providing for the continuation of the then existing system pending the abolition of Consular jurisdiction.

6. That the announcement of the qualified extension of the Passport system be made in the sense of the accompanying draft note.

7. That the Foreign Representatives be prepared for the written announcement, by previous verbal

explanations.

The advantages of this suggested course may be briefly summarized as follows:

- a) It would have less the appearance from the Japanese point of view, of being an additional concession to the Powers;
- b) It would enable the Imperial Government to introduce limitations and qualifications to the system, which would otherwise be extremely difficult;
- c) It would also enable the Imperial Government without solicity the consent of the Powers to impose a fee for the Passports issued.

附屬書一六

條約改正案調査委員會文書追補 (一六)

議定書第二條中宿兵義務、兵役及ヒ軍用捐資等ノ免除ニ關スル條款ノ説明

通商條約ハ國際公法ニ於テ確保セサル所ノ特典及ヒ免除ヲ得ルヲ以テ其主眼トス故ニ通商條約ハ國際公法ノ通則ヲ表明スルニ非スシテ却テ其例外ニ涉ル事項ヲ規定スルモノナ

リ

或ル特典ニシテ一旦國際公法ノ一原則タルコトヲ確認セラ
ルハニ於テハ此特典ハ一ツノ權利トシテ請求シ得ルヲ以テ
此事ニ關シ特ニ條約ヲ結フノ必要ナシ

或ル特典ニ付條約上ノ取極ヲ爲スノ必要アルハ即チ該特典
ノ未タ公法上一ツノ權利トシテ認めラレサルノ證ニシテ若
シ條約ヲ以テ特ニ規約スル所ナキニ於テハ該特典ハ隨意ニ
拒絕シ得ヘキモノト看做サハルナリ

條約上ノ特典ニシテ時日ノ經過スルニ隨ヒ漸ク其性質ヲ變
シテ公法上ノ權利ト認めラルハニ至リ隨テ各國此事ニ關シ
特ニ條約ヲ取結フノ必要ヲ感セサルニ至リシ例ハ尠シトセ
ス譬ヘハ彼ノ不正不當ナル外國人遺産沒收法ノ適用ヲ免レ
ンカ爲メ特ニ之ニ關シ條約上ノ取極ヲ爲スノ必要ハ最早消
滅シタリ又交戰國及ヒ局外中立國ノ權利ニ關シテハ近時公
法ニ於テ正義ニ基キ確定サレタル規則ノ存スルアレハ此事
ニ關シ殊更ニ結約スルノ必要アラサルナリ

宿兵義務、兵役及ヒ捐資ニ關スル免除ノ如キハ條約上特別
ノ規定ヲ要スル特典ニシテ未タ國際公法上ノ權利ト認めラレ
サルモノナリ故ニ日本國ノ新條約中此事ニ關シ一ツノ條款

ヲ設クヘキ必要アルナリ此條款ニハ四種ノ區別アリ

一 全然免除

二 最惠國待遇

三 國民的待遇若クハ

四 最惠國及國民的待遇

千八百八十七年四月日本委員ヨリ條約改正會議ニ提出セシ
通商航海條約ニ於テハ前記第一種ノ條約ヲ採用シタリ然ル
ニ此條約案ノ審査ヲ附託セラレタル商事調査委員ハ伊國公
使ヨリ伊國ハ伊國人ニ宿兵義務ノ免除ヲ與フルヲ得ストノ
陳述アリシヲ以テ本件ニ關スル條款ヲ削除シ更ニ左ノ如キ
互惠主義ニ非ラサル條款ヲ加ヘタリ即チ

然レトモ日本政府ハ何國臣民若クハ人民ニ對シ宿兵義務
ヲ免除スヘキコトヲ約ス

大隈伯ノ提出案ニ於テハ又此片務的條款ヲ削除シ其他ノ點
ニ於テハ商事調査委員カ本件ニ關シ有セシ所ノ意見ヲ採用
セリ千八百八十九年ノ英國提出案ハ該商事調査委員ノ立案
ニ係ル宿兵義務ニ關スル片務的條款ヲ再興シタリ次テ千八
百九十年英國力新案ヲ提出スルニ及ンデ凡テ取極ヲ要スヘ
キ事項ハ宿兵義務、兵役及ヒ捐資ト共ニ議定書ニ編入シテ

之ヲ定メタリ而シテ宿兵義務、兵役及ヒ捐資ノ事ニ關シテハ最惠國及ヒ國民的待遇ノ主義ヲ採用セリ近世ノ通商條約ヲ惠覽スルトキハ本件ニ關スル取極ハ殆ント一般ニ全然免除主義ヲ執ルコトヲ見ルヘシ大不願國ノ締結セシ條約ニ於テハ殊ニ然リトス

最惠國條款ハ之ヲ適用スルノ根據タルヘキ條款ノ存立スルトキハ即チ全然免除ノ結果ヲ生スヘシ然レトモ斯ル條款ノ存立セサルニ於テハ實際何等ノ効益ヲ與フルコトナシ設令ヘハ大不願國ハ其現行ノ諸條約ニ於テ此問題ニ關シ全然免除主義ノ取極ヲナシタルヲ以テ日本國ハ英國ノ提出セシ最惠國條款ニ依リ全然免除ヲ受クルヲ得ヘシ之ニ反シテ日本國ハ現ニ宿兵義務、兵役、捐資ノ問題ニ關シ特別ノ取極ヲ設ケス又新條約ニ於テモ今日ノ所ニテハ如此取極ヲ設クルノ意ナキヲ以テ日本國ニアル英國國民ハ國民的待遇ヲ受クルヲ以テ満足セサルヘカラサルナリ

故ニ該條文ヲ其儘ニ採用スルトキハ大不願國ニアル日本國國民ハ宿兵義務、兵役及ヒ捐資ノ免除ヲ受クルヲ得レトモ日本國ニ於ケル英國國民ハ日本國國民ト同様ノ免除ヲ受ケ得ルニ過キサルナリ

國產ト看做スヘキモノヲ船積スルコト、此等ノ貨物ヲ同國ノ他港ヘ海上ニテ運送スルコト、及ヒ斯ク船積及ヒ運送セシ貨物ヲ諸港ニ於テ荷卸シスルコト是レナリ(參考「佛國稅關法」第四百十六條及ヒ第四百二十一條千八百七十八年ノ「合衆國改定法令」第四百三十七條「海濱並ニ國境稅關通規」千八百八十五年ノ「墨西哥沿海貿易法」ノ第二百四十三條)

此定義ニ依レハ沿海貿易ノ要ハ沿海運搬ニ係ル物品ヲ一國內ニ於テ船積シ及ヒ荷卸スルニ在ルヲ以テ一國內ノ數港ニ於テ輸出品ヲ蒐集シ又ハ輸入品ヲ分配スルカ如キハ固ヨリ沿海貿易ノ範圍ニ屬セサルナリ故ニ內國船ニ限リ沿海貿易ノ權ヲ與フル國ト雖トモ斯ル作業ハ尙ホ之ヲ外國船ニ許セ

リ
運送ハ即チ「沿海貿易」ノ要素ナリ而シテ沿海貿易ニ與カル權利トハ單ニ貨物ノ沿海運搬ノ爲メ船舶ヲ使用シ得ルコトヲ謂フノミ故ニ諸條約ニ「沿海貿易」ハ內國人民ニ專屬ストノ明文ヲ掲クルハ即チ沿海貿易ハ內國船ノ事業ニシテ外國船ハ之ニ與カルコトヲ得スト云フニ過キス

商人カ一國內ノ或ル開港ヨリ他ノ開港ニ其商品ヲ輸送スル

該條款ヲ立案シ其責任ヲ有スル人ニハ前陳ノ如キ結果ニ至ルヘキコトヲ豫想セサリシハ固ヨリ言ヲ待タサレトモ去リトテ日本國ハ本件ニ關シ實際ノ結果如何ヲ明示スルノ義務ヲ有セサルナリ

今日ニ當リ該條款ヲ修正セントスルハ正シク該條款ノ缺點ニ注意セシムルモノニシテ遂ニ英國政府ヲシテ該案ノ全體ヲ再考セシムルニ至ルヤ疑ナシ

該條款ヲ現體ノ儘ニ存シ置クハ實ニ日本ノ利益ナルノミナラス條約改正ノ速成ヲ計ルノ良策タルコトハ實ニ明白ナリトス

千八百九十二年六月七日

エツチ・ダブリュ・デニソン

附屬書一七

條約改正案調査委員會文書追補(一七)

日本沿海貿易ニ關スル諸條約國ノ權利

近世「沿海貿易」ト稱スルハ即チ

國ノ一港ニ其生産物若クハ製造品又ハ外國ノ物品ニシテ消費庫入若クハ船移シノ爲メ正當ノ手續ヲ經テ輸入シ内

ノ權利ヲ有スルコトハ固ヨリ論ヲ俟タサルナリ何ントナレハ此權利ハ該商人ノ通商權ニ附着スル要件ニシテ何國ニ於テモ商人ノ國籍如何ニ關係スルモノニ非ス故ニ法律又ハ條約中ニ特別ノ明文ナキ場合ニハ橫濱ノ外國商人カ其商品ヲ神戸ヘ輸送スルノ權利ヲ有スルハ英國或ハ合衆國ニ於ケル外國商人カ倫敦ヨリリウヴァプールマテ或ハボストンヨリ新約克マテ其商品ヲ輸送スル權利アルト毫モ異ナル所ナシ此權利ニ關シテハ唯一ノ制限(內國商人ニ對シテモ均シク効力ヲ有スルモノ)ヲ認ムルノミ即チ其輸送ノ方法ニ關スル制限是レナリ而シテ若シ法律又ハ條約中ニ反對ノ明文ナキトキハ一國內ニ於ケル外國人ハ其國ノ諸港間ニ往來シ商品ノ運搬ニ從事スル船舶ニテ其貨物ヲ沿海ニ諸港輸送スルノ權利ヲ有スルモノトス

日瑣條約第九條ハ奧洲國ノ人民カ其正當ニ輸入セシ商品ヲ諸開港ニ輸送スル權利ヲ規定シ又タ同條約ノ第十一條ニハ「奧地利及洪噶利人民日本國ノ開港場ニ於テ買入レタル日本產物ヲ日本他ノ開港場ニ諸稅ノ拂フ事ナク輸送スル事勝手タル可シ」云々ノ明文アリ

一ノ開港場ヨリ他ノ開港場ニ商品ヲ輸送スルノ權利ハ設令

ヒ前掲二箇條ノ明文ナシトスルモ既ニ該條約第三條ニ規定セル通商權ニ附帶シテ存立スルモノト看做シテ不可ナキカ如シ然レトモ前掲諸條約ノ明文アル以上ハ此點ニ付論議スルノ要ナシ因テ之ヨリ論究スヘキ問題ハ唯タ前述ノ如キ商品ヲ沿海諸港間ニ輸送スル方法ノ當否如何ニ在ルノミ日壤條約ノ第十三條(千八百六十六年改稅約書第十條ヲ確認ス)ニハ「總テ日本人ハ日本產物又ハ外國產物ヲ日本開港場ヘ或ハ日本ノ開港場ヨリ或ハ日本開港場ノ間ニ或ハ他國ノ港ヨリ或ハ他國ノ港ヘ日本人民或ハ他國地利及ヒ洪噶利人民所持ノ船ニ積入輸送スル事勝手タル可シ」トノ明文アリ故ニ外國船ハ此程度マテハ即チ日本人ノ商品ヲ運搬スル限リハ條約ノ明文ニ依リ沿海貿易ニ與カル可キ權利ヲ有スルモノナリ何トナレハ日本人カ外國船ニ商品ヲ積入ル權利ヲ得タル以上ハ外國船モ亦タ其積入レタル商品ヲ運搬スル權利ヲ有セサルヲ得サレハナリ

外國人民ハ日本人ト同様ニ諸開港間ニ商品ヲ輸送スル權利ヲ有スルノミナラス其運搬法ニ關シテハ何等ノ制限ナク且ツ外國船ト日本船トハ諸開港間ノ貿易ニ關シテハ條約上全ク同等ノ位置ニ立ツモノナレハ外國人カ開港場間ニ其貨物

ヲ輸送スル爲メ日本船ヲ用フルト同様ニ外國船ヲ用フルノ權利アルコトハ固ヨリ至當ト認メサルヲ得ス外國船ノ持主ハ其商品ヲ諸開港間ニ輸送スルコトニ就キ條約上無制限ノ權利ヲ有シ且ツ其所有船ニテ日本人ノ爲メ諸貨物ヲ運搬スル權利アルニ拘ハラス自個ノ商品ニ限り其所有船ニテ運搬スルヲ得スト主張スルハ實ニ前掲諸條款ニ對シ牽強附會ノ解釋ヲ付スルモノト謂ハサルヲ得サルナリ然レトモ若シ外國人ハ外國船ニテ諸開港間ニ其商品ヲ輸送スルコトヲ得ストノ說ヲ固執スルトキハ則チ右ノ如キ解釋ヲ付スルノ外ナカルヘシ

若シ條約ノ文面ヨリ推テ斯ル立論モ其理ナキニ非スト爲サハ左ノ如キ解釋モ亦タ其當ヲ得タルモノト看做スコトヲ得ヘシ即チ運搬ノ方法ニ關シテハ條約中ニ明文ナキヲ以テ外國人ハ其商品ノ沿海運搬ノ爲メ日本船ノ便ヲモ藉ルヲ得スト謂フコト是レナリ然ルニ此解釋ハ權利享有ノ方便ヲ拒絕シ以テ現ニ條約ノ附與スル特權ヲ無効ニ歸セシムルモノナリ

日本開港ノ時ヨリ外國船ハ諸開港場間ニ於テ自由ニ沿海貿易ニ從事セリ而シテ此慣例ハ廿五年餘モ繼續シ日本政府ニ

於テモ決シテ異議ヲ唱ヘシコトナク且ツ内國船トノ競争ニ依ルノ外更ニ妨礙ヲ受ケシコトナシ是ニ由テ之ヲ觀レハ外國船ハ諸開港場間ニ於ケル貨物運搬ニ限り沿海貿易ニ從事スル權利ヲ有スルモノト認メサルヲ得ス又日本政府カ今日マテ是認セシ所ノ見解モ亦此趣意ニ外ナラサルヘシ

本件ニ就キ注意スヘキハ即チ外國船ニ沿海貿易ヲ拒絕セント欲スルトキハ通商條約中ニ特ニ其明文ヲ掲クルヲ常トスルコト是レナリ然ルニ日本ノ諸條約ハ千八百七十八年合衆國ト締結セシモノヲ除クノ外ハ斯ル制限ヲ設クルモノナシ而シテ日本合衆國間ノ該條約ハ未タ實施セシコトナシ

外國船ハ諸開港場間ニ於ケル運送業ニ從事スル權利ヲ有スルモノナリ而シテ此見解ノ誤ナキヲ證センカ爲メ千八百六十七年ニ於テ東京橫濱間ニ外國ノ荷船引船及ヒ客船ノ往復營業ヲ規定セシ取極及ヒ千八百六十八年一月ニ於テ大阪兵庫間ニ同様ノ營業ヲ認許セシ取極ヲ引證スルヲ得ヘシ即チ東京及ヒ大阪ハ固ヨリ外國船ノ出入シ得ヘキ開港場ニ非ラサルナリ故ニ若シ諸開港場間ニ沿海貿易ヲ營ムコトヲ外國船ニ許サ、ルモノトセハ日本政府ハ該貿易ニ付右ノ如キ特權ノ擴張ヲ承諾スル筈ナシ

千八百七十三年日本合衆國間ニ締結セシ郵便交換條約ノ第五條ハ諸條約國人民ノ所有スル船舶カ日本ノ開港場間ニ運送業ヲ營ムコトニ關シ日本政府ニ於テ會テ異議ヲ唱ヘシコトナシトノ事實ヲ一層明確ナラシムルモノナリ即チ該箇條ハ合衆國ノ郵便船カ日本ノ諸開港場間ニ往來シ得ルコトヲ明ニ承認スルモノナリ況ンヤ現今ニ至テモ外國船ハ尙ホ日本稅關ノ承認ヲ經且ツ其補助ヲ以テ沿海貿易ニ從事シツ、アルニ非ラスヤ

開港場間ニ於ケル外國船沿海貿易ノ問題ハ目下條約改正案ニ關聯シテ發セシ者ナリ現今審議中ナル改正案ハ該特權ヲ橫濱神戸及ヒ長崎ノ三開港場ニ制限シ且ツ斯ク制限セシ特權ノ繼續スヘキ時期ヲ設定シ之ヲ新條約實施ノ日ヨリ向フ六ヶ年トセリ

沿海貿易ニ關シテ外國船カ目下享有スル特權ハ從來多年間故障ナク繼續セシカ爲メ殆ント犯スヘカラサル者トナリタルヲ以テ日本政府ニ於テハ最早今日ニ至リ新條約ノ規定ニ依ルノ外ハ之ヲ撤回スルコトヲ謀ルヘシトハ思ハレサルナリ因テ徒ラニ理論上ヨリ本問題ヲ議スルハ頗ル其當ヲ失シタリト謂ハサルヲ得ス何トナレハ是レ一方ニ於テハ條約改

正ニ由リ日本ニ生スヘキ實利實益ヲ不明ニシ又他ノ一方ニ於テハ條約改正ノ事業ニ關シ確乎タル處置ヲ施スコトヲ遲延セシムル傾キアルヘンナリ

本問題ノ終結ヲ見ミテ欲セン宜シク條約改正ノ事業ヲ迅速ナラシメ隨テ日本カ全ク諸條約ニ關係セシメテ其沿海貿易ヲ規定シ又必要ノ場合ニハソノ外國ノ船舶ヘシテ專有セシムルノ權利ヲ有スルキ設備ハ速ニ完成セシムルコトヲ期スベクシ

ハ ャ ナ

(右開文)

The Coasting Trade of Japan

and the extent to which Foreign Powers have by Treaty acquired the right to participate therein.

The term "Coasting Trade" in its modern acceptation, means:

The shipment at one port of a country, of goods of national growth, produce or manufacture or of goods of foreign origin which have become nationalized by being duly imported either for consumption, ware-housing or transshipment; the transportation by water of such goods to another port of the same country, and the discharge thereas of the

goods so shipped and transported (see "Tarif Official des Douanes de France " Articles 415 and 421; " Revised Status of the United States " 1878-4347; also " General Ordinance of Maritime and Fronties Custom Houses "; of "Coasting Trade of Mexico " 1885 Article 243.)

This definition, by making the shipment and discharge within the same country, of goods conveyed coastwise, an essential part of the "Coasting Trade", excludes the operation of gathering exports and distributing imports at several ports of the same country. This specie of trade, for which no phrase exists, is permitted to foreign vessels even by countries that reserve the "Coasting Trade" exclusively to national vessels.

"Transportation" is the essence of the "Coasting Trade", and the right to participate therein implies nothing more than the right to employ vessels for the conveyance of goods coastwise. Hence, the declaration, which frequently appears in treaties, that a country reserves the "Coasting Trade" to itself, has no other significance, except that the "Coasting

Trade" is reserved to national vessels and that foreign vessels are not permitted to participate therein.

The right of a merchant to send his merchandise from one open port of the same country, is unquestioned and unquestionable, because that right is an essential attribute of the right to engage in trade and in no country is the right dependent upon nationality. Without any express provision of law or treaty, therefore, a foreign merchant in Yokohama, enjoys the same right to send his wares to Kobe, as does a foreign merchant in England or the United States, to ship his goods from London to Liverpool, or from Boston to New York. The only recognized limitation or qualification of that right—a limitation or qualification which applies with equal force to native dealers everywhere—relates to the means of conveyance. And unless the contrary is expressly provided by law or treaty, all foreign merchant in a given country are entitled to avail themselves, for the purpose of moving their goods coastwise, of every vessel that may lawfully ply between the several ports of the country for the transportation of merchandize.

Article IX of the Austro-Hungarian Treaty, secures to Austro-Hungarian citizens the right to ship coastwise, merchandize duly imported by them. While Art. XI of the same Treaty provides that "citizens of the Austro-Hungarian Empire shall be at liberty to ship all kinds of Japanese produce bought in one of the open ports in Japan to another open port in Japan....."

It cannot be doubted but what, in the absence of the foregoing stipulations, the right ship at merchandize coastwise from open port to open port, would have existed as an essential element of the right to trade which is expressly guaranteed by Art. III of the Treaty and which was equally accorded in the earlier Treaties. Nevertheless, these provisions place the right beyond dispute, and it consequently only remains to discuss the question of the means by which such merchandize may be lawfully shipped coastwise.

Article XIII, of the Austro-Hungarian Treaty (which is in confirmation of Article X of the Tariff convention of 1866) provides, that "all Japanese subjects may ship goods of Japanese or foreign origin to, from, or between the open ports in Japan, or from or to fore-

ign ports, wither in vessels owned by Japanese or by citizens of the Austro-Hungarian Monarchy."

To this extent, therefore, are foreign vessels expressly authorized by treaty, to engage in the "Coasting Trade." For the granting of the right to Japanese to ship their merchandise in foreign vessels, carries with it, necessarily, the correlative right on the part of foreign vessels, to transport the merchandise so shipped.

Foreigners having the right, equally with Japanese, to ship their merchandise coastwise and no limitation or qualification being imposed as to the means of conveyance, and foreign and Japanese vessels being placed by treaty upon exactly the same footing so far as the inter-open port trade is concerned, it follows necessarily that foreigners are entitled to avail themselves of foreign bottoms, just as much as they are of Japanese ships, for the purpose of moving their goods between the open ports.

It would indeed be a strained interpretation of the Conventional stipulations which have been referred to, to hold that the owner of a foreign vessel, who

has by treaty the general and unqualified right to send his goods coastwise, is debarred from making use of his own vessel for the purpose, when such vessel is entitled to transport in the same direction, similar goods to other persons. Nevertheless, such would have to be the construction if it were maintained that foreigners are not entitled to ship their merchandise coastwise in foreign vessels.

If upon the general wording of the Treaty, this latter contention were tenable, it might with equal reason be held that as the treaties are silent as to means of conveyance, Japanese vessels are not available for the shipment of merchandise coastwise by foreigners, and thus by denying the means of enjoyment, an express privilege accorded by Treaty, might be virtually cancelled.

Foreign vessels have, in fact, ever since Japan was opened to foreign commerce, freely taken part in the "Coasting Trade" between the several open ports of the empire. This practice, which have prevailed for more than a quarter of a century; which has never been contested by the Japanese Government, and

which has been enjoyed without interruption or diminution, saving such interruption and diminution as has resulted from the competition of Japanese vessels, justifies the claim that to the limited extent of transporting goods between the several ports of the Empire, foreign vessels have the right to participate in the "Coasting Trade" of Japan, and it warrants the assertion also that Japan has up to the present time, interpreted her engagement on the subject in that sense. In this connection it is worthy of remark that it is usual in commercial treaties to expressly reserve the "Coasting Trade" when it is desired to exclude foreign vessels therefrom. No such reservation appeared in any of Japan's international engagements, excepting the Treaty of 1878 with the United States and that compact still remains in obedience.

In support of the contention, that foreign vessels are entitled to engage generally in the inter-open port carrying trade, reference may, very properly, be made to the Arrangement of 1867, establishing a foreign cargo, tow and passenger boat service, between Tokyo and Yokohama, and to a similar Arrangement con-

cluded in January 1868, establishing a similar service between Osaka and Hiogo, Tokyo and Osaka. it should be remembered, are not open ports so far as foreign vessels are concerned, and consequently it an hardly be believed that the Japanese Government would have given their consent to this extension of the privilege of the "Coasting Trade" between the several open ports.

Article V of the Postal Convention of 1873 between Japan and the United States may also be appealed to in support of the contention that the Japanese Government have never questioned the right of vessels belonging to the subjects and citizens of the Treaty Powers, to engage in the inter-open port carrying trade. That Article clearly recognizes the right of the United States Mail Packets to ply between the open port of Japan. And perhaps a still stronger circumstance in favor of the same contention is the fact that foreign vessels are still actually engaged in that Trade with the knowledge, consent and assistance of the Imperial Customs.

Finally, it is understood that this issue, concerning

the right of foreign vessels to engage in the "Coasting Trade" between the open ports, is now raised in connection with the proposed revision of the treaties. The proposals now under the consideration, limit the privilege to the three open ports of Yokohama, Kobe and Nagasaki and they also fix the period during which this circumscribed privilege is to be enjoyed, to six years from the date the new Treaties take effect.

Sanctified, as it has been, by long years of peaceful and uninterrupted enjoyment, it is not likely that the Japanese Government will at his late day attempt, except in virtue of new Treaty stipulations, to withdraw from foreign vessels, the privilege which they now enjoy in connection with the "Coasting Trade." In the light of this fact the discussion of the abstract proposition, is, at least, inopportune. For such issues obscure, on the one hand, the real and substantial advantages which would accrue to Japan from the proposed revision of the Treaties, while, on the other, they tend to delay definitive action in the matter of Treaty-Revision.

The practical solution of the question, is to hasten the work of treaty-revision and thus to hasten the day when Japan may justly claim the right, independently of the Powers, to regulate and, if need be, to reserve to national vessels, her "Coasting Trade."

Respectfully submitted
H. W. Denison.

附屬書一八

條約改正條調查委員會文書追補 (一一八)

ハテルノストロー氏意見書

- 1 對等條約ト非對等條約ニ關スル件
- 2 海關稅目ニ關スル件
- 3 沿海貿易ニ關スル件
- 1 國際公法上ヨリ見解ヲ下シタル對等條約ト非對等條約ニ關スル件

最初「グロシユス」(和蘭國有名人)カ首唱シ「ワッテル」(瑞典國有名人)カ紹述シ後チ數名ノ國際法(萬國公法ノ新名稱ナリ)學者カ修正ヲ加ヘタル對等及ヒ非對等條約ノ說ハ邦國間通常ノ關係ヲ學理的ニ解説スル爲メニ設ケタル一ノ類別ニシテ實

際上大ナル價值ヲ有セスト雖モ類別ノ點ヨリ或邦國間ノ關係ニ當嵌マルコトナキニ非ス

抑締約國一方ノ固有權ノ上ニ於テ對等ナラサル條約ノ如キハ其繼續ヲ全フスルコトヲ保シ難シ何トナレハ一旦其國力ニ異動ヲ生スルトキハ忽チ其滅殺セラレシ權利ノ恢復ヲ圖ルニ至ルヘケレハナリ然レトモ其非對等條約ノ締結ヲ爲サシメタル當時ノ國勢ニシテ尙ホ依然左續スル間ハ其條約モ亦隨テ左續スルカ故ニ其非對等ナル點ヲ擧テ以テ其條約ノ効力ノ有無及ヒ其條約ニ遵由スヘキ義務ノ有無ニ論スルモ實際何等ノ効驗ヲ奏セサルヘシ

苟モ條約ニシテ邦國固有權ノ上ニ於テ對等ヲ失ハサルトキハ假令義務讓與等ノ上ニ於テ非對等ナルモ決シテ其邦國ノ獨立權及ヒ對等權ヲ侵害シタルモノニ非サルナリ最モ勢力アル國ト雖トモ實益上或ハ商業上自己ニ利アリト認ムルトキハ報酬ヨリモ多キ讓與ヲ一方ニ許シ所謂義務讓與ノ點ニ於テ非對等ナル條約ヲ締結スルコトアリ

單ニ法理上ヨリ言フトキハ強國カ威力ヲ以テ強ヒテ弱國ニ承諾セシメタル條約ノ如キハ非對等條約ト云フヘキモノニシテ如此條約ハ決シテ對等ノ邦國間ニ在リテハ承諾スヘカ

ラサルモノトス即チ強國カ全ク其利益トナルヘキコトノミヲ謀リ威力ヲ逞フシテ凌辱且ツ過酷ナル負擔ヲ弱國ニ課スル條約ノ如キ是ナリ

要之條約ヲ論スルニ當リテ完全ナル對等ヲ説クハ到底言フヘクシテ行フヘカラサルノコトタリ凡ソ條約ノ條款ニ付テハ唯タ比較的對等ナルコトヲ論シ得ヘキノミ締約國雙方ノ利益カ相互同一ノ讓與ニ歸着セサル場合ニハ條約全體ノ條款ヲ以テ比較ヲ立テ其割合ヲ平均スルノ外他ニ道ナキナリ何トナレハ雙方同一ノ事項ニ付一々其割合ノ平均ヲ得ルコト能ハサレハナリ即チ條約ナルモノハ雙方各々其最モ自國ノ爲メニ必要ナリト認ムル利益ヲ得ルコトヲ要求シ其報酬トシテ他ノ一方ニ於テ又最モ必要トスル利益ヲ讓與シ以テ始メテ締結スルコトヲ得ヘキナリ之ヲ外ニシテ條約締結ノ道ヲ求ムルモ豈得ヘケンヤ

以上所述ノ適例ハ今日日本國ト諸外國トノ間ニ存在スル條約ニ於テ之ヲ見ルコトヲ得ヘシ現行條約ヲ改正セントスルニ當リ若シ諸外國ニ於テ日本國カ既ニ憲法ヲ有シ裁判所ヲ構成シ法律ノ備ハルニモ拘ハラス現行條約ヲ締結シタル當時ノ事體上ニ必要ナリシ日本國司法權ノ制限ヲ今尙ホ左續

センコトヲ強ヒテ要求スルニ於テハ邦國固有ノ權ノ上ニ於テ非對等ナル條約ヲ固持セントスルモノナリ何トナレハ國家ノ主權ニ制限ヲ置クコトヲ要求スルハ一邦國ノ固有ノ權ヲ侵害セントスルモノニシテ他ノ諸國ニ於テモ之ト同一ノ制限ヲ置クコトヲ承諾セサルニ於テハ對等ト謂フコトヲ得サレハナリ

然レトモ或ハ曰ハシテ諸外國政府ハ日本國ト締結セル條約ニ於テ其固有ノ權ヲ侵害セラレタリ何トナレハ諸外國政府ハ其臣民ヲシテ日本臣民カ諸外國内ニ於テ享有スルト同一ノ權利ヲ日本國內ニ於テ享有セシメタルコトナケレハナリト余輩ハ之ニ答テ云ハシテ然ラサルナリ外國政府ハ日本ト條約ヲ結フノ利益ヲ有シタルニ依リ其當時ノ事體ニ照シテ最モ適當ト認メタル方法ニ依リテ之ヲ締結スルコトヲ承諾シタルニ外ナラス

然ルニ今日ニテハ國勢一變セルヲ以テ今後日本國ト諸外國トハ條約上互ニ享有スヘキ利益ノ割合モ普通ノ標準ニ基キ之ヲ規定スルコトヲ得ヘシ

總テ他ニ讓與ヲ爲スコトヲ承諾スルニハ他ノ強制ヲ受ケサルコト成ルヘク利益享有ノ割合ヲ適當ニスルコト及ヒ比較

通商上ニ於テハ非對等條約ナルモノナシト雖トモ締約國雙方ノ利益ニシテ比較上多少ノ差異アル條約ナキニアラス但シ其讓與ノ多キニ比シテ收益少ナキノ故ヲ以テ直チニ之ヲ非對等條約ナリト云フコトヲ得ス

以上述フル所ハ對等及ヒ非對等條約ノ説ヲ敷衍シタルモノナリ右ハ極メテ簡易ナル問題ナレハ尙ホ此上ニ反覆辯論スルヲ要セサルヘシト思考ス

2 海關稅ニ關スル件(諸書ヨリ拔萃シタル義解ヲ左ニ陳ス)

稅關事務中ニ稅目(タリフ)ト稱スルハ即チ稅關ニ於テ輸出入ニ課稅スルトコロノ商品又ハ食料品及ヒ其課稅率ヲ記載セル表又ハ簿冊ヲ云フナリ

稅目索引(レベルトワール)トハ通商上常用ノ貨物名稱ヲ「イロハ」ノ順序ニヨリ列記セル表簿ヲ云フ

稅目索引ハ何貨物ハ何類ニ屬スルヤ及ヒ之ニ對スル課稅額ハ稅目表ノ幾葉ニ載在スルヤヲ示シ此外稅目表中特ニ記載ナキ貨物アルトキ其貨物ノ何種ノ品ト看做スヘキヤヲ認定シタル後之ニ適用スヘキ稅目ヲ指定スルノ用ニ供スルモノトス

的對等ノコトニ付前ニ述ヘシ所ノモノハ之ヲ通商條約ニ適用スルトキハ益々明晰ナルヘシ

抑モ通商條約ヲ論スルニ當リテ完全ナル關稅權ヲ説クハ是亦言フヘクシテ行フヘカラサルノコトタリ

通商條約ヲ締結スルニ當テハ相互讓與ノ間ニ於テ締約國雙方ノ利益ノ割合ヲ可成相當ニ定ムルコトヲ討究スヘキモノニシテ關稅權ノ問題ニ論及スルヲ要セサルナリ夫レ條約ナルモノハ彼ノ我ニ許與シ得ル所ノモノト我ノ彼ヨリ享有セント欲スル所ノモノヲ換言スレハ我ノ彼ニ讓與セサルヲ得サルモノト讓與スルヲ望マサルモノトヲ調和スルモノナリトノコトヲ知ラサルニ於テハ決シテ之ヲ締結スルコトヲ得サルモノトス

大凡各邦國ニ於テ各自有益ナル通商條約ヲ締結セント欲セハ宜シク雙方共各々自己ノ首要ナル利益ノ對手カ享有セント欲スル首要ナル利益、萬國交通上ニ於ケル自國實際ノ位置、彼我互ニ承諾シ得ヘキ制限等ニ着目スヘシ而シテ一國カ其經濟上ノ權衡ヲ害スルニアラサレハ他ノ一方ニ満足ヲ與フルコト能ハサルカ如キ讓與ヲ最惠國條款ヲ利用シテ要求スヘキモノニ非サルナリ

普通稅目(タリフ、ゼネラル)或ハ國定稅目(タリフ、オートノム)トハ一國關稅賦課ノ基本トナリ總テノ外國ヨリ輸入スルトコロノ貨物ニ課スル稅目ヲ云フ但シ通商條約ヲ以テ稅目ヲ特定シタル國ヨリ輸入スル貨物ニ對シテハ此限ニ在ラス

特約稅目(タリフ、コンワンシヨネル)トハ即チ諸外國ト締結セル通商條約ニ於テ規定セル稅目ニシテ普通稅目ノ除外例ヲ云フ而シテ特約稅目ハ之ヲ適用スル邦國ニ對シテハ普通稅目ノ適用ヲ中止スト雖モ其効力ヲ全廢スルモノニアラス

通商條約ニハ特約稅目ヲ附スルヲ以テ通例トスレトモ時ニハ又之ヲ附セサルコトアリ

即チ或ル場合ニ於テハ兩國互ニ現行普通稅目ヲ適用シ將來互ニ之ヲ増加セサルコト及ヒ異日他國ニ對シ減稅スル場合ニハ最惠國條款ニ依リ均霑スヘキ旨ヲ單ニ約定スルコトアリ又或ル場合ニハ兩締盟國ニ於テ單ニ其一方ノ爲メニ特約稅目ヲ規定シ他ノ一方ハ其對約國現行普通稅目ニ遵由シ只タ將來對約國ヲシテ自國ニ對シ其稅率ヲ増加セシメサルコト及ヒ異日他國ニ對シ減稅スル場合ニハ最惠國條款ニ依リ

均霑セシムヘキコトヲ約定スルコトアリ又或ル場合ニ於テハ兩國間互ニ普通通税目ニ據ラス又特約税目ヲ定メス單ニ相互ノ貨物ニ對スル關稅ノ賦課ニ關シテハ悉ク最惠國同様に待遇ヲ受クヘキコトヲ約定スルニ止マルコトアリ即チ其一例ヲ舉クレハ千八百八十三年六月十五日伊英兩國間ニ締結セシ條約(其第二條第三)ノ如キ是ナリ此條約ニ據レハ英伊兩國ノ一方ニ於テ若シ稅額ヲ増課シ或ハ新稅目ヲ設クルコトアルモ其增稅及ヒ新稅ニシテ總テ他外國ニ對シ均一ニ適用セラルルニ於テハ英伊兩國ノ一方ハ之ニ對シ單議ヲ唱フルコトヲ得ス又英伊兩國ノ一方ニ於テ相互ノ貨物ニ對シ其一方ノ稅率ヨリ多額ノ稅ヲ課スルモ其一方カ他外國ニ對シ之ヨリ少額ノ稅目ヲ締約スルコトナキニ於テハ英伊兩國互ニ單議ヲ容ル、コト能ハサルナリ英伊兩國互ニ特約稅目ヲ約定セサル所以ハ英國ニ在リテハ現今歐洲各國ニ於テ保護主義ノ說盛ニ行ハル、ト雖モ各國間尙ホ多クハ特約稅目ヲ規定スルヲ以テ妄リコニ稅率ノ増加ヲ來ス恐レナク且ツ尙後伊國カ他外國ニ對シ減稅スルコトアルトキハ因テ以テ己ヲ利セントノ目的アレハナリ又伊國ニ在テハ千八百六十年英國ニ於テ自由貿易派勝ヲ制セシ以來僅少ノ貨物即チ烟草

總テノ貨物ニハ普通通税目中輸入稅率ノ百分ノ五十マテ(五割)ノ增稅ヲ課スルコトアルヘシ若シ其貨物ニシテ免稅品ナル時ハ公認評價ノ百分ノ二十五(二割五分)ノ稅ヲ課スヘシ此規定ハ勅令ヲ以テ施行シ其勅令ハ課稅ヲ要スル貨物名稱并ニ其稅率ヲ指定スヘシ此勅令ハ速カニ議會ニ提出シテ法律ニ更改スヘシト

若シ前述ノ如ク特別稅目ヲ施行スルノ極度彼我兩國政府間互ニ忌嫌ノ情ヲ逞フシ遂ニ關稅上絶ヘス競爭ヲナスコトアルニ至テハ兩國人民ノ不幸之ヨリ大ナルハナシ

要之若シ茲ニ一國アリ保護主義ヲ離レタル普通通税目ヲ制定シ他國ニ於テ保護主義ノ謬ニ陷キリシニモ拘ラス其普通通税目ニ變更ヲ加フルコトナカラシメハ或ハ特約稅目ヲ設クルノ必要ナカルヘシト雖トモ方今ノ情勢上ニ就テ見ルトキハ單ニ普通通税目ノミヲ以テ各國通商上ノ關係ヲ規定セントスルハ蓋シ最モ難キコトナリ其證タルヤ邦國ニシテ始メハ普通通税目ニ據ルモ他國ト締結スル最惠國條款ニ依リテ漸々其稅率ニ變更ヲ來タシ遂ニハ變シテ特約稅目トナルコト十中八九ニ居レリ

3 沿海貿易ニ關スル件

榎本外務大臣時代 四〇一 附一七

及ヒ酒精類(烟草稅最モ多シ)ニ對シ輸入稅ヲ賦課シ其他些少ノ貨物(伊國製葡萄酒ヲモ含ム)ニ課稅スルコトアルモ其額極メテ輕廉ナレハ自國ノ貿易ニ障礙ヲ來スヘキ程ノコトナキヲ知ルト且ツ英國ニ於テハ關稅法ニ激變ヲ生スルコト極メテ稀レニ又他國ト關稅上ノ競爭ヲナスコトナキカ爲ニ外國貿易ニ向テ毫モ異變ヲ起スコトナキヲ信スレハナリ

通商條約ヲ有セサル國ニ對シ或ハ普通通税目ニ據ラスシテ特別稅目(タリフ、デフエランシエル)ヲ適用スルコトアリ而シテ此稅目ハ通商條約ヲ有サル國ノ貨物ニ課スル稅率ヨリ最多額ノ稅額ヲ課スルモノナリ法理上ニ於テハ總テ邦國ハ通商條約ヲ有セサル國ニ對シテ特別稅目ヲ施行スルコトヲ得ヘシト雖トモ實際上ニ於テハ之ヲ施行スルハ反テ其國ノ貿易ニ利益ヲ與フルコト少ナシ殊ニ通商條約ヲ有セサル國ニ於テ我ニ對シ特別稅目ヲ施行セサルニ我ヨリ其國ニ對シ之ヲ施行スルモ何ノ益カアラン特別稅目ハ時トシテハ極端ニ走テ復讐的課稅トナルコトアリ茲ニ其一例ヲ舉クレハ伊國改正關稅法第十一條ノ如キ是ナリ其條ニ曰ク伊國ノ船舶及ヒ貨物ニ特別稅目ヲ適用スル邦國ヨリ伊國ニ輸入スル

余輩カ茲ニ論述セント欲スルモノハ船舶所有主并ニ船長ノ資格、船舶ノ容積等ヲ規定セル内國法律ノ下ニ屬スル沿岸航、沿岸短航及ヒ沿岸小船舶航行ニ在ラスシテ通商條約ノ下ニ屬スル沿海貿易(即チ一國ノ法律ヲ遵守シテ其國甲海(假令ハ日本海)ニ在ル諸港間ニ回航スルト甲海ト乙海(假令ハ太平洋)トニ在ル諸港間ニ回航スルトヲ問ハス總テ一國ノ海岸ニ沿フテ其國ニ屬スル所ノ諸港間ヲ往復スル所ノ航海)ニ在リ

自國臣民ニ限リ沿海貿易ヲ許スノ國多キニ居ルノ故ヲ以テ沿海貿易ノ制度ハ各國劃一ナリト云フカ如キハ誤リナリ以下ニ述フルカ如キ種々ノ制度アルコトヲ知ラサルヘカラス第一 沿海貿易ノ權利ヲ内國臣民ニノミ許與シ而シテ特別ノ法律又ハ條約ニ依テ特許スルニ非ラサレハ外國臣民ヲシテ之ヲ享有セシメサル制度

其第一例ハ佛蘭西是ナリ佛國法律ニテハ外國臣民ニ沿海貿易ヲ禁シ(千七百九十三年九月二十一日ノ布達第四條參照)之ヲ犯ス者アレハ其船舶及ヒ積荷ヲ沒收シ且ツ罰金ヲ科スルモノト定メタリ然レトモ其後例外法ヲ設クルニ至レリ即チ千八百四十七年ノ法律

(暫時ニシテ廢止ス)ハ穀物類ノ沿海貿易ヲ外國臣民ニ許シ又千八百七十一年七月二十二日ノ法律ハ三箇月ヲ限リ佛國ノ一港ニ於テ葡萄酒ヲ積込ミ之ヲ同國ノ他ノ一港ニ運搬スルコトヲ外國臣民ニ許セリ
千八百七十七年迄ハ(千八百七十七年十二月八日附佛蘭西、西班牙間條約第九條及ヒ千八百八十二年二月五日附條約第二十九條參照)千七百六十一年、千七百六十八年及ヒ千八百十四年ノ條約ニ基キ佛國ニ於ケル西國臣民并ニ西國ニ於ケル佛國臣民ハ五ニ沿海貿易ニ從事スルコトヲ許サレタリ

千八百八十六年迄ハ伊國ノ汽船ハ佛國ニ於テ佛國ノ汽船ハ伊國ニ於テ五ニ沿海貿易ニ從事スルコトヲ得タリ又「アルジェリヤ」州ニ於テハ今日ト雖モ知事ノ公許ヲ受クルトキハ外國ノ船舶ニシテ沿海貿易ニ從事スルコトヲ得ルモノトス

其第二例ハ北米合衆國是ナリ北米合衆國ニ於テハ外國船舶ニ對シ貿易ノ目的ヲ以テ太平洋ニ面スル同國諸港ト大西洋ニ面スル同國諸港トノ間ニ航行スルコトタモ尙ホ且ツ之ヲ禁セリ然ルニ此ノ如ク沿海貿易ノ

內國船舶ニ限リ之ヲ許スモノトシ而シテ外國船舶ニ對シテハ條約ニ依テ之ヲ許スモノトセリ

第三 互相主義ニ依テ適宜ニ沿海貿易ヲ許スノ制度

伊國ニ於テハ沿海貿易ハ內國臣民ニ限リ之ヲ許スモノトナセリ但シ千八百五十五年ノ法律ヲ以テ互相ノ主義ニ依ルトキハ政府ハ外國船舶ニ沿海貿易ヲ許スコトヲ得ルモノト定メタリ

獨逸ニ於テモ沿海貿易ハ內國臣民ノ專有ニ屬スレトモ條約ニ依ルカ若クハ聯邦議會ノ意見ニ基キタル勅令ヲ以テスレハ之ヲ外國船舶ニ許スコトヲ得ルモノトナセリ(千八百八十二年五月二十二日附法律參照)

獨逸ニ於テハ伊太利、英吉利、白耳義、瑞典、諸威、丁抹、「ブラジル」ノ船舶ニ對シテハ勅令ヲ以テ沿海貿易ヲ許シ又壤地利、洪牙利、羅馬尼亞等ノ船舶ニ對シテハ條約ヲ以テ沿海貿易ノ權ヲ許與セリ

壤地利ニ於テモ他國ト同様沿海貿易ハ內國臣民ノ特有ニ屬スト雖トモ之ニ反スル特例アルモノハ此限ニ在ラス(千八百四十五年一月二十八日勅定)

沿海貿易問題ハ之ヲ研究スルニ從ヒ種々ノ異例ヲ發見スル

權利ヲ外國人ニ許與スルコトヲ好マサルニ拘ハラス其「カナタ」地方トノ商業上ニ於テ英國ヨリ與ヘラレタル或ル特典ノ報酬トシテ英國ノ船舶ニ向テ某太平洋及ヒ大西洋ノ諸港ニ於テ沿海貿易ヲ爲スコトヲ許スノ特例ヲ設ケタリ

第二 外國臣民ニモ亦內國臣民ト同様自由ニ沿海貿易ヲ許ス制度

其第一例ハ英國是ナリ英國ニテハ諸外國ノ船舶ニ沿海貿易ノ自由ヲ許スヲ以テ本則トセリ但シ英國政府ハ互相ノ主義ニ基キ英國ノ船舶ニ沿海貿易ヲ許サル外國ノ船舶ニ對シテハ勅令ヲ以テ其英國ニ於ケル沿海貿易ヲ禁止スルヲ得ルモノトセリ

其第二例ハ白耳義、荷蘭及ヒ葡萄牙是ナリ但シ葡萄牙ニ於テハ其本國內ノ諸港間及ヒ此等諸港ト所屬島嶼トノ間又ハ此等諸港ト西亞弗利加洲ニ在ル葡萄牙領地內諸港トノ間ニ於ケル沿海貿易ハ內國船舶ニ限リ之ヲ許スモノトナセリ故ニ外國船舶ノ享有スル沿海貿易權ハ其殖民地地内ニ限ルモノト云フヲ以テ寧ロ適當トス又荷蘭ニ於テハ蘭領印度ニ於ケル沿海貿易ハ

ニ至ルヘシ此問題タル各國各其國內ノ工業商業航海等ノ利益ヲ謀リ考定ヲ下スヘキモノナレハ各國ノ様ノ制度ナキハ事理ノ親易キコトナリ

茲ニ又沿海貿易ニ類シテ而シテ其實之ト同一視スヘカラサルモノアリ即チ寄港是ナリ寄港トハ外國ヨリ來航スル船舶カ一國內ノ數港ニ於テ順次ニ荷物ノ陸揚ヲ爲シ又外國ノ諸港ヘ運搬スル爲メ一國內ノ諸港ニ於テ順次ニ荷物ヲ積込ムコトヲ云フナリ若シ夫レ沿海貿易ニ至テハ外國船舶ニ對シ容易ニ之ヲ禁スルコトヲ得ヘント雖トモ寄港ニ至テハ則チ然ラス方今各國ニ於テ外國船舶ニ對シ條約ヲ以テ之ヲ禁スルコト甚タ稀ナリ何トナレハ之ヲ禁スルハ締約國雙方ノ爲メニ甚タ不利益ナレハナリ沿海貿易ヲ內國臣民ノ專有ニ屬セシムルノ利害ニ關シ明瞭ナル判斷ヲ下サント欲セハ先ツ其國ノ實益ヲ基礎トシテ研究セサルヲ得ス故ニ此問題ニ對スル答案ハ其場所ト場合ニ依テ一樣ナラサルモノト知ルヘシ

今日ノ日本國ニ就テ之カ判斷ヲ下ストキハ余ハ左ノ理由アルカ故ニ沿海貿易ハ內國臣民ノ專有ニ屬セシムルヲ以テ利益ナルヘシト信ス

第一 日本ニ於テハ今日商船業未タ發達セサルヲ以テ假令外國ニ於テ互相ノ主義ニ基キ日本船舶ニ對シ沿海貿易ヲ許サハルモ日本ニ取リテ何等ノ不利益ヲ感スルコトナシ他日日本國民ヨリ其船舶ヲシテ外國ニ於テ沿海貿易ヲナサシメンカ爲メ外國船舶ニモ同様ニ日本國ニ於ケル沿海貿易ヲ許サレンコトヲ日本政府ニ請求スルニ至ルコトアルヘシ是レ固ヨリ深ク冀望スルトコロナレトモ今日ノ勢ニテハ此ノ如キ時機ノ到來スルコトハ尙ホ近キニアラサルヘシト思考ス

第二 日本國商船業ハ其發達ノ度尙ホ低キヲ以テ外國船舶ノ來テ沿海貿易ノ競争ヲ試ミルコトアルトキハ該業將來ノ進歩ヲ妨クルノ虞アリ

第三 日本國ノ農産物、海産物及ヒ水産物ニ係ル數種ノ事業ヲ振起シ以テ富源ヲ擴充セシメント欲セハ宜シク航海業及ヒ航河業ヲシテ一層隆盛ナラシムルコトヲ要スヘク且ツ外國大資本家又ハ完全ナル組織ヲ有シ且ツ經驗ニ富ミタル外國船舶ノ競争ヲ防キ内國臣民ノ大奮發心ヲ喚起スルヲ以テ目下ノ急務トス

第四 日本ニシテ第一等ノ工業國タラシコトヲ勉ムルモ徒

信シタルニ基キタル意見ナリ

然レトモ若シ日本國ニシテ余カ信スル如キ希望ヲ有セサルモノトセンカ然ルトキハ外國船舶ニ對スル沿海貿易ノ禁止ハ反テ日本國ノ商業擴張殊ニ内地進歩ノ妨碍トナルヘシ故ニ本問題ノ如キハ實際上ノ利害如何ヲ考察シテ始メテ決スヘキモノナレハ單ニ沿海貿易權ヲ内地臣民ニノミ許與スルヲ欲スト云フヲ以テ足レリトセス須ラク内國臣民ヲシテ自ラ進ンテ沿海貿易ニ從事セサルヘカラス若シ然ラスシテ獨リ外國人ニ禁セントスルトキハ反テ日本國理財上ノ進歩ニ妨害ヲ爲スニ至ルヘシ

四〇二 明治三十五年五月三十五日 上奏案

條約改正上奏案

右議院法第五十一條ニ依リ提出候也

明治二十五年五月二十五日

提出者

鈴木昌司 三崎龜之助 加藤平四郎

ラニ非常ノ資本ト勇氣トヲ勞費スルノミニシテ其計畫ヲ全フスルコト能ハサルヘシ然レトモ日本ハ第一等ノ農業國及ヒ第一等ノ商業國タルヘキ資格ヲ備ヘリ即チ土地ト海トハ日本臣民ノ勞働資本ニシテ日本ハ海ニ因テ以テ第一等ノ商業國トナリ一強海國トナルコトヲ得ヘシ前ニ沿海貿易ヲ内國臣民ノ專有ト爲スヲ利益ナリト述ヘタル所以ハ即チ日本將來ノ航海業ノ必ス隆盛ニ至ルヘキヲ豫察セシト且ツ日本ノ海員ヲシテ増加セシメ航海ニ熟練ナラシメ容易ニ其力ヲ用フルノ道ト其生計ノ法ヲ得セシムル爲メナリ對外策ノ點ヨリ言ヘハ日本ハ一強海國タラサルヘカラス而シテ一強海國タランニハ夥多ノ海員ヲ募集セサルヲ得ス

商船乗組員即チ水夫、職工、水夫長ノ如キ人員ヲ増加スルハ海軍海員ノ組織上ニ於テモ、軍艦ノ嚮導ヲ解クニ因テ上陸シ及ヒ海軍ノ現役ヲ終リタル者ノ生計上ニ於テモ又平時海軍海員定員上ノ點等ニ於テモ海軍ト密接ノ關係ヲ有スルモノナリ

以上述フル所ハ日本國カ其商船ノ航海業ヲ擴張セント希望シ而シテ之ヲ擴張スルコトハ敢テ爲シ得ヘキコトト余カ確

鵜飼都次郎 稻垣 示 島田 三郎
尾崎 行雄

賛成者

長谷川 泰 松村文次郎 加藤勝彌
西瀉爲藏 丹後直平 立川雲平
武者傳二郎 加藤興次兵衛 杉田定一
石田貫之助 小倉良則 柳喜洋芽
山田武甫 工藤行幹 武市安哉
森 東一郎 改野耕三 朝長慎三
山田嘉穀 小笠原貞信 佐藤八郎右衛門
鈴木萬次郎 小林樟雄 高瀬藤次郎
佐野助作 伊藤大八 愛澤寧堅
野出鎬三郎 東屋平太郎 天春文衛
岡田孤鹿 岩崎萬次郎 河野廣中
小野吉彦 武石敬治 江原素六
長谷場純孝 堀部彦次郎 小柳卯三郎
野口 聚 植木志澄 野口勝一
山田東次 高梨正助 加賀美 嘉兵衛
田中源太郎 丸尾文六 中野武營

箕浦勝人 室孝次郎 達谷篤信 敬
都崎秀太郎 倉田準五郎 廣住久道
波多野傳三郎 魚住逸治 丸山名政
色川三郎兵衛 守野爲五郎 高須峯造
福田久松 本山健治 佐藤文兵衛
佐々木松坪 狩野揆一郎 内藤利八
角田眞平 上田農夫 犬養毅
目黒徳松 小西甚之助

衆議院議長臣某誠恐誠惶頓首頓首謹啓

敬聖文武天皇陛下ニ上奏ス臣某等

立憲ノ聖世ニ生レ人民ノ推選ニ由リ叨リニ乏ヲ大猷
贊盡ノ鴻任ニ受ク豈ニ鞠躬盡瘁

陛下ノ聖明ニ答ヘ人民ノ附托ニ副フコトヲ期セラレンヤ
伏テ惟ルニ

皇祖國ヲ開キ統ヲ垂レタマヒシヨリ茲ニ二千五百有餘年
天子聖明臣民忠勇以テ内ヲ綏撫シ以テ外ヲ懷柔シ國威煌
耀未タ曾テ汚濁セサ也降テ嘉永安政ノ間ニ至リ幕府
政ヲ失シ海内鼎沸復タ國是ノ歸向スル所ナシ而シテ

ハシメ曾テ之ヲ忽諸ニ付セサル也而シテ有司屢々蹉
跌シテ未タ

陛下ノ軫念ヲ安セサル所以ノ者ハ廣ク之レヲ國論ニ詢ハ
サルノ致ス所ナリ臣某等竊カニ列國ニ觀ルニ國交ノ
事ハ國論ニ決シ廷臣ノ專行ヲ許サ、ル也我國何ソ獨
リ然ラサラン惟フニ有司ヲシテ彘キニ此ニ慮ル所ア
ラシメハ條約改正ノ事或ハ肅斧ヲ揮テ朝菌ヲ斬ルノ
快アラシ何ソ又タ今日ノ議アルヲ要センヤ夫レ條約
ノ締結ハ

陛下大權ノ存スル所臣某等敢テ猥リニ議ス可キニアラス
然レトモ

陛下已ニ萬機ハ論ニ決シ盛ニ經綸ヲ行フヲ以テ天神地祇
ニ誓フ則チ國民ノ心ヲ以テ心ト爲シタマヘリ臣某等
誠惶頓首謹テ衆議院ノ公議國民ノ輿論ヲ
聖聽ニ達セン曰ク治外法權ノ撤去海關稅權ノ回收沿岸貿
易ノ禁止國家ノ法律ニ屬スヘキ事件ノ拒絶等ニシテ
對等條約ノ締結是ナリ

陛下聖德宏太聖容レサセタマハサル所ナシ伏シテ冀ク
ハ輿論ノ在ル所ヲ採納セラレ速ニ有司ニ勅シテ條約

列國此際ニ乘シ我ニ逼リテ非理ノ條約ヲ締結セシム
陛下聖明ノ德ヲ以テ此間ニ登祚シ深ク皇道ノ陵夷紀綱ノ
壞類ヲ赫怒シタマヒ錦旗一タヒ動テ宏規維レ新タニ
洪楨維レ革ル然レトモ獨リ非理ノ條約ハ未タ更革ス
ル所ナクシテ法權渠ニ及ハス稅權我ニ復ラス國權ノ
胃蝕焉ヨリ大ナルハ莫シ臣某等思フテ茲ニ至ル毎ニ
未タ曾テ慷慨痛哭セシムハアラス蓋シ治外法權ノ撤
去セサル海關稅權ウ回復セサル一ハ則チ渠ノ我ニ在
ル者ヲシテ我法度ノ外ニ立タシメ我ノ渠ニ在ル者ヲ
シテ渠カ法度ノ中ニ服セシメ一ハ則チ渠ノ我ニ輸ス
ルモノヲシテ我稅權ヲ制セシメ我ノ渠ニ輸スルモノ
ヲシテ渠ノ稅權ニ屈セシム是ヲ以テ法網縻痺シ外人
跋扈シ商工萎靡シ民力凋羸シ終ニ抹フ可カラサラン
トス之ヲ要スルニ當時上下恬熙有司盲昧宇内ノ情勢
ニ通セサルノ尤ニ坐セシムハアラス是レ國民ヲ舉テ
寸時モ條約改正ヲ忘ル能ハサシムル所以ナリ
陛下ノ至聖至明ナル夙ニ茲ニ察スル所アリ明治四年全權
大使ヲ歐米各國ニ派シ條約改正ヲ議セシメタマフ爾
來二十有餘年在廷ノ有司ニ勅シ銳意勵精事ニ茲ニ從

改正ヲ決行セシタマハンコトヲ臣某等誠恐誠惶頓首
頓首謹テ
上奏ス

條約改正上奏案理由書

本邦ト締盟各國トノ條約多クハ幕府ノ締結ニ係ル其國權
國利ヲ侵害スル者蓋シ尠シトセサル也抑モ國家ノ統治權
ハ 天皇ノ總攬シ給フ所苟モ之ヲ侵蝕ス其ノ條約ハ一日
モ存スヘカラス各國若シ我ニ向テ對等條約ノ締結ヲ拒マ
ハ我ハ時限ヲ刻シテ我カ現行條約ノ廢棄ヲ布告スルノ止
ヲ得サルヲ信スル也

- 一 治外法權ヲ撤去スルコト
- 一 稅權ヲ回復スルコト
- 一 沿岸貿易ヲ禁止スルコト

以上ハ即チ現行條約上改正ヲ要スル條款ナリ

一 内地雜居ハ一般ニ外國人ノ自由ニ任スルモ北海道沖
繩縣ハ特ニ區畫ヲ限定シテ之ヲ許シ其他ノ島嶼ハ一
切之ヲ禁ス

一 土地ノ所有鑛山鐵道運河船渠造船所ノ所有權及營業

ハ之ヲ許サス

以上ハ則チ國家ノ法律ヲ以テ隨意規定スヘキ條項ナリ

一凡一國ニ許シタル報酬アル特權特許及特免ハ之ト
同種又ハ同價ノ報酬ヲ得ルニ非サレハ他ノ締盟國
ニ許サ、ルコト

一我締盟各國カ最惠國條款ニ因リ他ノ各國ニ與フル
特權ハ我モ亦タ同シク之ニ均霑スルコト

以上ハ則チ對等條約締結ノ爲ニ要スル要件ナリ
斯ノ如キハ則チ本員等カ條約改正ニ對スル冀望ナリトス
條約改正ノ事ハ 天皇大權ノ存スル處然レトモ本員等ハ
之ニ對スル衆議院ノ意向ヲ表白スルノ本分アリト信シ茲
ニ上奏案ヲ提出シテ本院ノ贊成ヲ要ムル所以ナリ

附錄一 日 墨 締 約 一 件

一 明治十五年十月三日 高平臨時代理公使ヨリ
井上外務卿宛

日墨締約ニ關スル件

附屬書一 墨西哥公使ロメロヨリ高平代理公使宛書翰

二 墨西哥國政府ヨリ在米ロメロ公使へ宛テタル書翰

三 高平代理公使ヨリ墨國公使宛書翰

附記 千六百年代墨西哥ト日本トノ修好通商ニ關
スル略史

第四十二號

十一月二十一日到

去月廿一日下官儀國務省ニ於テ當府在留墨西哥國公使ニ選
近致候節慶長年中伊達政宗羅馬國へ使節派遣ノ節其一行墨
西哥國ヲ經過致候事ヨリ當時我國ト同國トノ交際ニ付該公
使ト談話致候趣有之候處其序同公使ハ前統領「グラント」
氏ヨリ會テ談話ノ趣有之我國ト結約通交ノ儀ニ付同國政府
へ申立置候趣有之旨下官へ内話有之候處其後同公使ヨリ別
紙一號ノ書面差越シ二號及三號ノ通右公使ノ申立ニ對スル
墨西哥政府ノ回答書并昔年我國ト同國トノ交際ニ關スル記

附錄 日墨締約一件 一

事一卷送致有之候ニ付來意ノ趣ハ早便閣下マテ上申可致旨
別紙四號ノ通同公使へ回答致置候間左様御了承有之度候然
ニ右交際記事ノ儀ハ西班牙語ヲ以テ記載有之候ニ付五號ノ
通英語ニ反譯爲致候間御一覽有之度此段得貴意候也
明治十五年十月十三日

臨時代理公使 高 平 小 五 郎

外務卿 井 上 馨 殿

附屬書一

(別紙) 壹號

墨西哥公使ロメロヨリ高平代理公使宛書翰

謹啓陳者本月二十一日木曜日國務省ニ於テ御面晤之儀ニ付
千八百七十九年墨是哥府ニテ西班牙語ヲ以テ刊行相成候
「ヒストリカル、アツコイント、オフゼ、ポリチカル、エ
ンド、コンメルシアル、インテコロールス、ビツウエー
ン、メキシコ、エンド、シヤパン、オン、ゼ、セブンテー
ンス、センチュリー」第十七世紀中墨是哥及日本間交際通